THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年 第九號

（第二百廿二號）

十月一日　發行

中央公論

秋期大附錄號

次號豫告

我「中央公論」は愈々來る十月一日を以て「秋期大附錄號」を發行せんとし左の諸大家より寄稿の快諾を得たり

小說

小栗風葉氏

德田秋聲氏

佐藤紅綠氏

生田葵山氏

國木田獨步氏

脚本

眞山靑果氏

尚論文に於ても現代第一流の名家に依囑しつゝあれば例に依て我文壇に貢獻すること大なるべきを信ず

中央公論第二十二年第九號目次

▲公論（一……四〇）

日露協約成る。日韓協約を評す……社論

文明と犯罪……法學博士 小河滋次郎

第廿四議會……圓城寺清

清國民心の統一……中島半次郎

須らく國史を改修すべし……向軍治

東京遊學者の心得……德富蘇峰

▲海外新潮（四一……四七）……戶川秋骨

▲英佛西の關係を論す▲人種問題▲戰爭は必至なり

▲說苑（四八……九七）

正岡子規論

○子規先生……佐藤紅綠

○子規論……佐々醒雪

○正岡子規の人物……內藤鳴雪

○明治文壇四天王の一人……巖谷小波

○子規子と寫生文……坂本四方太

○子規と和歌……伊藤左千夫

○子規子に就き……岡野知十

○故子規子に就いて……柳川春葉

○子規に對する雜感……戶川殘花

○子規子……角田竹冷

○正岡子規君……伊藤松宇

○子規書簡集を讀む……沼波瓊音

○正岡さん……大谷繞石



東西比較楊柳美觀論……………畔柳芥舟
故大槻磐溪の逸事……………大槻文彦
尾崎紅葉……………塚原澁柿園

▲海內思潮（九八……一〇二）
▲日露協約と世界▲俗識と學識▲學校生活と社會生活

▲詞藻（一〇三……一六八）
死人（小說）……………佐藤紅綠
金魚（小說）……………「並木」の副主人公 原某
故鄉（小說）……………水野葉舟
勝公（小說）……………田山花袋
日の翼（新體詩）……………三木露風
扇（新體詩）……………吉野臥城
青葉の下（新體詩）……………細越夏村
月光（和歌）……………前田夕暮
和歌……………尾上柴舟選
俳句……………大谷繞石選

▲評論（一六九……一七二）
避暑とは何ぞや……………若逕生
首相の統監歡迎……………野逸道人

▲文藝時觀（一七三……一七八）
可笑味のなき文學……………光風子

▲雜俎（一七九……一八四）
我輩も猫である……………小室白也

▲新刊批評數件（一八五……一九〇）



第二十二年
第九號
（第二百二十二號）

日露協約成る

（一）

日露協約成り、八月十五日（露曆八月一日）官報號外を以て發表せられたり、其の全文は下の如く甚だ簡單なり。

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ幸ニ日本國及露西亞國間ニ克復セラレタル平和及善鄰ノ關係ヲ鞏固ナラシメムコトヲ希望シ且將來兩帝國ノ關係ニ於ケル一切誤解ノ原因ヲ除去セムコトヲ欲シ左ノ條款ヲ協定セリ

第一條

締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ現在ニ於ケル領土保全ヲ尊重スルコトヲ約ス又締約國間ニ謄本ヲ交換セル締約國ト清國トノ現行諸條約及契約ヨリ生スル一切ノ權利（但シ機會均等主義ニ反セサル權利ニ限ル）竝一千九百五年九月五日即露曆八月二十三日「ポウツマス」ニ於テ調印セラレタル條約及日本國ト露西亞國トノ間ニ締結セラレタル諸特種條約ヨリ生スル一切ノ權利ハ互ニ之ヲ尊重スルコトヲ約ス

第二

兩締約國ハ清帝國ノ獨立及領土保全竝同國ニ於ケル列國商工業ノ機會均等主義ヲ承認シ且自國ノ執リ得ヘキ一切ノ平和的手段ニ依リ現狀ノ存續及前記主義ノ確立ヲ擁護支持スルコトヲ約ス

右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月三十日即露曆一千九百七年七月十七日(七月三十日)聖彼得堡ニ於テ本書ヲ作ル

本野一郎

イズウォルスキー

ポウツマス條約を以て一時の休戰條約に過ぎずと做し、兩國互ひに再び砲火を交換せざる可らずとせる日露官民間の猜疑、嫉視、恐怖、憤怨等一切不良なる誤解は總て此の協約に由て一掃せらるべし、素より日英同盟の如く、直接的積極的に或るものは得べからずとするも、爭鬪紛亂を避けて平和を存續するの效果は十二分にあり、此の平和こそは、日露兩國民を始め世界の歡迎する所にして、而して兩國間の平和的諸事業は、之より大に進歩し發展するや論莫かるべし。

（二）

吾人は日露協商に就て頗ぶる多くの感興を催ふすを禁ぜず

東は樺太千島の方面より、北は朝鮮滿洲の方面に於て、日本と最も利害の交涉深きを露國とす、清國とも素より相近接すると多しと雖も、清國は素より我が憂患を爲すものに非ず、唯だ露國は五十年前既に樺太問題に於て我と折衝したるとあり、交涉實に一日も斷絶するとあらざりき、故に我が政府に眞に外交らしき外交あるに至るや、露國との關係を如何にすべきかは、實に大なる問題なりき

吾人の記臆する所に依れば、適切に山縣侯の意思を發表すべき或る政論家は、極めて率直に北守南進說を主張したりき、說の主意は、日本の國狀として先づ露國と親善し、淸韓との現狀を支持して更らに多く力を南洋の經略に用ひ、我が勢力、商業、殖民を南洋方面に發展すべしといふにあり、露帝の戴冠式に臨み、直接に露廷の大官と交涉する所ありし山縣侯は實に斯の如き意思を懷けるとありし也、但し此の意見が始終侯の懷抱なりしとは信ず可からず、現に露國とも戰ひ、韓國を保護國としたるが如き北守南進に反對する政略は、侯の系統を傳承せる政治家に依て遂行せられたれば也、少くも侯は南守北進の政略に贊成したるものと視ざるを得ざれば也

伊藤侯は未だ山縣侯の如く率直に外交意見を發表したるとなしと雖も、亦少くも親露の方針を抱きたりと信ずべき理由多し、勿論伊藤內閣の當時に英國に公使たりし加藤高明氏の如きは、明白なる親英主義を把持して多く施設する所あり、伊藤侯も亦素より親英主義なりしも、然かも亦之がため露國を敵視する心なかりしや勿論なりとす

我が國民の多數は、樺太問題以來、殊に日淸戰役の結末に於て、露國が獨佛を提げて干涉したる以來、必らず一び之に酬ひて甘心せんとしたりき、乃はち敵露主義なりしや言を俟たず、然れども聰明なる政治家は此の國論に盲從するとを爲さず、英露孰れかと握手するに非ずんば到底事を爲す可らずとし、此の兩國撰定に就て少からず頭腦を病ましめたりき、蓋し北淸團匪事件以後、世界外交の舞臺は東亞に移りて、而して我れ重要なる地位を占むると同時に、英露孰れかに結托するに非ざれば、孤立能く成す莫き

に至れるを以て也。

（三）

第二流内閣といはれながら、其の實最も識慮あり、最も多くの事功を擧げたる桂内閣は、殊に外交に重きを措きて、英露孰れかを撰ぶに多くの注意と手段とを執りたりき

加藤氏に次て英國の公使たりし林男も、亦英國と握手するに努め、桂内閣の外務大臣たりし小村氏も百方之を慫慂したりしも、英國は其の所謂光榮ある孤立の地位を守りて容易に握手すべく其の右手を出さゞりき、玆に於て多智多算なりし桂内閣は、都築馨六氏を隨へて歐洲に遊べる伊藤侯に托するに、露國と一種の協約を結ぶべきを以てし、伊藤侯之を領して將さに露都に入らんとしたりき

吾人は未だ當時伊藤侯が協商せんとしたりし日露親善の條件の如何なるものたるかを知ると能はず、多くの説者は韓國を日本に一任すると同時に、滿洲を露國に一任せんとする所謂滿韓交換主義なりしともいふ

然るに英國政府は、俄かに進んで日英同盟を作るべきを提言し、我れ亦悦んで之に應じて玆に端なく其の調印を看るに及びしかば、伊藤侯は途中に於て其の使命を捨てざるを得ざるに至りたりき

桂内閣は英國政府を激して速かに同盟を締結せしむるがため、故らに親露の態度を示したりしや否やは吾人未だ判知する根據を有せずと雖も、京童の多くは當時實に伊藤侯が出し拔かれたりとて憤激したりしと傳ふ、然れども日英同盟なるもの何ぞ侯の惡感を招くべけんや、若し少しにても伊藤侯の氣色を

損せしとせば、汗は恐らくは恰かも桂氏小村氏の政略に使用せられたるが如き形跡あるがためなりしなるべし、然れども是れ必らずしも事實に非ず

日英同盟は國民の最も熱烈に歡迎する所なりき、是れ英國の如き强大國と同盟し、光榮ある孤立の地位を守れる英國をして其の傳統の政策を捨てゝ、遠く我れと同盟せしめたるが如きは、啻だ我が國の地位を高めたるに止らず、之に由て我が國民の深く憎惡せる露國に報復するに、至大なる便宜を得たりしと信じたるに由る

斯くして我が問題は解決したりき、我れは竟に英國を撰びて露國を捨てたりき、嗚呼是れ天意乎、恐らくば天佑乎

（四）

聰慧なる桂内閣が日英同盟を締結したりし後、露國の滿洲に於ける經略は益々無遠慮に强行せられたりき、其の無遠慮なる手は韓國の北方に伸び、韓國の宮廷にまで及びて、其の壓迫は殆んど極點に達したりき、日英同盟を結べる桂内閣は、同盟成立の翌年を以て新たに折衝を始め、幾多曲折の後、竟に外交々渉を斷絶するの果斷を敢てしたりき

是より生ぜる戰役は、天運未だ露國に與みせず、露國政府は竟に韓國に於ける日本の宗主權を承認すると共に、樺太の南半を日本の領有に歸し、南滿洲の經略を放棄して其の鑛山鐵道を擧げて日本に附與し、旅順大連の租借權をも日本の手に歸したりき

然れども斯く定めたるポウツマス條約は、單に一個の休戰條約に過ぎずと露人の或るものは曰ひ、其の軍人等また往々にして日本に報復戰を挑むべしと曰へり、此がため日露兩國民の間には、實に少からぬ猜疑、嫉視、恐怖、憤怨の介在するありて、不良なる誤解の暗雲兩國の間に横はるを免かれざりき然るに七月卅日の協約によりて、此の暗雲を一掃したるは、實に兩國の幸福也、而して又世界の幸福也

（五）

日露協約の外、別種の密約あるとは勿論なるべし、唯だ清國の面目のため、之を發表せざるならん吾人の聞く所に據れば、露國は之を東方に失して桑楡に收むるの作略乎、蒙古方面を其の勢力圏内に入れんと期圖せしもの丶如し、然れども日本は容易に之を承認せず、僅かに漠然たる語句を以て之を規定するに過ぎざりしに、韓國密使問題よりして、韓國王の讓位事件起るや、露國政府は直ちに日本に示すに韓國は日本の自由に任ずる代り、蒙古に於て別規定を設くるとを欲するの意を以てしたりといふ、露國が其の國會解散、一揆騷動等のため内治繁忙を極めてまた他を顧慮する遑なきが如き時に方っても、尚ほ外交上の機會を捕捉するに拔目なきは、思ふに我が外交家の以て模範とすべきものならん、吾人は實に之に嘆服せざる能はず

此のため、西園寺内閣は元老大臣會議を開きて、兎も角露國の提議を容れ、韓國に於ける我が手を全然無制限に自由ならしむると共に、蒙古の或る部面に於ける露國の勢力を承認するに決したりといふ、日露協約が早く七月廿日頃に發表せらるべくして聊か延引せし(七月卅日まで)は、全く此の交渉の故な

りしと聞く

吾人は未だ悉く此の傳説の眞なることを裏書するを得ず、霞ヶ關の官僚は、市内の新聞記者を集めて、外蒙古問題を全然打消し、是れ協約第二條の清國の獨立保全に反對すと明言したれば也、但だ外交當局の明言を正直に承認して、一より十まで總て其の如しと做すは餘りに幼稚也、吾人は機微を情勢の自然に察して其の眞相を推知すべきのみ

一たび國民の輿論に聽きて露國と開戰したりし我が政治家は、賢からざりし國民の輿論に反して敢てポウツマスの條約を成立せしめたりき、此がため帝都に於ける燒擊事件をすら生出し、而して内閣竟に更迭するまでに至りたりき、然れども國民も亦竟に覺醒したり、戰爭中に昂れる感情の漸く冷却すると共に、露國と親善するの却つて利益なるを悟るに至りたりき、英國と同盟を重ぬると共に、亦露國と協約して眞の平和を得、之に依て富國の浩業を建設するの賢なるを悟るに至りたりき、蒙古問題或は他年の宿題として殘さるべきも、日露兩國の間に、滿韓方面の平和を約したるは、國民の擧げて歡呼し喝采する所にして、惟ふに西伯利亞の開拓に活眼を有する露國人も、亦大に此の協約を歡迎すべきか。

此の協約の結果は、思ふに日露間、殊に西伯利亞と我が北日本との通商關係に大發展を見るべく、彼我風氣の相化する頗ぶる大なるものあるべし、吾人は殊に我が北日本の奮發開進を促さゞるを得ず。

日韓協約を評す

（一）

所謂韓皇の密使事件なるものは、吾人の前號に詳述したりしが如く、此の記事の世に出でたる前（即ち本誌前號の發行日）には、既に新協約の締結を見たりき

此の協約は、伊藤統監より七月廿三日を以て韓國の閣臣に內示し、廿四日彼我公然の會見を重ね、其の夜午前一時（事實は廿五日）を以て調印せられ、廿五日午前我が樞密院の諮詢を經て午後三時官報號外として發表せられしなり、全文に曰く

日本國政府及韓國政府ハ速ニ韓國ノ富强ヲ圖リ韓國民ノ幸福ヲ增進セムトスルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條

韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト

第二條

韓國政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政上ノ處分ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコト

第三條

韓國ノ司法事務ハ普通行政事務ト之ヲ區別スルコト

第四條

韓國高等官吏ノ任免ハ統監ノ同意ヲ以テ之ヲ行フコト

第五條

韓國政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ韓國官吏ニ任命スルコト

第六條

韓國政府ハ統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ傭聘セサルコト

第七條

明治三十七年八月二十二日調印日韓協約第一項ハ之ヲ廢止スルコト

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十四日　統監　侯爵　伊藤博文

光武十一年七月二十四日　内閣總理大臣勳二等　李完用

韓國の施政改善を指導し、法令の制定及び重要なる行政上の處分並びに高等官吏任免に承認不承認同意不同意の權を有する統監は、幾んど一種の韓國王なり、若し此の協約を文字通り强烈なる意味に勵行せば、韓國は幾んど統監の權下に在りと謂ふも不可なし、玆に於て統監其の人の威信や實に重且つ大なるものあり、韓國をして事實日本に合併せられたると同一ならしむと否とは、一に繫つて統監の實行如何に在りとせざる可らず

（二）

伊藤統監の自から語る處によれば、韓皇の密使を派遣したりし事實は、統監早くより之を偵知し、密かに韓皇を諷刺し、且つ日本政府の當局へも通知し置けりといへり、吾人の聞く所を以てするも、日本政府は密使派遣の事を知ると同時に、在海牙の都築使節に電知し、併せて列國外交當局にも内報する所

あり、且つ此の結果韓皇の責任を問ふに相當なる態度を執るの方針をも豫定し置けりといふ、彼の狂的怜悧にして其の實常識なき韓皇が、伊藤侯の諷諫を輕視し、心中之を冷笑したりし愚や實に嗤ふべし。

林外務大臣の京城に急行するや、韓國の君臣は多く韓皇日本に幽閉せられ、且つ韓國を擧げて日本に合併せらるゝものと思惟せるが如し、現に林外務大臣の京城に來る實に此の使命を齎らしたるものと思惟したりしに似たり、韓國の閣臣が非常の決心を以て韓皇に讓位を迫りしは、必らずしも之を機會として人民に不人望なる韓皇を廢せんとせしには非ず、實に讓位を以て日本の要求を防止せんとしたりしのみ、伊藤統監の如きも、此のため頗ぶる其の情を脆くしたるも、竟に勇氣を揮ひ起して協約を締結するに至りしと聞く。

今韓國合併を強行すると必らずしも難事にあらず、露國とは既に内交渉を遂げ、他の列國また何等異議を挾むものなければ也、然れども合併に伴ふて第一に顧慮すべきは、韓國統治の費用を擧げて日本の負擔に移し、我が財政に少からざる重さを加ふると也、第二韓皇廢止國家滅亡に憤激して儒生兩班の徒所在に擾亂を煽動すべく、從つて鎭壓すれば隨つて起り、暫らくは平和安寧を保持し得ざる恐れあると也、故に名を避けて實を取り、事功を急にせずして漸次に實蹟を平和の間に擧ぐると、寧ろ日本の利益なりとは、伊藤統監の意見にして、合併論を主張したりし山縣侯の如きも、竟に伊藤侯の議論を可とするに至りしといへり。

（三）

元老大臣會議なるものあり、山縣、松方、井上、桂の諸氏、及び國務大臣の一部又は全部を加へて之を開く、此の開始は實に桂内閣の露國と開戰したりし時にありて、殊に講和問題の酣なりし頃より最も頻繁に開かれ、爾來西園寺内閣に至りても、重要なる對外問題の起る毎に之を開くの例なるに似たり、吾人の聞く所によれば、韓國を經營し、並びに日露戰役後、所謂戰後經營の方針を立て、列國殊に露國と親善する關係を成立せしむるとは、國家の大方針として決定せられ、何人か局に當り、何人の政府たる時も必らず之を行ふとし、此の方針を以て重要なる對外問題の起る毎に元老大臣會議を開くことしたるなりといふ、是れ政治上注目すべき一個の現象なり、必らずしも内閣の責任を他に分つと稱す可らざるも、内閣の更迭に由て漫りに外交方針を變易せざる近世的典式としては、殊に政治に心を寄するものゝ注意を逸す可らざるもの也

伊藤、山縣、松方、井上、桂の諸侯伯が元老となりて、聲望正さに之と相匹敵すべき大隈伯が元老の列に入らざるは何ぞや、政界の所謂消息通は解して曰く『大隈伯は明治十四年の立憲問題以來、信依す可らざる言動に出づると多し、殊に辯論の雄にして何等の問題にも先づ輕卒に獨斷の意見を發表し、爲めに鞏固なる一致を缺くの弊あり、其の主張また論客的にして現に戰後經營其の他の大問題に反對したると多く、到底元老として意見を同くし難きものあり、其の元老に加へらるべくして然らざるは此の故のみ』と、果して然らば伯たるもの大に心して可なり、近時伯が韓國問題に就て多く同情を伊藤侯に表し、口を極めて賞揚するが如き、是少しく自から省みる所ありしが故乎、非乎。

（四）

元老大臣會議に於ては韓國に對して十二分に强硬なるべしとする意向多かりしに似たり、蓋し伊藤侯が韓皇と締結したりし前回の協約は、韓國にして獨立の資格あらば何時にても保護を解くべきを約し、且つ單に外交權を管理するに止まれるを以て、之に不滿足を感ずるもの極めて多く、大抵は機會を捉へて必らず內治外交の兩管理權をも得ざるべからずと做したりき、韓皇の密使問題は正さしく此の機會を我に與へたるものにして、韓皇の措置を憤慨せる元老大臣多數の意向は、寧ろ進んで合併を斷行すべしといふに在りたりしが如し。

然るに露國先づ異議を挾むが如き態度を暗示し、倫敦タイムス亦日本が愼重に寬容ならんことを促がし、而して伊藤侯また大に玆に顧慮し、且つ財政上我が負擔を加重すべきをも理由として合併斷行を聽かざりしかば、元老大臣會議に於ても、英露の意向を底氣味惡く感じて竟に伊藤侯の說に從ふに決し、次て露國より內交涉あるや、直ちに之に應じて蒙古問題に讓步し、其の交換として韓國に對する無制限の特權を得て以て外交上些の故障なきを圖れりといふ、伊藤侯の韓國に於ける、勅命の外何物も之を動かす能はず、元老大臣會議と雖も之を奈何ともす可らざるも、外交上の大事には元老大臣會議の決定を俟つの內規あるがため、侯も亦其の會議の意向を全然無視する能はざりしなるべし

（五）

協約締結者は、其の主意名を捨てゝ實を取るにありといへり、果して然らば、韓國統治の形式體容は

其の問ふ所に非ずして實績を擧げ實効を收むるを以て其の主眼とせざる可らず、大化式を捨てゝ鎌倉式に由らざる可らず。

但し韓國民を救濟する最大急務あることを忘る可らず、然り、韓國民の生命財産を保護して以て其の堵に安んぜしめざる可らず、韓皇及び郡守等より無限に誅求せられ、誅求に應ずること能はざれば投獄せられ、拷問せられ、甚だしきは三族を夷せらるゝこと、實に韓國民の最大苦痛たり、而して之を救濟すること我が最大急務にして、天の明命に從ひ、仁義の大道を申ぶる所以なり

此がためには法を三章に約するも可也、新律綱領を布くも可也、要は實蹟を擧げ實効を收むるにあり、雨の如く法令を下して徒らに形式體容を整へんとするが如きは抑も末なり

且つ十二分に協約の効果を收むることは今日以後にあり、戰勝の餘威に乘じて貧弱爲す莫き韓國の君臣に臨む、如何なる協約を作るも素より我が意のまゝのみ、何ぞ伊藤侯にして始めて此の協約を成立せしむと謂はんや、何ぞ元老大臣會議を以て始めて能く之を爲したりと謂はんや、唯だ此の協約をして空文ならしめず、又徒法たらしめざらんと欲せば、殊に今日以後の實行に重きを置かざる可らず、伊藤侯が統監府に起居し、韓國の閣臣を延見して、單に大體を覽るのみなりし間は、必らずしも多く勞するの要なかりしなるべし、秕政あるも失敗あるも、統監には素より寸分の責任あること莫ければ也、今日以後は之に反す、統監が事實一種の韓王たる以上一切の責任は之に歸せん、一切の施設は其の手を煩はさん、伊藤統監今何ぞ僅かに協約の締結者たるに甘心して、此の難局を避くるの怯を敢てす可んや、能く身を

保つは明哲の事なりと雖も、責任を推諉して常に難局を避くるは勇士のせざる所也、否國士のせざる所也、恐らくば大政治家伊藤侯のせざる所ならん

吾人は尙ほ憂ふ、伊藤侯の鎌倉式の人に非ずして實に大化式の政治家たるとを、文物典章の燦然たるを好みて、クローメル卿の如き質實なる遺口を欲せざらんとを、唯だ四十年政局に立て多くの經驗を積める伊藤侯は、今にして賴朝たり泰時たりクローメルたるを難んぜざるべき乎、吾人は實に斯く期待す

(六)

吾人は玆に本問題に對する筆を擱くに當つて、一事の附記せざる可らざるものあるを思ふ、事は政略の秘策にして而して實に伊藤侯の進退に關す

伊藤侯の身事のみを慮かるもの、及び侯を擁して內閣に立つに非ずんば幾んど爲す無き一派の士は、日韓協約の意外に人望ありしを機として、伊藤侯の統監を辭職せしめんとしたり、以爲らく、韓國統治の難局は今日以後にあり、侯幸ひにして之に成功せば可なるも、一たび失敗せんか、實に第二の井上伯たらざる可らず、否、日本第一の元勳をして末路を謬らしめん、明哲身を保つ所以に非ず、寧ろ罷め歸りて新たに內閣の首班に立つに如かずと、此の考慮は一時頗ぶる有理なるものとして勢力ありき

斯くと看取したる內閣派の策士は、伊藤侯を罷めしめて代ゆるに桂伯を以てせんとしたりき、其の心揣るらく、桂伯若し成功せば、之を以て伊藤侯の締結せる協約の功に歸すべし、若し失敗せば、其の責任を擔はしめて幾んど再起し能はざる傷痍を負はしめん、且つ之に由て前內閣派の首領を不在ならしめ、

其の再起の便宜を奪ふと共に、伊藤侯をして現内閣後見の地位に立たしむるの便宜をも得べしと、彼等は斯くして伊藤侯歡迎の聲を大ならしめ、併せて其の方略の實行を期圖したりき。

現内閣反對者、殊に前内閣系の一派は、此の秘計に少からず恐慌を來せしが如し、彼等は此がため伊藤侯歡迎にも反對し、極力伊藤侯をして留任せしむべく企圖して、以て現内閣派の策士と對抗したりき、此の對抗は、伊藤侯が馬關に於て自から歸任して斷じて辭職の意なきことを明言せるに依て其の終結を告げぬ、策士の一は失望し、一は手を額にしたるべし、而して伊藤侯歡迎は其の反對者よりも極力主張せらるるに至りたりき。

吾人は誠心を以て伊藤侯の老軀韓國の事に盡瘁するを多とし、之に大なる敬意を表せざる能はず、唯だ一の協約成立に得意を催ふすが如き氣色あるを見て、私かに其の器度を疑ふのみ、侯にして眞に韓國の事の今日以後に在るを確信し、身を挺して其の難局に當るの心だにあらば、吾人は更に大に敬意を表せざる能はず、成敗利鈍の如き素より侯を褒貶するに足らざるのみ。

文明と犯罪

法學博士　小河滋次郎

光明の裏面には闇黒あり、ドヲソンウヰルが犯罪は文明に伴隨すと言ふが如く世の文明の進步に伴ひ闇黒の半面即ち國利民福を戕害する所の諸々の罪惡殊に所謂犯罪なるものゝ累年益々繁殖增加の傾向を免かれざるの事實あるを見るは國家の爲め誠に憂慮すべき現象なりと謂はねばならぬ、併し世人、動もすればこの現象に對して漫然唯だ驚異の感想を以て之を迎へ如何にして斯くも多數の犯罪を生ずることであるかと不思儀の念を抱き或は又所謂犯罪人なるものは吾々普通の人間とは一種異つた性情を有する特別の人間でゝもあるかの如くに速斷して唯だ一概に之を嫌惡擯斥せんとするの傾きあるを見るが是れも亦た甚だ謂はれなきことであると思ふ、多くの犯罪事實あるを見るは決して喜ぶべきことで無い、犯罪者の惡むべき且つ恐べき危險物であること亦た固より言ふを俟たざる所である、併しながら若し退て犯罪の因て起る所の根原を調べまた犯罪人なる者の個々の人格に就て精しく其性情境遇等を研究するの結果は犯罪、必ずしも深く以て憂ひとなすに足らず、犯罪者亦た敢て一概に嫌惡擯斥すべき人非人にあらざるを了解し得ると共に其間、自ら彼れに同情を寄せまた彼れを寬容するの餘地あるを發見するに至ることであらう。

モンチユーの說に人には誰れが本來の善人でまた誰れが本來の惡人であると云ふが如き區別は無い、非常に絕ぐれた少數の者は取除けとして最多數は即ち善惡相半ばしたる平均性能を有する所の者である、強き善の刺擊に逢へば善人となり強き惡の刺擊に遭へば惡人となる、吾々平均性能を有する多數の者は外的刺擊力の性質及び強弱に由つて善惡何れにも吾人の運命を支

せらるべきものである、若し夫れ惡の方面より之を見れば吾々多くの者は何れか是れ眠れる犯罪者に非らざるはなしてある、換言すれば即ち吾々の頭の中には犯罪者なる惡玉が宿つて安眠を貪つて居る、强き外部の刺撃に逢へば何時でも此惡玉が忽ち其睡りを覺ます、即ち此に吾人は犯罪者となつて現はるゝのである、世に所謂犯罪人なる者と雖も其平均性能に於ては敢て吾人と何等の差異あるにあらず、彼れは偶々不幸にして强き外部の刺撃の爲めに其抵抗能力を壓迫せしめらるゝに至つた者であると云ふことが出來る、結局は刺撃力の强弱如何と云ふの問題に歸するのであつて善人らしく見へる吾人の今日あるを得る所以のものは幸にして外的刺撃の吾人の頭に宿れる惡玉の睡りを覺ます力に乏しきが爲めて今日の吾人は明日の犯罪者なるやも測り知るべからず云々と言ふて居る、少しく奇矯に過ぐるの說き方のやうてはあるが兎角吾々は己れ自身を買ひ冠ぶるの弊がある、若し夫れ虛心平意に吾々日常の行爲若くは思慮の眞相に就て反省を試みたならば「吾が心、鏡にうつるものならばいかに醜くき姿なるらむ」てあつて時々善からぬ考へを起すことのあるのみならず時としてはまた現實に惡しき行ひを爲すこともある、犯罪に近き行ひ若くは既に犯罪と名けらるべき行ひをすることもある、少くも吾々と雖も常に犯罪をなすべき可能性を持つて居ると云ふことを自覺することが出來る、法律違犯の行爲之を犯罪と稱す、犯罪は社會に於ける罪惡の一小部分たるに過ぎぬ、世間には恐るべく惡むべき重大なる道德上の罪惡を犯しつゝあるに拘はらず、尙ほ大きな顏をして大道を濶步して居る者が少くないのみならず、立派に法律上の罪人と認め得らるべき者にして且つ法網を免かるるの僥倖を得て居る者が枚擧に遑まあらざるの實況である、是を以て之を見れは彼の所謂犯罪者となつて監獄に繫がるゝ者てあつても彼れに限りて特に惡むべく怖るべき別種の人間てゝもあるかの如くに其發生を怪みまた唯だ一概に之を侮蔑擯斥するに當らぬことが分かる、鐵窓の下に繫がれて居る赭衣の罪人を一見するときは

如何にも惡るいことでも爲そーな恐ろい獰猛の人相を備ひて居るかに直覺するのであるが是れは畢竟、色眼鏡をかけて此方から迎へて見るからのことである、聖人君子と言はるゝ人であつても若し之れに赭い着物をきせて鐵窓の中へ入れて外から眺めたならば矢張、他の惡棍無賴の徒と同じやうな惡相に見へることを免かれぬのである、罪人として監獄に繫がれて居る者と雖も必ずしも皆惡るい人間のみではない、相當に道理を辨へ人情に厚く、是れ程の人間がどうして犯罪などに陷つたかと不思儀に感ぜらるゝやうな者も少くないのであつて斯道に經驗ある先覺者の內には在監囚人の平均的道德の力は反て世人一般のそれに優さるものあるの事實を認むと言ふて居る者がある程の次第である、是れは吾々監獄當局者の總べてが親しく多くの囚人に接して經驗する所の事實であつて世人からは如何にも無情の者のやうに思はれて居る吾々監獄官吏は反て常に彼れの境遇に同情を禁ずる能はざるものあるに反し世人の多くは殊に上流社會の人は寧ろ彼れに非常の反感を有し「惡漢を待つこと尙ほ寬に過ぐ、彼れの監獄に於ける生活は多くの良民のそれに比して尙ほ遙かに優良なり、監獄の彼れを處遇すること更らに一層の苛嚴と峻酷とを加ふる所なからざるべからず」と鬼のやうな無情極まる要求を吾々に提出して居ると云ふの始末である、同情が道德の基礎であるならば斯ふ云ふ冷酷なる唯我獨尊の考へを持つて居る世人に比し寧ろ自ら痛く罪惡を悔て謹愼自遜して居る在監囚人の多くの者の方が遙かに道德力に富んで居ると言ふことが出來ると思ふ、マノブリエ曰く犯罪者として監獄に繫がるゝ所の者は恰も民衆と云ふ生洲の中から掬ひ上げられたる一小部分の群魚のやうなものであつてどちらかと云へば鈍間な不幸者である、大きな敏捷やつは巧みに網をのがれて安然として居るのと同じく多くの大罪を犯すやつは反て大手を揮つて大道を濶步して居るに反して比較的輕微なる而かも社會に實害を與ふることの尠いものゝ方が容易に發覺逮捕せられて終に世間より罪人視せらるゝやうなことになる、彼れは其實、不幸中の最も

不幸なる者であつて謂はゞ國法の顏をたてゝやるが爲めに無數の實質的犯罪者の身代りとなり犧牲となつたものたるに過ぎぬのである、云々と個樣にマノブリエは說て居る、此說も餘り罪人の肩を持ち過ぎた嫌ひなきに非ずと雖も其間、自らまた一理ありて所謂犯罪人なる者、世人の想像するが如くに必ずしも一概に嫌惡擯斥すべきものに非ず或は之れに向つて同情を表するの必要ある所以をも了解し得ることゝ思ふ。

我が監獄統計の示す所に由つて之を見れは每年平均二十餘萬人の者が刑法に所謂、重輕罪禁錮刑以上の處分を受けて監獄に入れらるゝことになつて居る、此外に年々罰金其他違警罪の拘留科料等の宣告を受ける者も亦た多數ある、是等の所謂犯罪人と認むべき總べての者を合計すれは其數實に七十萬人の多きに達することになる、然かも此數は決して實質的犯罪者の總べてを網羅したるものではなくマノブリエに謂はしむれば千萬群魚中の僅かなる一部分に過ぎぬのである、少くも世間には實際、犯罪の災難に罹つても其犯人の分らぬ場合がいくらもある、犯人は分つても或は之を内聞に濟ませ若くは之を追捕するとの出來ぬ場合も澤山ある、幸に檢擧其効を奏し犯人を裁判の手に委ぬることの出來た後に於ても證據不備、時効、酌量其他の種々の事由の爲めに處刑を苟免せらるゝ者も亦た少からぬ數であつて精確なる統計を作るの不可能なるは勿論であるが概略、先づ處刑者の倍數と見て大差なかるべしと學者は唱へて居るのである、然かも是れは餘程、内輪に見積つた所の計數であつて犯罪中最も多數を占むる所の窃盜の如きは其發覺就捕に至る者、被害件數の百に對する平均僅かに二一に過ぎぬと云ふ所より之を見れば倍數は愚か少くも總への實質的犯罪者の大部分は常に發覺就捕を苟免せらるゝの事實であると斷言し得るであろう、假りに犯罪統計表の上に現はれて居る數のみに就て之を見るも七十幾萬人と云へばてふど我が人口十萬人に對して二千人餘の犯罪者を持つて居る譯であつて之を倍數と見れば約百五十萬人、ちよつと東京全市の人口だけが年々實質の犯罪者として我が

國利民福を危害しつゝあることになる、我が今日の監獄に拘禁する所の囚徒の數は一日の平均、約六萬人、之を養ふが爲めには毎年凡そ六百萬圓内外の支出を要して居るが是れは犯罪に對する僅かに一部分の經費たるに過ぎぬのであつて裁判又は警察等に關する大部分の費用は同じくまた犯罪の爲めに支出を餘義なくせられて居る次第である、ゾイフエルトの推定に依れば獨逸が年々犯罪の爲めに直接、負擔する所の損害即ち監獄裁判、警察等に要するの經費は約一億萬「マルク」の多きに達すると云ふことであるが兎に角、吾々國民も亦た犯罪あるが爲めに監獄經費六百餘萬圓の外、尙ほ其他の必要機關を維持することに就て年々巨額の租税を負擔せしめられて居る事實である、然かも是等の多くは所謂泥棒に負ひ餞なるものであつて吾々は之を負擔するの前後に於て既に吾々の精神、身體又は財産の上に有形無形の損害を受け若くは迫害に備ふるが爲めに常に有形無形の損失を蒙りつゝあるのである、若し盡く之を金錢に見積ることが出來たならば公費と相併せて蓋し驚くべき巨額に達することであらう、換言すれば即ち犯罪の爲めに國家及び私人が直接及び間接に蒙りつゝある所の損害は殆んど測り知るべからざる夥しいものであると云ふことに歸着するのである。

犯罪が果して文明に伴隨するものであるなれば文運進歩の著るしき我國の如きは殊に年々犯罪の増加を致し前に述べたが如き之れが爲めに蒙るべき直接間接の損害は益々擴大せしめらるゝを免かれぬ譯である、實際また既往の經驗に由つて之を見れば例へば明治二十一年に於て有罪の裁判を受けたる人員三六〇、五二四なりし所のもの年々殆んど規則正しく累增して終に明治三十五年には其倍數以上、即ち七六四、九七〇人の數を見るに至れりと謂ふが如く犯罪が文明の進歩に伴ふの法則は最も適切に其活きたる事實を證明して居る次第である、是を以て之を見れば文明の進歩は寧ろ國利民福の爲めに望ましからぬやうにも思はるゝのであつて彼の文明を咒ふ所の古老の徒が動もすれば現代を悲觀して世は益々澆季に流れると嘆息するの無理からぬ

やうにも感ぜられざるにあらざれども是れは抑も時勢を洞觀する明なき皮想說たるに過ぎずして或は之を尙古思想の中毒と認めても宜いと思ふ、文明に伴ふて犯罪增加の傾向あるを見るは實際に爭ふべからざるの事實であるが然かも吾々が吾々の身體又は財產の上に若くは日常生活の總べての上に果して昔より今の方が不安全なりと云ふを得るや否や、老人などの話に昔しは雨戶をたてずに寐ても盜難に罹る恐れが無い、人前で嘘ふと云ふことが借用證文の有力なる制裁になることが出來たと云ふ、是れだけて聞けば如何にも文明の進まざる昔しの方が無事泰平てあつたかのやうに思はるゝが其實吾人の當然享有すべき權利すらも之を全ふすることが出來ぬのであつて吾人の身體、財產、自由、名譽等は容易に他の侵害を免かれざる極めて危險の狀態に曝露せられてあつたのである、巨萬の富を有する昔しの分限者は其居宅を城郭の如くに堅牢にし常に屈强の劍客などを抱て居つても尙ほ枕を高ふして安眠することが出來なかつたのであるが今は即ち如何なる財產家ても單に己れの財產を保護するの目的を以て家屋を堅牢ならしむるの必要もなく、貧乏人と同じく何等の危險なく安んじて其日を送ることが出來る、昔しは一寸內地を旅行するにも中々容易のことではない、無論女の獨り旅びなどの出來たものでない、追剝、胡麻の蠅の類は到る所に出沒し山賊群をなして白晝尙ほ剽掠の難あるを免かれず、文明の恩澤に浴せざる支那朝鮮の內地を旅行する者の今尙ほ實驗する所である、然るに我が文明の今日に於ける狀態は如何、百里の長程に上る者尙ほ旅行と云ふが如き觀念すらなきものゝ如く身に寸鐵を帶びず輕裝、以て到る所の山河を跋跡し得るの實況てあつて此くの如きは決して昔しに夢想も及ばざりし所であると思ふ、旅行の安全は文明の賜てある、精しく言へは文明に由つて人智、開け人智に由つて汽車汽船の發明を致し汽車汽船に由つて帆船又は山駕籠を排斥し海賊山賊さては追剝、胡麻の蠅の類をして其力を展ふるの餘地なからしめたるに由る、警察制度の周密を見るに至りたる所以のものは如何、銀

又は爲換制度の發達を見るに至りたる所以のものは如何、是等の制度が相依り相助けて多くの犯罪を不可能に餘義なくするに至らしめたる所以のものは如何、其基く所は即ち一として人智の開發せられたるが爲めに非ざるはなく人智の開發は即ち敎育普及、文明進步の結果たるに外ならざる次第である、果して然らば文明の進步は國利民福の爲めに決して憂ふべきことに非ざるのみならず之を發展助長することに向つて偉大なる力を與ふるもの否現實の上に與へつゝあるものと認めざるを得ぬ、單に文明が犯罪を伴隨増加するに至らしむと云ふの事實のみを見て直ちに世運澆季に趨くの證據なりと悲觀するが如きは蓋し文明を侮辱するの甚しきものであると思ふ。

　文明の進步は何が故に犯罪增加の現象を呈せしむるに至るべきか、此問題に就ては學者の間に根本から既に種々の異說あるを見る所であるが兎も角、社會的種々の關係が犯罪に對して至大の勢力を有すべしと云ふ實驗的事實を信認する上より之れを見れば犯罪の增加を必然ならしむる社會的原因の無數なる中に殊に人口及び法律の增加、警察の周到、權利思想の發達、經濟事情の變遷、犯罪の主體たるべき物件の增加等が蓋し其重もなる理由の一に數ふべきものであると思ふ、文明が進めば戶口が增す、戶口の繁殖は一面に犯罪人格の增加を必然ならしむると共に他面にはまた生存競爭の激甚を餘義なくす、生存競爭の激甚なるに從ひ劣敗者の一部即ち犯罪者の比較的增加を來たさゞるを得ざるは自然の勢であつて文明の力が容易に之を底止する能はざることは恰も汎濫せる洪水に對して堤防の崩壞せらるゝことあるを免かれぬと言つて堤防は無用なり、水害を防ぐの力なしと謂ふ能はざるが如く犯罪增加は必ずしも文明其れ自身の罪にあらず、文明が反つて多くの場合に於て啻だに消極的に犯罪を防止するの力あるのみならず積極的にまた大に吾人の福祉安寧を進めつゝあることを自覺せぬのである、都會繁華の地が犯罪者を出だすことの人烟稀薄の村落地方に幾倍するを免かれざるの事實は何人も能く之を知る所である

が然かも地方を捨てゝ都會繁華の地に蝟集し來る者の多き恰も蟻の甘きに就くが如き所以のものは何である、都會の地は即ち吾人の生活の上に利益を得るの多きが爲めであつて取りも直さず文明の恩澤に浴するの實例を示したるものに外ならぬのである、又國の法律なるものは要するに吾人の自由行動を制限する所の規則であつて制限規則の繁閑が違犯行爲即ち犯罪の多少に直接の影響を及ぼすべきは當然である、昔し漢の高祖の初て咸陽に入るや民の法三章を約したりと稱し又「イスライル」人は僅かに法十章を制して以て民を治めたりと傳ふ、其簡略なること誠に驚くべしと謂ふべく斯くの如くに人の自由行動を制限するの寛大なるの結果が犯罪行爲の少かるべきは固とより怪むに足らぬことである、然るに今の文明時代に於ける實況は即ち如何、法令の頻發せらるゝこと雨注も啻ならざるの有樣であつて尋常一樣の行爲と認めて居つた所のものも何時の間にか法令の爲めに是れが犯罪行爲に變質せしめられて居る、法律に衣食する專門家であつても禁令の總てを諳んずることは出來ぬ、況んや田夫野人に於てをやで彼れは裏山に入つて草を苅り下枝を截るの當然の業務なりと信じて毫も怪む所なきに何ぞ圖らん忽ち山林取締の違犯に問はれ又收穫の多きを計るが爲めに之れが適當なる肥料を用ふるの何等故障のある筈なかるべしと思惟して石灰を撒くの行爲は忽ちまた違警罪として所刑の不幸を見るに至るを免かれず、之を極端に評すれば彼の所謂蚩蚩蠢蠢の民、一度手を擧げ一たひ足を動かせば皆憲網の中に罹ると相撰ばざるものと謂ふべく行爲の性質及び分量は昔も今も敢て異る所はないのであるが唯だ法律が強て之れに犯罪の名を與へたまでに過ぎぬのである、法繁密なれは隨て犯罪の增加すべきは當然であるが、實質に於ては何ゝ新たなる危險の行爲が多く發生したと云ふ譯ではなく之を寛容した昔しの方が遙かに吾人に危害を加ふることが多かつたのである、天網恢々疎にして漏さずとは昔から言ひ傳へて居る所であるが昔しは天網甚だ疎であつたが爲めに其實、犯罪を漏す場合が極めて多かつたので

ある、各地到る所に惡漢群をなして白晝、尙ほ剽掠の害を逞ふするものがあつても之を制止し能はざりしの一事を見ても之を知ることが出來る、然るに今は警察制度が恰も蜘蛛の網を張つたが如くに周到完備して居るが故に如何に隱微の間に巧妙に行はるゝ犯罪でも容易に此網を潜つて踪跡を晦ますことの出來ぬやうになつて居る、小故も直ちに看破せられ微罪も忽ち檢擧せらる、許て罪となすの弊も亦た此に伴ふを免かれず、犯罪件數の增加を見る所以の偶然ならざるを知ると共に件數の增加は必ずしも昔に比して實質的犯罪の增加したものと認むる能はざるの理由をも了解し得るであらう、權利思想の發達は神經の過敏を促し從て又健訟の弊を助長するの傾きあるを見る、昔しは成るべく內の耻を外へ出さぬやうに努め大抵の事は家庭、親族、組合若くは隣佑鄉黨の間て納まりをつけたものである、然るに權利思想の發達は次第に個人本位の範圍を擴め其範圍の擴まると共に段々組合的制裁力の衰耗を餘義なくせしむるの結果、今ては即ち親子、同族又は主僕の間に於ける輕微の犯罪すらも尙ほ容易に之を摘發して公けの沙汰に付することを憚からぬと云ふやうな始末てある、昔しは所謂申告罪なるものゝ種類が極めて多かつたのであるが追々其領分が狹くなつて今日の刑法は僅かに二三種の申告罪より外、認めぬやうになつて居る、殊に近代の各國に於ける多くの刑法が取つて居る所の主義は所謂法定主義（Tegalitätsprincip）即ち犯罪必罰主義なるものであつて苟くも犯罪あれば事の輕重如何に論なく又之を罰するが爲めに社會に及ぼす利害關係の如何を問はず必らず之を摘發處分せねばならぬと云ふ法の組立てになつて居る、此くの如くして彼の有名なる敎科書事件も起つたのである、同情に富める裁判官をして常に涙を揮て馬稷を斬るの苦境に立たしめて居るのである、近頃往々にして微罪不檢擧と云ふやうな聲を耳にする所であつて其趣旨は誠に結構のことであるが如何せん我が今日の法制は之れが實行を不可能ならしむるの窮屈なる主義を取つて居るのてある、大岡裁判の行はれ得た所以のものは何である、

當時の法制が所謂便宜主義(Oportunitäts Princip)即ち時と場合とを斟酌して犯罪の摘發處刑を取捨操縱し得る所の主義を認めて居つたが爲めてあつて英吉利の如きは今日尙ほ此主義を維持して居るのである、便宜主義の下に犯罪が少く杓子定規の法定主義の時代に犯罪の多きを免かれざるは當然てあつて昔しと今を比較するまでもなく同じ今日の文明時代にあつて英吉利に犯罪者が少く其他の諸國に比較的多數なるの事實を見ても明瞭てある、然し是を以て必ずしも文明今日の英吉利に實質的犯罪者の少き事實を證明する能はざるが如く唯だ一概に昔しより今日の方が實質的犯罪者の増加を見て居ると云ふ斷定を下すことは出來ぬのである、昔しは誹毀、僞證、墮胎、嬰兒殺等の如きは多くの場合に於て犯罪として認められなかつたのてある、其他今日各種の取締規則上に設けられてある禁令の如きも殆んど全部、昔しの人の夢想にも及ばざりし所てあつて今尙ほ下層社會などに於ては犯罪と云ふが如き考へなくして日々慣行して居ることが多いのである、法令が新たに犯罪を製造したとも言ひ得らるべしと雖も一方からはまた時勢の變遷が次第に犯罪の目的物を増加するに至らしめたと認むることも出來る、斯樣に論じ詰めて見ると文明の進歩は犯罪の増加に何等の影響なしと云ふの說を是認せざるを得ぬやうにも思はるゝが併し是れは唯だ極端なる非文明說即ち漫に文明を咒ふて世運の澆季を悲觀する者に對して言ふことてあつて前にも光明の裏面に闇黑ありと言ひしが如く兎に角、文明の進歩に伴ふて到る所に犯罪增加の現象あるを免かれざるは爭ふべからざる實際の事實てある、而して其增加せる犯罪の實質に就て之を見るに多くは財產、自由、名譽、公權等に對する比較的輕微なる軟性的犯罪とも稱すべきものであつて生命身體等に對する殘忍殺伐なる犯罪は寧ろ年々減少の傾きを呈して居るの事實である、學者は文明の進歩に伴ふて犯罪も亦た次第に其性質を文明的に變化すと言ふて居る、結局、犯罪は文明と共に力的より智的に進み硬性より軟性に變遷するの事實は刑事統計表の明らかに證明して居る所て

ある、若し果して文明が犯罪の性質を變化するの力がありとならば更に其力を利用することに由つて犯罪を減少少くも犯罪の增加を抑止するめの出來ぬ筈はないと思ふ、智的教育が教育の本旨に非ざるが如く智的文明が決して文明の本面目とは言ふべからず、智的犯罪の增加を致すは偶ま以て片環的文明の進歩せる餘弊として之を見るべく是を以て眞の文明に伴隨する必然の勢ひなりとは認むべからず、若し健全なる教育の基礎の上に直面目の文明を發達進歩せしむるを得るに至らは其結果、必ずや大に一般の犯罪を制限し減少するの効果あるべきことであらふ、或る學者は犯罪の增減は恰も潮の滿干あるが如きもので犯罪は海水と同じく千古を通じて之を多くすることもまた少くすることも出來ぬものであると言ふて居る、自然の運命も或る程度までは人力を以て之を支配することが出來る、況んや人事の現象たる犯罪に於てをや、文明の力教育の力を蔑如する者に非ざる以上は獨り犯罪に對して其力の無能若くは有害を妄斷するか如き筈は無いと信ずる。

第二十四議會の形勢

湘南旅行先にて　圓城寺清

來年のことゝ言ふほどでもないけれど、第二十四議會の開會までには尙ほ可なりの間がある、夫れを今から詮議立てすれば鬼の孫兒などが笑ふかも知れないけれど、其の形勢を豫測するも亦一興であらう。

第二十四議會は現在の衆議院議員の爲めには最終の議會で、尋常に行けば此の議會限りて現衆議院議員の任期は盡きるのである、來るべき總選擧の期日に就ては當局者の間にも民間にも種々の議論があつて尙ほ決定せぬやうてあるけれども、兎に角、此の議會を最後として現議員は總選擧に臨まねばならぬ、されば其の任期の末尾を華やかにも、最後の舞臺に晴れやかな芝居を打つて一般輿衆の耳目を牽き、選擧競爭上に便宜を得やうとするのは當然の戰略であるから、現に議員の席を占むるものは孰れも其の戰略を競ふてあらう、わけて政府反對黨は競爭の立場上一層其の最後を華や

かに且晴れやかにする必要があるから、定めて適當な問題を求めて政府黨と勇ましき決戰を爲すであらう、今日の形勢のまゝでは衆議院の解散などを見るやうなことはなからうけれど、政府反對黨は解散猶ほ辭せずと言ふ意氣込みで奮闘するに相違ない、イヤ、政府反對黨のみならず、政府黨の中にも選擧區の形勢如何に由りては問題次第で解散を歡迎する議員がないとも限れない。

　西園寺内閣は始めより野を淸めて敵を待つの兵法を執ると言囃されたが、事實は左樣でも無かつた、現に此の前の議會には郡制廢止案を提出して意外の波瀾を捲起した、第二十四議會にはマサカ再たび郡制廢止案を提出するやうなことはあるまいけれども、此の前の遣方から見れば野を淸めて敵を待つとばかりは限れない、イヤ、假令、西園寺内閣は野を淸めて敵を待つの兵法を執らうしても、實際に於て之を許さない事情がある。

　夫れは外でもない、税法整理の一件である、税法整理の件は此の前の又其の前の議會で豫算協贊の交換條件と爲り、天下に對する一の公約に爲つて居る、之を根本的に斷行するには愼重なる調査を要すると言ふので其の調査に二ヶ年の期限を附したほどである、調査委員會の組織に就て政府の志望は多少齟齬したやうであるが、兎も角も政府は其の後大藏省内に省内屬僚の調査委員を設け、次で更に官民聯合の審査會を組織して之が審案に任せしめ、先頃其の結果を公表するに至つたのは世人の記憶に新たなる通りである、處が其の公表せられた結果は如何にも不滿足の者で、世人が最初税法整理を促がした本旨と相去ること頗る遠い、惡税の改廢には毫も力を盡して無い、單に區々たる微税方法の末を改正しやうとするに過ぎない、是れでは世人の多數が承知せないのみならず、如何に無事を好み盲從に甘んずる議員とても豫期の結果を得たりとして之を承認する譯には行くまい、政府黨こそ兎角の口實を設け、又は再度の整理調査を條件として之を承認するかも知れないけれど、政府反對黨の側に立つものは

好箇の攻擊材料を得たりとして之を眞ッ甲に政府に肉薄するてあらう、且稅法整理案の大體は大體として、愈々其の各案に亘つて審査討議を爲す場合には、各議員互に其の利害關係を異にする所から、同じ黨派に所屬する議員でも各々其の去就趨舍を異にし、所謂混戰の形に陷るてあらう、其の結果、隨分キワドイ爭ひも起り、政府を惱ます波瀾も生じ、之が爲めに政府を覆へすとまでは行かずとも、無事平淡に濟むやうなことは決して有るまい。

のみならず、四十一年度の豫算案も亦必らず重大なる一問題と爲るに相違ない、此の前の議會では戰後間近のことゝ言ひ、稅法整理の結果もマダ分らない時てあつたから、先づ〱政府の要求するがまゝに承認しやうと言ふので、六億二千萬圓に近き大歲計に一錢一厘の削減もせずして協贊を與へたが、其の後臨時軍事費剩餘金と言ふのが未募集公債であることが分明し、四十年度に入るが匆々、事業繰延を斷行して其の缺陷を補はねばならぬハメに陷り、且稅法整理の結果もアノ通り不滿足であることが知れ渡つたから、最早ソウ〱は盲從も出來にくかるべく、義理にも根本的の査定整理を加へなければならぬことゝなるべく、夫れだけ政府には痛手と爲り、議院の論壇には花も咲かし波瀾も生ずるてあらう、決して〱此の前の議會のやうな譯には行かない。

外交上では日佛協約、日韓協約、日露協約など、評判ほどには實はないけれども、兎も角も俗受けの宜い出來てあるから、此點からは別段攻擊を受くることもなからう、對米問題も聊か氣拔けがして居るから假令議會の論難ありたりとて政府の痛手と爲るほどのことはあるまい、夫れよりは却つて內治の問題——內治の問題と言ふも仰々しいが、此の秋の府縣會議員の總選擧に對する政府の態度手心は議會わけても貴族院の注意を牽き猜視を受け、そが爲めに或は意外の反動を買ふに至らぬとも限れない、總選擧の結果が政友會に有利なれば有利なるほど其の反動は劇しいと見て差支ない、況んや政府の態度も表面公平を裝ひながら內實、

隨分議すべき點がないではないをやてある。

マアー、ざつと是れだけ見ても第二十四議會の形勢は決して穏やかでないことが分る、況して來年の衆議院議員總選擧前にはドウにかして現内閣を仆さう、現内閣の下に總選擧を執行さるゝは甚だ不利であると知り抜いて居る清浦、大浦一派が頻りに苦心焦慮して居る以上、機會さへあれば決して唯では濟まさじとするに違ひない、久々に活氣ある議會を見るのも面白からうと想へば、何だか遠かに待詫びるやうな心持がする。

清國民心の統一

中島半次郎

清國は土地廣く民衆多く其間に何等の全國民を統一せる中心なきが如くに見ゆ、例へば北京政府の政令は十八省に對し盡く一徹に遵奉せらるゝにあらず、特に蒙古、西藏、伊犁の如き邊疆に對しては、殆んど其威令及ばず、十八省の總督巡撫の如きは、宛然その地方に於ける王者の如き位置を占め、時には政府の政令に從はざるのみか、之に反抗するが如きことさへなきにあらず、而して又今の政府は滿人の立つるところなるを以て、漢人は中心之に服從せざる傾も見ゆ。

之を我國と對比すれば、國家政府の權威我國の如く確立せるにあらず、其歴史は四千年の長きに亘るも歴朝姓を變へ、其四千年の間を通じて一支配者の之を一貫することなきを以て、國家皇室の權威に至りては迚も我國に比較すべからず。

斯くの如く國家をなせる體面より見れば殆んど其民心の統一なきが如くに見ゆるも、而かも其國家を組織するには何等かの統一なかるべからず、其統一は形の上よりすれば、現皇室現政府之に當れりと雖も、内實の統一點となれるものを求むれば、凡そ四者あるを認む。

第一は尊孔なり。孔子の教は今より凡そ二千四百年前に出て、其後學統永く絕えず、特に唐代より以後は殆んど支那の官學の如くなり、現今に於ては儒教は一

の宗教とも見る事を得べきが如く、清國民の崇拜の標的となれり、今日清國に於ては天子親ら孔子廟に幸して孔子を祭らるゝ奠あり、而して全國各種の學校に於ては其儀式を擧ぐる場合は固より、學校によりては毎月朔日に、全國の職員生徒一同に集りて孔子を拜する儀式あり、昨年の春北京の學部が教育の宗旨を掲げ、清國教育の方針を示したる中に、尊孔の一事は殊に力を極めて推奬せり、此尊孔は即ち學問上より、言ひ換ふれば思想上より清國民を統一せるを見る。

第二は中華中國の念なり。清國民はその土地の廣き民衆の多き、而して又四千年の歴史を有せる點に於て一種の國民的自負心を有し、自國を以て世界第一の國とする懐古的感情を有せり、此中華中國の念は必ずしも現代に至りて養成せられたるにあらず、過去の歴史に於て何時とはなしに養成せられたる、一種の國民的感情、廣く言へば一種の人種的感情にして、之を分析して、中華中國と誇るべき點は如何なる點に存するかと追窮すれば、明瞭なる答を得ること能はざるも、而かも此念は一般の清國民に通じて抱かるゝところの念にして、我等が清國若くは支那をいふ代りに、中華中國といふ言語文字を使ふときは、清國民は明かに其感情上の滿足を表す、尊孔が學問上、思想上よりして清國民を統一せるに對して、中華中國の念は感情上よりして清國民を統一せるものと見るべし。

第三は愛國心なり。人は往々清國民を評して自己の利害の念の外には動かさるべき國民にあらず、愛國公共の念に至りては、全くその缺如するところなりといふものあれど、清國民豈全く愛國心を缺くものならんや、彼等は中華中國の念と共に、國家を思ひ國家を愛する一片の心を有せざるにあらず、中華中國の念は懐古的の一種の愛國心と見るべく、而して現在の國家に對する愛國心も亦無きにあらず、清國の識者といはるゝ人の中にありては、國を憂ふること己が身を憂ふるが如くするもの無きにあらず、唯清國に於ては、國に盡さんとするにも先づ自己の位置を固めざる可からざるを以て、その自己の爲に計ると國の爲に計るとが

相混雜して、唯一意自己の利害の爲に働くが如く見ゆるも、之を以て清國民に一片愛國の心なしといふは酷に過ぐ、例へば利權回收の如き、或は利權を回收する爲めの資金を得んが爲に國民捐を募りつゝありて、之に資を投ずるもの尠からざるが如き、以て愛國心の全く缺如せるにあらざるの證とすべし、自國民が米國に於て虐待せられたるに對し、米國品を購はざる同盟を爲しゝが如きも、一種の愛國心の現れたるものと見るべし。

第四は共同利害の念なり。　清國民は利害を共にするに當りては團結の心強く、その團結は元と利害を共にするに起るを以て、又利害の爲に破らるゝは固よりなれど、その團結の速に成立し、且つ鞏固なる上に於て、却りて我國民を恥ぢしむるものなきにあらず、清國の各地には、他鄕より來れる者相集りて一の會報を組織し、此會館を以て、その地方人の利害を共にする中心となす、此處に相集り、喜憂を共にするのみならず、その地方の商業上の協議をなし、行政上の協議をもなし、尙ほ又その地方人の孤獨寄るなきものをば此處に於て保護し、歸るに旅費なきものには此所に於て旅費を集め、孤兒にして保護者なきものに對しては、其館內に小學を設けて之を敎へ、以てその同鄕相救ふの誼を全うす、此會館の組織は北京、天津、漢江、上海の如きところを始め、各省の重なる都府には必ず設けられ、之を小にすれば、單にその地方人の統一を爲せるに過ぎざる如く見ゆるも、之を大にすれば清國の國家統一の基礎となれるを認むべし。

但し之を他國と比較すれば、我國若くは歐米諸國に於けるが如く、國家を打ちて一丸となし、凡ての國民に一樣に有せられ、凡ての國民の心の底に一貫し、その感情の琴線に觸るゝ強き統一點を有せざる觀あり、現政府に對しての國民の統一は十分ならず、尊孔によりて統一せらるゝところあるも、その孔子の敎を今日に活用し、之によりて今日の強大なる國家を組織すべしといふ程には進み居らず、中華中國の念及び愛國心も、十分世界に於ける自國の位置を認めて、然る後に生ぜ

る念とは見えず、共同利害の念動もすれば一地方に限られて、之を國家大にすることを忘れ居る恨あり。

故に清國民心の統一は、今日世界に於ける自國の位置を知らしめ、此自覺に基して生ずるものにあらずば眞に清國民を統一し、一切の國民に通ずる統一點となるべからず、今日の民心に統一なしといふにあらざるも、その統一尙ほ十分ならず、中心幾つにか分れて、一團一系としての統一を缺けり、從ひて强さに於ても亦缺くるところあり、之を一切の國民を統一し、强く且つ大なるものとなさんには清國民の自覺を明かにせざるべからず、此自覺明かになりて、尊孔も中華中國の念も、愛國心も共同利害の念も、一貫一致せる國民的精神となり來るべし。

須く國史を改修すべし

向軍治

僕等は最早前世紀の人間て、僕等が學校に通うて敎育を受けるときは、學問の目的は唯道德の一あるのみてあつた、修身齊家治國平天下が、男子凡百の活動の大目的で、格物致知と云ふ語も此意を表はして居るのてある、是れは何も我國に限つた事はない、西洋でも今日の如くに物質的文明自然に關せる學問の進步しない間は、學問の中心は道德てあつたのである、併し當時の德を修めると云ふのは極て漠然たる意味て、人間たるの義務を盡すと云ふ位なものてある、今日とても吾人は皆人間相應の義務を果したいと思へばこそ、勉强もし、衣食もし、活動もするのてある、唯百般の事複雜になつて分業の必要生じ、活動の區域を狹くした丈て、一人前の人間として世に立ちたいとは誰も心の中に潛めて居る思想てある。

學問の中て道德と最も近い關係を有つて居る者の一は歷史てある、故に初等中等の敎育は勿論の事、高等の敎育に於ても歷史科には少くも二個の方面がある、即ち歷史其物を研究すると之を實際に應用するとてある、歷史其物を研究するにも唯過去の事實を審にする

と、其の現今に及ぼす影響を窮むると、未來に起り得べき現象を推論し、之に應ずる方策を講ずるとは各々別がある、又愚者の爲したる跡を視ては自ら戒め、賢者の德の高きを觀ては之に齊しからんことを務むるは、是れ實に有用の學問を爲す者である、初等及び中等の教育の任にある者は、學生をして其の修むる所の歷史に據りて切磋の功を積ましむべきは勿論なるが、歷史其物を授くるに際しても、其の兒童の精神開發の上に及ぼす影響に關しては、特に注意を怠らずして兒童をして穩健なる思想を養成せしむると與に、又之をして或は頑迷に陷り或は輕薄に流れしめざる樣務めねばならぬ、我國現今の初等及び中等の歷史教育が、果して完全なる域に達して居るか、少くとも完全に近いか、或は缺點が多いか僕は善くは知らない、併し我國の人は久しい前から我國の歷史に對しては一種の迷想に陷つて居て、現今の教育に於ても依然此陋習が脫して居らぬかの如き感が僕にはある、是れは此際斷然改めねばならぬ弊害である。

明治の以前の歷史が、多くは人皇正統紀にあらざれば戰爭の記錄であつたのは數の免れざる所で深く尤むるには足らないが、明治今日の歷史が、舊習を脫しあたはざる爲め、兒童の頭腦が萎靡枯死して、啻に國民的自覺心を發揮する能はざるのみでない、其の折角の寶と看做されて居る愛國の思想が、歐洲中世紀時代のそれに似て、立憲政治の世の中に在り、聖明の君主を戴いて居り、國威宇內に發揚して大に大國民的活動を爲すべき時に方りて依然封建制度の餘弊を脫し能はないのは、實に嘆ずべきことである、頑是なき兒童が自ら誤つて迷想を抱いて居るのは仕方が無いが、若し教育の任に方つて居る者が、强いて兒童をして此迷想に陷らしむるのでありとせば、此れ實に輕々に看過すべからざる事實である、若し兒童の用ふる教科書が斯の如き誤謬の見解に基いた者でありとせば、一日も早く之を改正せねばならぬ。

第一、神話を歷史として教へるのは宜しくない、神話を教へてはいけないと云ふのではない、神話は兒童の

想像力の發達、詩的趣味の養成等に非常に効能のあるものであるから、兒童に神話、寓言、物語類を教へるのは、啻に許容すべき事のみではない、必用な事である併し神話を歷史として教へるのは、是れ人の子を賊するのである、神話は神話として教ふべきものである、歷史を舊約全書の創世記に據りて教へ、アダム、イーヴより人類を說起せば、是れ唯笑の種となるのみである日曜學校で舊約全書の物語、又は新約全書の奇蹟を其儘兒童に教へる事が、啻に兒童の宗教心を養成する上に於て、何等効能のなきのみならず、却て兒童の信仰をして疑惑に陷らしむるものであることは、僕が自分の子女に就て明に實驗して居ることとてある、小學校で神話を歷史として教へるのが同樣なる結果に至ることも、僕の實驗して居ることとてある、神話を教ふるより外に、兒童をして愛鄕心を起さしめ、尊王心を起さしめ、國民的自覺心を養成せしむる途が無くば兎も角、神話を假らずとも立派なる歷史的事實があつて、之に依りて以て立派に忠君愛國の思想を涵養せられ得るならば、何を苦んで兒童を欺いて、之をして頑冥固陋に陷らしめんとするのであらうか。

第二、神武天皇の偉德を稱揚するの足らざるを憾む、神話なくとも我皇室の威嚴は保持せられ、我歷史の由緒あることは十分證明せられ得るのみならず、神話あるが爲めに却て皇室の尊き所以を誤認するもの多く、皇室に對する國民信仰心を純粹高潔ならしむる能はざるものあるは嘆ずべき事ではないか、何故に我歷史家は神武天皇の御事蹟を重視するの風を養成することを務めないのであらうか、何故に國定教科書の日本歷史第一卷に於て、日本武尊の記事は三頁に亘れるに關はらず、神武天皇に關せる記事は僅に一頁餘なるのであらうか、國民祭日の中でも紀元節天長節と並ぶべき神武天皇祭に祀つてある神武天皇の御威德を國民に知らしむるのに、僅に一頁餘て滿足して居る所以は何處に在るのであらうか、是れも忠君愛國を口にせざる人の所爲ならんには或は恕すべからん、是れ實に僕が常に言ふ所の謂ゆる忠君愛國を口にせる人の忠君愛國思想

は、虚妄の根據の上に築かれて居る證據ではあるまいか、國民的自覺心の無い人間が、如何にも之れありそうに吹立てれば、何うしても虚妄と外は謂へない、國民的自覺心があれば、國民的自覺心を大に養成せん事を務めば、須からく開國の君主の威德を稱揚することから始むべきである、我皇室の尊き所以は、實に神武天皇の御後裔であるからである、我國民の偉大なる所以は、神武天皇に隷屬して居た歷史を有して居るからである、其の神武天皇御東征の偉大なる業に與つて力ある人種であるからである、此人種は果して如何なる人種なるか、何處に定住したるか、何時より神武天皇に從ひ居たるか、神武天皇は何時より日向にましまししか、何故日向より征討を始めたまひしか、「東の方の國々は尙未だ開けず極て騷がしかりき」とは、如何なる人種の業なりしか、神武天皇が親ら日神の子孫なりと云ふことを重んぜられた所以は、何邊にあるか、八十梟帥は何者なりしか、此國土が神武天皇の御系統を戴ける吾人日本人に取りて大切なる所以は、神武天皇御東征の前にあるか或は其の後に在るか、兒童が興味を以て聽き且つ讀む事項の極て多きにも關らず、「數年の間御辛苦の末、遂に大和地方を平げたまへり」と云へる、簡單無趣味の語の内に之を埋沒し畢るは、何故であるか、斯くせざるべからざる理由果して何處にある、之れに依りて果して神武天皇御建國の偉大なる所以が、兒童の腦裏に銘せられ能ふであらうか、何故に兒童をして我皇室の尊き所以、此國民の偉大なる所以を、確乎明白て且つ趣味多大なる歷史的事實に求めて、健全拔くべからざる國民的自覺心を養成せしむることを務めないのであらうか、何故此の理性に合し、文明の進步に伴へる方針を執らずして、迷信憶說を襲踏せねばならぬのであらうか、僕は實に我國學術界の爲めに之を悲むのである。

第三、歷史は宜しく國民史なるべし。

鎖國して、世間知らずの高枕を樂める時代の國家的思想は、僅に治者と被治者との關係を重んずれば足る、從て敎ふる所は服從的道德で、下より上に對する關係

さへ明にしてあれば十分て、要求する所は柔順屈服敬虔である、然れども宇内列國互に強さを競うて居る世の中ては、國家的觀念は治者被治者の關係と云ふ樣な、内輪の小仕掛の仕事ては用が辨じない、治者被治者が一體となりたる權力の獨立の自覺心て無ければならぬ、治者被治者の關係が圓滿て無い位ては獨立が出來ない、況んや國威を宇内に輝すことをや、治者被治者の關係の如きは言ふを要せざる前提てなければならぬ、國民の自覺心が如何なる君主に隷屬して居るかと云ふことてはなくて、如何なる君主を戴いて居るかと云ふことて無くてはならぬ、國家が存在する所以は治者の爲のみてもなければ、被治者の爲のみてもない、治者被治者合體したる權力が、他の國家と對峙せんが爲てある、我國に於て君主と臣民と相合體して、統一的權力となつて外敵と戰つたのは、神武天皇御東征から始まつたのてある、即ち日本民族の立場は二千五百年の昔から今日に至るまで一定不變て、時に勢力の消長こそありたれ、常に對外强硬、獨立自覺、純血團結て惡く言へば排他的侵略的てある、然れども其の過去に於て暴慢無道の排他侵略を事とせざりしのみならず、現在に於ても斯の如き我利的欲望の奴隷ならざることは歷史と眼前の事實とが之を證明して居るのてある、唯我國民がアフリカや南洋の蠻人等と天淵も啻ならざる差異のある國民で、若し其の位地さへ東洋の極端に在らずんば、中世紀の頃ケルマン、ローマン、セミティク、又はスラヴ人種と相拮抗して、鹿を歐洲の中原に爭ふことを辭せなかつたのは、已に二千五百年の昔の歷史が之を證明して餘がある、日本人が斯の如き偉大の要素を備へたる人種なることを知らずに、妄に之を劣等人種とし視て排斥せんとし、近頃俄に勃興したる民族なりと考へて黃禍論を唱ふるが如きは、其の迂愚實に笑ふべきものがあるが、翻つて自ら省ると、餘り外國人が笑はれない、國民自身すら自己の偉大なる所以を感じて居ないのてある迷想に基いた自負心はあつた樣てあるが、確乎たる歷史の事實に基いた自重心は無かつたのてある。而して國民をして斯の如く自ら輕んず

るに至らしめた者は誰てあるか、歴史家てある、過去に於て日本の地位の未た世界萬國に認められざりし時ならばいざ知らず、威光赫々たる大國民と爲つた今日に於て、何を憚つて國家の尊き所以を神話に求めなければならないのであるが、此際斷然歴史を改修して日本歴史をして世界歴史系統中の立派なる一部分たらしむべきてはあるまいか、二十世紀以後の世界歴史の上には日本はイギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシヤ、抔と、肩を並べて載せられることてあらうが、其日本國民の自重心の根據は、子供騙に類せる神話てあるとは、實に情ない話てはないが、ゲルマン人種の偉大なる國民たるべき要素を備へて居たことは、已にローマ强盛の時代の記錄に載つて居る、即ち二千年の間、其の文明の程度に差異あれ、民族的自覺心に至つては一定不變てある。而して此歴史を忘れないのが彼等の覇を西に稱して居る原因の一てある、東洋のゲルマン人種とも稱すべき日本人種、豈獨り自重せずして可ならんや。

第四神武天皇以後の時勢の推移

神武天皇以後歴代の天皇其の遺業を繼ぎて、國內西に東に北に征服に從事せられ仲哀天皇以後威三韓に振ひ朝鮮支那の文物の輸入となり、佛敎傳來し次て文學强盛を極め、武臣の勢を成し、源平の爭が北條の統一となりて元寇を擊退し新田楠對足利の爭が。足利の統一となりて明と交を結び群雄割據の後に豐公出てゝ征韓の偉業を企て、歐洲との交通漸く盛となり、山田長政伊達政宗等によりて、隨時日本民族の鋒芒顯れたるも、德川三百年の施政が遂に我國をして全然世界の進步に後れしめた、然るに今上天皇の御偉業は實に神武天皇の御規模を殆と無限大に擴張して我國を世界歴史上の一大要素と爲したのてある、此間日本民族の思想の上に大なる感化を與へた者は佛敎と漢字とてある、佛敎の厭世主義は到底日本民族の快活なる氣象と相容れず、一方に日本民族の元氣を稍耗せしむると與に他方には佛敎が樂天的趣味を帶ぶる事と也。漢字の消極的道德は日本民族の積極主義と調和して、漢字が支那朝鮮に於

けるが如く、文字の末に流れざるの益はありたりとするも、消極思想の爲に日本民族の覇氣の抑へられたること尠少でない、僕は實に耶蘇新教の積極思想の傳來の遲かりしを憾むる者である、新田、楠を忠臣として稱揚し、足利を逆賊として排斥したるは昔時史學が爲にする所あつて區別を爲したる者、新田、楠の忠臣たりしは固よりなるが、足利の必ずしも逆賊ならざるは保元平治の亂に於て源氏の必ずしも逆賊で無かつたと同じである、德川三百年の政治は法度財政の上に於て觀るべき者甚多かりしとするも、其の武臣專橫の罪のみならず、日本民族の進歩を妨げたるの罪憎みても猶餘りありと謂ふべきである、臺灣、樺太、朝鮮、滿洲の經營の如きは決して日本民族の新事業ではなくて唯神武天皇以來の國是を實現するのである、若夫れ現今の日本人が果して此の日本民族の使命を全うするに適當なる發達を爲して居るか否かは別問題である、社會百般の事敎育と言はず、軍事と言はず、行政と言はず、司法と言はず、實業と言はず、文藝と言はず、僕から觀ると遺憾と思ふこと少くない、日本民族の第二の開祖の下に立ちて衣食する者は過去の歴史に鑑み、未來の責任を思ふて大に奮勵一番すべきではあるまいか。

第五結論之を要するに現在の人心を鼓舞して之をして日本民族相應の自覺心を持たしめるのは、實に歴史家の責任であるのに僕等門外漢が此の如き問題を擔出さねばならぬとは豈に慨嘆すべきの至ではあるまいか、獨逸には一年を出でずして日米戰爭起らん、次て日佛戰爭となり二十年を出でずして日本人は印度に押寄せ來らん、是に於てエドワルド王の政策果して是なるかウイルヘルム皇帝の黄禍論果して迂なるか判然せん抔と頻に日本人を畏れて居る者がある(獨逸語小冊子「日米戰爭」丸善書店にあり)現在の日本人には無論斯の如き野心は毛頭無いが、他人心あり我之を忖度すと云ふ嘆息の聲を放つべき者は梁の惠王のみにも限らずと見ゆ、豈に慨嘆一番せざるを得んや。勉めよや歴史家、立てよ日本民族。

東京遊學者の心得

今秋九月新たに東京に出て、勉學せんとする人士の爲めに心得となるべき點につき、德富蘇峯、戸川秋骨二氏の高見を聽くことを得たり。即ち左に掲げて新上京學生諸彦の一覽に供す。(編者しるす。)

○　德富蘇峯

地方から東京に出て來た學生が、東京の生活に入るに當つて心得となるべきことを少しくお話して見ませう。

概して何れの地方でも、其地方から出た學生に世話を燒く機關が出來て居る。例へば寄宿舍とか、倶樂部とか云ふものがある。夫程でなくとも同鄕も居れば先輩も居る。地方から出て來た學生は自然さういふ我同鄕の同輩先輩に近いて一のソサイチーといふやうなものが出來る。て其の等人々は何れも自分より一日の長を持て居るのであるから、概して益友といはねばならぬ、甚しきは友と云ふよりは寧ろ師と云ふ方が適當な人もあらう。此等の人々の切磋琢磨と云ふものは非常に有益なもので、私は成るべく多く其利益を受くるやうにした方がよからうと思ふ。然し餘り其方にのみ偏すれば、詰り我地方を態々東京に擔いで持て來たやうになつて、東京の眞中に居ながら我地方の先輩朋友ばかりの社會より外見ぬこととなり、非常に狹苦しくなる。それについては廣く友達を求むる必要がある。而して其友達と云ふものを一番見附くるに都合のよい所は我同級生である。クラッスメートの中には自然自分と氣の合ふ朋友がある。其中には自然益友もある譯である。又先輩と云ふものも我同鄕の人に限らず、名士も雲の如くにあることだから自分が氣の向いた先輩に敎を受くることも決してわるい事でない。然し今申した二つのソサイチーの外に更に大切なることは、所謂己を持することで、殊に此大都會に於て、風塵の中に生息する時は知らず識らずインヂヴイヂアリチーが少くなる傾がある。だから自分は自分で立つと云ふ一大猛志を立て、充分なる彈力を以て此境遇の中にあつて其上に聳えて立つと云ふ覺悟がなくてはならぬ。其れをするには自分で自ら研究し、自ら工夫をすることが必

要である。自分の根底の修養が足らぬ爲めに折角のよい先生朋友に逢ても夫れ丈けの利益を取ることが出來ぬやうな場合があつたら非常に遺憾な事といはざるを得ない。

又都會の居れば運動をする時間が少い。其爲めには外にいくらも術があるだらうが、一番近道は徒歩主義を實行することである。私が地方から二度目に東京に來た時、或人に成るべく車に乘らぬやうにせよと云はれた事がある。其時分とは時勢も違ふてせうが、然し徒歩主義を實行すれば特別に運動の時間を造る必要もなく、或は一擧兩得といひ得るかも知れんと思ふ。先づ此位で御免を蒙りませう。

○　戸川秋骨

初めて上京したる學生諸子に對する注意として心附きし左記の三箇條を錄す。

第一　語學の研究を望む。私立學校なれば勿論、官立學校の諸子も放課後の時間を割愛して、特別なる語學の學校に通學すべし。たとへば大學生ならば、外國語學校の夜學に通學するが如きは尤も妙なるべし。諸子が思ひ切つて此の英斷に出てられん事を切望す。

第二　讀書の習慣を養成すべし。漢籍ならば四書にても五經にても、和書ならば源氏にても枕草紙にても、或は佛教の諸經文若くは基督教の新舊約全書、西洋文學ならばホーマーにてもダンテにてもよし。凡てクラシックのむしろ、浩瀚なるものを撰び、日々一枚二枚若くは半枚位、少許づつ精讀する習慣を養成する事、恰も基督教界聖書の友の會員が一日少許づつ聖書を讀みながら、知らぬ間に此れを讀破するが如くなるべし。此は恰も月々些少の貯金をなして、數年の後に大金を蓄積したるが如き結果をなすべし。

第三　日を期して遊覽する事、新らしき都へ出てたる爲め、その珍らしさに行樂を貪るは自然の勢なれども、そはたま〳〵都の惡風に感染し、田舍趣味の脫せざるに早く都風を吹かす半可通となり了するの恐れあり。なるべく見物を避け、土曜若くは日曜の半日を期してこれに用ゐ、徐々に都會の風を知るべし。此れ尤も健全の道なり。



英佛西の關係を論ず

『ノイエン、ホーナー、ターグブラット』

諸君は佛朗西、西班牙、英吉利の公使が列國に宛てゝ、二箇の協約條文を通牒したる事を既に知悉せらるべし。一は佛西の協約にして他は英西の協約即是也。諸君はまた此協約の目的とする所の何者たるやをも知れるならん、即ち該協約は其協約國に太西洋の東部及地中海の西部に於ける彼等の領地の現狀並に戰時に在りては其軍隊に彼等の領地間の連絡の自由を許容せるもの也、

回顧すれば此十五年、西班牙は外交上に頭角を現はさんとして其「道を求」めたりき。嘗てアルフォンソ七世がエルザス、ロトリンゲンの訪問後巴里に到着せし時、世人の尙記憶する如く佛朗西の首府に於て暴動の擧ありき、是疑もなく佛朗西一般が西班牙に對して多大の同情を有せざりし事を語れるもの也。然れども此時より西班牙に於ては現今巴里公使たるレオン、イ、カスチロ氏の如き佛朗西、西班牙間の接近の望ましくして且つは爲して得べきものなりとの見を抱けるもの有るに至れり。而して此等人士は直ちに其目的を貫徹し得べしとの大なる豫望は有せざりしも、此事の實現には全力を擧げて盡すにありき、されば終局の成果其名譽の幾分は彼等並に其努力の上に歸すべきものとす。かくて歲月は流去り、玆に西班牙は玖瑪の叛徒の餘波延いては北米合衆國と不祥なる干戈を交ふるに至れり。此戰爭の經過中及殊に平和條約以前に當りて兩敵手の中立的親友として佛朗西が兩者の間に處して外交的調停の爲め盡したる勞は決して少小ならざりき。而して戰役中華盛頓府駐剳の佛朗西公使ジエール、カムボーンが平和後直に馬德里府に轉任となりし時、該府の歡迎は實に至れり盡せりと謂ふべかりし、烱眼の渠いかでか機を逸すべき、優遇の歡待を奇貨として佛西兩國の關係を親善ならしむるの緣とはなしつる也。

然るに此關係も久しからずして兩國間に大溝渠を穿づべき危機こそ生じたれ。溝渠といふは摩洛加問題也。西班牙はもと摩洛加とは常に接觸する所也、然るに西人と摩人とは其域を隔てたるにも係らず犬猿も啻ならざる間柄に在りて、海岸地方に住する西班牙人は常に其範圍に限られ其地を繞せる摩洛加の土人に對し不俱戴天の怨讐を抱けり。而して其領地中只メリラのみは自由港と爲りし後やゝ發展するに至りしも凡ての點に於て第一着步に利を獲たるものは英佛兩國なりき。何者チョイタは戰

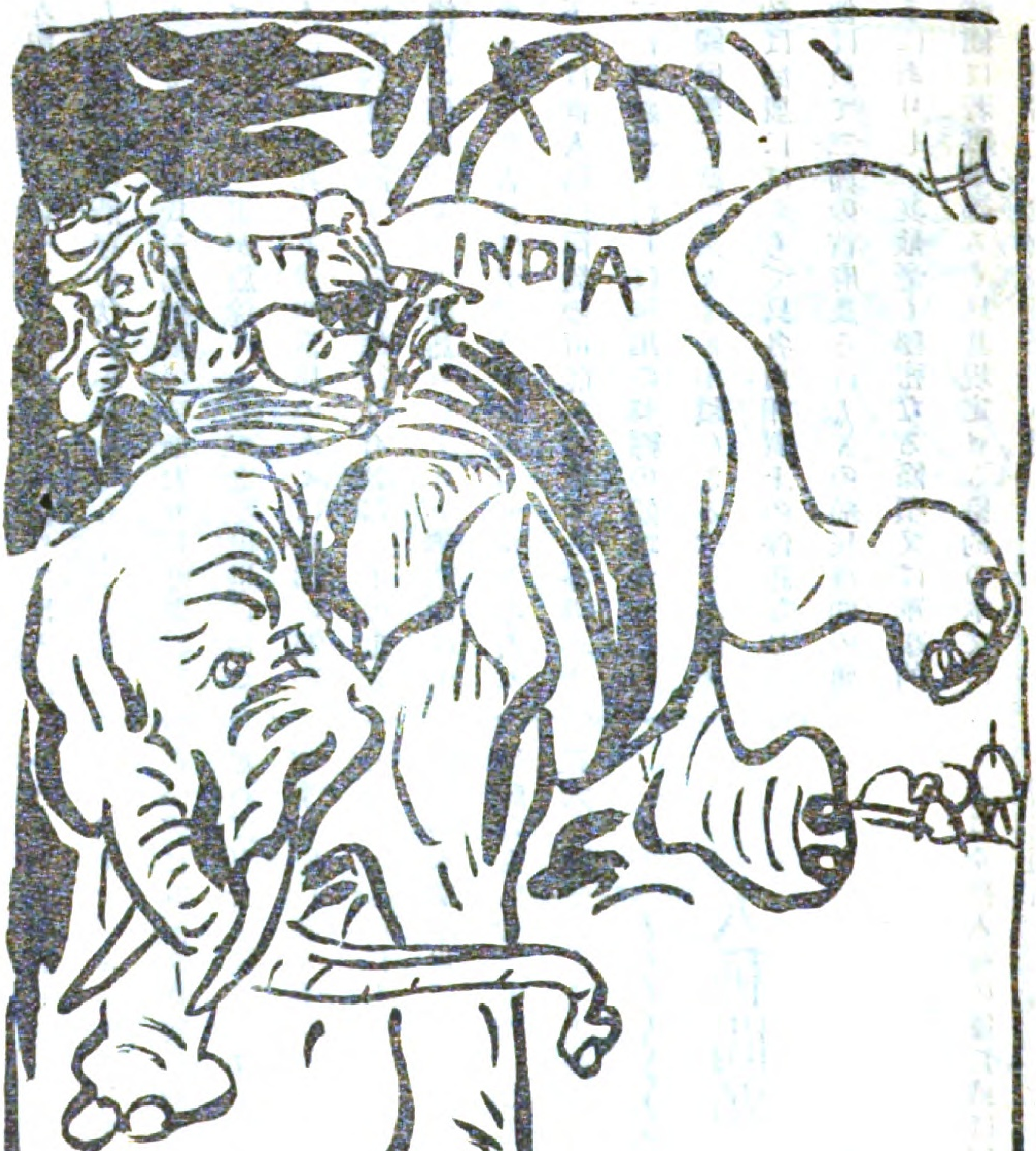
啻上大なる價値を有せるも商業上は無意味の地也。アルースマ、ペノン、ダ、ペラ、アルボラン島、ペレギルは皆何等の利益もなき地なるに總督の費額は二百五十萬西貨にして殆ど二百萬を以て計算する通商は西班牙政府に四十万の收入を供給するに過ぎず。故に其費用は收入に比して二百萬西貨を超過せる有樣を呈せり。凡てかくの如くなるにも關せず西班牙人一般の意想は、殊に植民地に於ける禍亂の後は摩洛加に於ける西班牙人の歷史的權利と名づくるものに倚りて立てり。其權利とは公教會のイサベラの遺言としてマウル人をも亞非利加の岸に追窮すべしといへる使命を西班牙人に與へたりといふ所より出づ。摩洛加に於ける西班牙の商業は全商業界の四乃至八プロチエントを占むるに過ぎざるを、西班牙の愛國心は千八百九十八年以降に於て殖民地の損失を玆地に於て回復せんとの希望に着眼すること能はず。而も西班牙に取りて摩洛加はレオンイ、カスチロ氏が千九百四年に吾人に語れるが如く實に主要の問題たるなり。

かく過去に溯りて論述するは蓋し近々三年の事變を明かにする上に極めて肝要なれば也。即千九百四年倫敦及巴里に於て摩洛加にも關せる談判の交訂せらるゝとの報一たび馬德里に傳はるや英國及佛國に對する直接の敵意を表せる上下の動搖は西班牙國首府に於て醱酵せり。然るに幸なる哉此誤解は間もなく解け、四月八日に英佛協約發表せられ、其協約第七條に、「兩國政府は西班牙に對しては公明にして親善なる感情を以て處し、其地理學上の地位及領地として西班牙が地中海に於ける摩洛加の海岸に有する利害には特別の注意を拂ひ、佛朗西政府は此利害の爲め西班牙と條約を訂結すべし。此範圍に於ける目的佛朗西西班牙兩國間の協約は英吉利政府に通牒せらるべしとあり。此形式に於て公告せられたる協約は直ちに開始せられ、一夏の間繼續して十月三日彼の有名なる同盟は成立するに至り、其内の一部のみが公表せらるゝ事となれり。

此同盟以後兩國政府は其權利の範圍及其利益の保證に就きて各一致して逆ふ處なかりき。西班牙は所謂「平和的侵入」の事業に參與したりき。佛朗西は摩洛加の各部に於て如是の侵入が自國に取りて望ましく且つ可能なりと見たる所には必ず先鞭を付けたり。是際利害範圍或は勢力範圍の分配には如何なる點に於ても涉る所あらざりき。何者渠等は只經濟上の協同動作を旨とし現目無政府黨の跳梁に供ふる爲め警察法の假政策は規定せられたるに過ぎざれば也、此條約は千九百〇五年九月一日附則始末書に仍りて完成せられたるも、本文には少しも變化なく或る協約の內容がやゝ詳細に定められたるに止る。而して開港場に於ける警察の編成に就て數則の規定あり。即ラミツユ、ダツアンは西班牙の管轄下に、タンゼの警察は十五ヶ年間佛西共同管下にして長官は佛國出たるべく、此年月經過後は全く西班牙管下に歸すべく、其他の港市は佛國の管下たるべしと。而して終りに國立銀行に於ては西班牙は佛朗西を除く他の列國人よりも高職に任ぜらるべしと規定せられたり。

佛朗西、西班牙間の協約はアルゲチラスの會議開始せられし時は完全に行はれたりき。其全經過中國王、總理大臣、モレー氏、アルモドバー

ル選擧侯、會議の議長は連帶責任の政策を堅く守れり。此銀行及警察に關する討議間西班牙の全權委員等は一般の利益の爲め目覺しくも有爲なる活動をなせり。佛西の管下に港場を配置するといふ如き纏綢せる問題に於ても協約には毫も煩を及ぼす所あらざりし。西班牙は終始一貫佛蘭西の忠實なる同盟者なりき。而して此等困難の後を完うしたる功勞を論ずるに當りては先づ西班牙の外交の績の大なりし事を稱揚せざるべからず。故に佛西協約が水火の試金石に逢ひしことを思ひ、又此等の協約を何等の危險なくして一層擴張し得べきを察するを得たるは千九百〇六年四月首の事なりき。



EDWARD'S UNRULY ELEPHANT.
—*Kladderadatsch* (Berlin).

此擴張は西班牙が佛蘭西に接近せし時に同時に佛蘭西の熱心なる協同者たる英吉利とも良好なる關係を生ずるの好機を與へたる時に於て成されたりし也。アルフォンゾ第八世がバツテンベルクの內親王エナ公主と結婚せられしことは又英西接近の一徵とするに足るものにして玆に政治的眞意義を附したるもの也。十五年以前に在りては西班牙は三國同盟に心を傾けたりしことを最早や秘すべくもあらず、千九百〇七年の初には巳が列國の伍に列すべきことを疑ふべくもなく、世人は此形況が外交的同盟に於て形成すべ

きことを期して待つことを得ん。國會に於て渠が最後の演說中アルフォンソ第八世は「吾人が公明に維持せんと欲し又列强と幸にも公明に維持する處の友誼は繼續せり、而して一般的にして重大なる利害は平和の爲め英吉利及佛朗西との交情を堅くす」といへり。王の勅語に仍りて世人は最近に各國に通牒せられたる兩同盟の萠芽の伏在を見るならん。

此協約の交渉はジュール、カムボン氏が馬德里の公使たりし時即二三ヶ月以前其地に於て開始せられたり。渠が旅途に上るや之を巴里に移せり。ピション氏が最近吾人に語りし如く英佛西當局の人々は地圖の觀察上、太西洋の東部、地中海の西部に關する協約維持は有効なるもの也と確信せり、即西班牙は摩洛加の領地、カナリ群島バレアレン佛朗西はセネガール、アルヂール、チュニス英吉利はヂブラルタル、マルタを有せる也。かくの如き狀態の下には世人第三同盟の可能を看取するを得ん。吾人は信ず二ヶの協約が二に訂結せられしは無用の解釋の餘地ならしむるものにして、更に新に三國同盟に就て云々するを須ひざるべきを讓め確認するならんと。此協約は同盟にはあらで只各自相對上の保證なり、一は以て其領地を擴張し他は以て三箇の首府及それ〴〵の殖民地間の通商を自由ならしめんとするにありし、其他毫も秘密なる條項又は軍事的條項を有せず。此等協約諸國は若戰爭起るも只其規定せる協約の本文に忠實ならんことを欲し、之に該當する處致に出づるを要とするに止まるべき事永久に明白なり。

前に各列强間に生じたる始の解釋は條項の推致あるに在りて他意なし其目的とする所は此同盟の平和的性質を表するに在而已矣。現狀は平和に在るを以て其目的も此現狀をよく維持するの外ある事なし。吾人は確かなる筋よりして次の事を知得たり、獨逸外務省秘書官フォン、ミュールベルヒ氏を通じてカムボン氏の通牒の受領は全く正確なるものなりと。フォン、ミュールブルヒ氏氏は所見を述べていふ、此等協約の正文の公表は其意義内容につき一般人士に知悉せらるゝ、最良の方法たりと然れば又此も遠からずして全文の發表を見るに至るならん。英西協約の關する所に就て予は語を添へていはん、其協約は佛西協約に次いで討議せらるゝものにして之に先だつものにはあらざる事、及び此等の協約は同一の本文を以て訂結せられたる事を、是即此等兩者の外交的約定書を明瞭ならしむるものにして、巴里及馬德里に於て世人は全世界が其公明正大を認知せんことを希望せる也。

人種問題

『コンテンポラリー、レビュー』

リイッパー

之は全然人種の優良或は同等などの問題にはあらず、實に根底に横はる到底調和の見込なき大なる相違の問題にして、之れを無視して論ずる能はざるなり、予は植民地に生れたるにあらざるも、長時日間南亞弗利加にありて、その人種混雜の結果を實際目擊したるもの、その予に泣は

正義の凡てに行はるゝは只各人種の分立策を取るによりて得られ、凡ての自由の發展は其自然に適當せる狀態の下に居るによつて確めらるゝが如く思はる、帝國に正義なくんば必ず衰滅を免れず、國民と人種とに自由の發展なくんば遂には存立を得ざるべし、凡そ如何なるところにもあれ、その名世に現れたる國民は未だ曾て下等人種の努力の上に建設せられたることなし白人種の貴族と異色人種の非市民勞働者とが一組織をなすことは、その試みられたる處には必ず、失敗の結果あり、斷かる組織は單に富の生産問題に限らるゝならば知らず、それ以外に期待するところあらば常に必



KEEPING THE PEACE.
—Rogers in *Harper's Weekly*.

ず失敗すべし、然るに尚は異色人種に與ふるに市民の權を以てし、共和政治の下に立たしめんとは、更に一層の災禍を釀すべく、混合種屬の上には期待すべき未來の存するなし、煩累を恐れず、多費を惜まず、吾人の遂行すべき道は唯人種の分立にあるのみ、但し之にも多くの事情あり、多くの手段あり、事情に顧みて適當の手段を擇ばざるべからず、斯くしてこそ、初めて對立は成り、調整は至り、個性の發揮は從ひ、此處に徒らに民衆の他に優りて多きが爲に、大なるにあらざる、自意識の十分發達したる有機體としての眞の世界的國家は齎らされん、勿論此かる計畫は大努力と自

己を犠牲にする念とに待たざれば能はず、されば又世の薄志弱行の徒、舊慣を墨守する徒、及び利己に驅らるゝ徒よりしては、そは實行し得ざる事のみ、全然夢想に過ぎざることのみと言はるべし、然れども帝國は唯、努力と犠牲との上に築かる、決して利己心の上にはあらず、特に況んや我が南亞弗利加問題に於けるが如き、事態の頗る大なるものに至つては、異議と恐怖とは無用にして且つ賤むべきものなり、吾人は何事かの策を要す、然らずんば來るものは滅亡のみ。

戰爭は必至なり

『ナショナル、レビュー』に於けるマハン大佐の所說

今や海牙會議のあるあり、人々皆望を之に屬するに拘らず、マハン大佐は獨り之を悲觀して、曰く、戰爭は猶ほ地震幷に火山の噴火の如し、必ず時期を定めて起る、誰か又之を禁ぜん、如何なる仲裁裁判所かありて、能くヴエスヴイアス火山の噴火を防ぎ、サンフランシスコの地震を止めたるぞ、更に思へ、國民の榮ゆるは道德主義の墨守にあらずして、唯缺乏に迫られ飢餓に驅られ、我現在有せざるものを有せんとする動機より來る、仲裁々判とや、そは唯道德的に考へたる抽象的正義に過ぎず、之を實際に行ひて戰爭の解决をなさんとするは望まれず、國民の進歩と發展とは約せられてウオーズウオルス詩中の一句にあり、曰く「力あるもの之れを取り、能ふもの之を保たさるべからず」と、之のみ、と、更に歩を進めて平和會義なるものも、列强が經濟的關係より發議し賛同したるものにて、實は弱點を掩ふに神聖なる人道の文字を藉りたるに過ぎずとし、仲裁々判といふとも、一斤の麵包を得んと欲する飢餓者なり而かも自己の膂力、之れを取らんとすれば取り得るものに對しては如何に處置すべきぞ、國民の必要と衝動とに驅らるゝものに對するも亦同じ、之を制馭せんとするは幻想なり無法なりと嘲り、畢竟列國民の安靜を保たんとせば、物理上にいふ合力の結果に待たさるべからず、即ち衆力互に相制して此處に端なく靜止の狀態を保つ樣せざるべからず、之を以て予はいふ、平和期に入らんとするには戰爭をして一層猛烈ならし



ENGLAND. JAPAN. FRANCE.

AT THE HAGUE RECEPTION.

—*Lustige Blaetter* (Berlin).

め、利器をして一層鋭ならしめざるべからずと、軍備廢止、或は軍備縮少といふ如きは今日猶ほ早し、此の如くして世界の安寧も望むべからず、世界が今日社會上幷に政治上に於て平和を樂み得るは、實に戰爭そのもの、お蔭のみと、氏の論文中には猶ほ左の數語あり、「今日各國共に軍隊の編成あるが、之れ度合に於ける差こそはあれ、猶ほ一の戰爭なる事を看過するなかれ、而して此軍隊の編成ある所に世界は進歩し來り、今も猶ほ進歩しつゝある事を看過するなかれ兵備は一大鐵盾にして、平和の事業は此處に潜み安全に前進す、戰爭とは即ち編成せられたる軍隊の最後の表現のみと。

デスレリーの處女演說

校正小僧には餘白を埋める責任がある。餘白を埋めれば責任が塞がらぬ。左に揭ぐるは故ビーコンスフイールド伯の壯年の事で、新潮よりは舊潮に屬するもの。マッカーシーの「英國現代史」でも



GERMANY. RUSSIA. AMERICA.
HOW THEY DRESS THEIR HAIR

讀んだ人は夙に御承知の事ではあるが、校正に忙殺されて居る小僧には生憎に近來の出來事が分らぬ。止むを得ず此舊潮を以て新潮欄の餘白埋となした。若し之て餘白埋が出來れば同時に小僧の責任塞が出來た譯である。と辯解甚だ弱めて、ホット一息。(校正小僧しるす)

デスレーリが議會て處女演說をやつた時は非常な嘲笑と妨害とを受けて、流石の厚顏先生も遂に演說を中止せねばならぬことゝなつた。然し其退壇する時の意氣込が面白い。先づ自由黨の奴等を面惡くさうに睨め附けたものだ、やがて手を振り上げて、口を一ぱいに開いて、大きな恐ろしい聲を出して怒鳴り附けた。「吾輩はこれまで色々な事をやつたが大抵は終る成功した。諸君よ。宜しい。吾輩今は此壇を引退がるが、然し諸君が吾輩の說に耳傾くる時は、何時か必ず來るだらう。」と。此大言を大言として終らしめなかつたのはエライものだ。



明治故人評論（五）

正岡子規論

△子規先生

佐藤紅綠

△子規先生の事を御話しやうなら一日や二日で話しきれません、又私が話さんても子規言行錄や其他の書に遺憾なく書かれてあります、私は只だ先生が「藝術家としての態度」といふやうな點丈けを御話しませう其れは目下の文壇に私が頗る癪に障つてる事もあり且つ自ら顧る處もあるので。

△先生が俳壇を統一したのは何てあるかといふに私は「天職に忠實」てあつたからてあると思ひます、昔から豪い人は澤山あるが、先生ほど忠實てあつたものは、稀てあらうと思ひます、基督、釋迦、孔子、日蓮是等は「誠」の人て苦境の中に非常な樂しさ所謂天の恩寵を感じた人でせう、子規先生は全く其れてす、滿身悉く文學に捧げたのてす、世の毀譽褒貶は問はなかつたてす。死ぬるまてが研究的の態度を失はなかつたのてす、

△八年間枕に頭を着けたまゝて六尺の蒲團の外は疊一疊外へも踏み出せなかつたのてす、脊髓がぐちや／＼に腐つて、片方の肺が無くなつて、片方の肺が三分の一丈け殘つて、其れて死ぬる日まて筆を取て居られた、こんなことはまあ人間の出來る事てせうか。勿論先生は日本新聞社から月給を貰つて居るから一日でも書かねばならぬといふ義務の觀念から筆を放さなかつたせいもありませうが、其んな義務なんどいふ小さな理由よりも、先生が苦しい身體を枕に凭せて筆を持て居られる其の瞬時こそは決して他人の知る能はざる愉快と喜悅とが心に滿ちたてあらうと思ひます、本當に趣味

の人です、筆を持てる間は天もなく地もなく吾れもなかつたらうと思ひます、此の趣味は經驗のない人には語られません、

△もう一つは貧乏であつた事です、日本新聞社からの俸給は只た四十圓、四十圓で親子三人、其中に自分の醫藥代を拂ふと、毎月の生計が立ち得る譯はありません、先生は而も其れに滿足されて居た、私の處への手紙にも「我等は人より多く働いて少なく月給を取るつもりて居なければならん」と私を勵まして下すつたのがあります、多く働き、多く苦み、人よりも立派なものを書いてソレで俸給を少なく取るといふのは何といふ事でせう、人が先生の人格に全く心を捧げるのは此邊ではありませんか、つまり先生には苦みや働や貧乏や俸給よりも其れ以上の喜びがあつたからです、此の喜は即ち文學の趣味といふ事です、

△であるから先生はいつも嬉しさうな顏をして本を讀み句を作られて居る、朝から晩まで苟くも眼の開いてる間は讀む事と作る事であつたです、一時間でも冗な時を潰しません、よく我々と雜談笑話をされるが、其のつまらない話をも先生は悉く俳味に化して了ふのです、寸刻も油斷をしません。ですから先生は何でも研究的態度の人を好きでした、生意氣、知た振り、人眞似、負け惜み文學以外の世事談、そんな事は大嫌でした。それで先生の力量は一日〳〵と進歩して行く、我れ〳〵は爾は行かん、いくら袖に縋つても迚も先生の早足には追着き得ない、其中に魂氣が盡きて途中で休む、甚だしきは退却する、我等同人間には自分の力が先生初め他の人と迚も並行し得ない爲めに途中で俳句を止して了つたものが何十人あつたか知れない、中には子規と吾輩とは趣味が違ふ意見が合はぬなど〵勝手な理窟を付けて御山の大將になり濟ましたのもある、そういふ人は直ぐに吾れ〳〵の方へ足が遠くなる、「あれはどうしたらう」抔と噂すると、先生は「俳句の出來ない人に來て貰はんでもいゝさ」と言はれる、俳句に忠實な人でなければ實際先生の側へ行く事が出來なかつた、

△私共が先生の病を慰めやうと思ふ時には俳句を澤山作るのです、百句位作つて、先生の病床に訪れて、批評を乞ふ、すると先生は非常に喜ばれて「紅綠君盛んですな」と重き枕を擡げて原稿を見られる、其中に一句でも二句でも先生の氣に入つた句があると、身體を左右に動かして「頗る振つたね」と言はれる、其時の先生の嬉しさうな顏は何とも言ひやうのない事です、私共が此時の御顏を見ると言ふに言はれぬ愉快を感ずるです、俳句を賞められたのが嬉しいのと先生の病苦がいくらか是に依て忘れられるのであらうといふのと二つの嬉しさが漲つて來ます、ですから怠けて碌々俳句を作らん時には先生を訪ねる事が遠くなります、御土産がなくては閾が高いので。

△今でこそ普天の下卒土の濱、新派の俳風及ばざる處なしですが、十年前は僅かに二十人內外の人であつたので、其れは日本新聞に十句ばかりづゝ毎日出したのです、其後先生が早稻田文學に頼まれて一段か二段づゝ俳句を出し鳴雪翁が太陽の俳欄を受持たれた時などは始めて雜誌に新派の俳句が出たのでした、自分の句を新聞に出さうとも思はず、世間に見て貰はうとも思はず、言はゞ同好の士が寄り集まつて、根柢から俳句といふものを研究して見やう、古來の惡弊を破つて我等の信ずる處を練習しやうといふのが目的で、其れが今日此んなに世間に傳播しやうとは思も及ばなかつた處でした、門戶を構へるの黨派を作るのとは夢さら〳〵以ての外の事でした、其れを此に岡野知十といふ人は風聞記といふものを毎日新聞に書いて子規派、日本派と吾れ〳〵を黨派の如くに言ふたのです、

△黨派に就ては私大いに議論がある、黨とか派とかいふものは互角のものが二つ以上ある場合に言ふものでせう、若し我れ〳〵を日本派子規派といふならば我れ〳〵に角逐するものは何派でせうか、いゝえこれは子供らしい話として打捨て置く譯には參りません、これは先生も口に言はねど內々癪に障つて居たに違ひなし、私の如きものは頗る癪に障るから序に言ひたいのです、日本派に對して秋聲會派といふです、紅葉、竹

冷、松宇其他いろ／＼の人の會てす、然るに此會は如何かといふに、私の眼から見ると全てものになつて居ません、俳句として一文の價値がないてす、百句の中に一句でも俳句らしいものを見出す事が困難てす、てんて相手にはなりかねるのてす、其れならば彼等には一寸の蟲も何とやらで彼等相應の特色があるかといふに、これもありません、五年前に私共の經て來た處を五年後になつてから漸やく氣が付いて其れを眞似て居るのてす、自家の特色もなく時代後れの眞似をするといふのは元祿や桃山が流行り出す時節柄とはいへ、藝術としては全くゼロてはありませんか。無論秋聲會の方の人と私共とは藝術に對する考が違つて居ります、秋聲會ては道樂半分にやつて居るので、私共は藝術として生命を打ち込んて研究して居るのてす、彼等は骨董屋で私共は創作家てす、斯く言へば何も彼も分明するのてすが、世間ては爾は見てくれません、彼等も我等も同じものと見て居ります、私が恁ういふのは何も看板爭なんて其那卑劣な根性てはありません、詰り私共が身命を捧げて神聖なものとして居るのを彼等は理髮床の小僧同樣に矢張俳句を慰み半分道樂半分にやるから腹が立つのてす、俳句の神聖を犯すものは親の敵よりも憎いのてす、秋聲會は俳壇の天理敎のやうなものでせう。

△先生はいつも私共に向て「どうも皆なが大家になつたから句を作らんやうになつた」と皮肉な言を言はれました、私は今でも其れを思ひ出す度に冷汗が出ます、碌々俳句も出來ない癖にもう大家顏して句作もせず、苦心もせず、研究もせず、先輩氣取て居たといふ事は先生の眼から御覽になつたら、どんなに苦々しくキザでイヤミで生意氣で、可愛さうで憐れてあつたらうと、昨今の俳人を見るに付け犇々と自分の陋劣が思ひ出されます。

△終りに臨んて私は此の一つ丈けの事を言ひたいてす、これは私が終生忘るゝ事の出來ない、私の唯一の座右の銘として居る處ですが、それは先生が私共に遺された「創作の趣味」です、此點は紅葉さんが小說に於

て其門人に傳へられた趣味と同じものでせう。

△福本日南翁は曾て恁ういふ事を私に言はれた、日本の詩の中で俳句が最も發達して且つ詩其もの丶特色を保つて居るといふのは即ち俳句が創作的にして模倣的でないからである、凡て創作といふのは自己の發現である、自己の發現は其中に必らず精力が籠つて居る、萬葉の歌の面白いのも之れが爲めである、之に反して模倣は自己を卑しくして他の假聲（コワイロ）を作るのである、假色はいくら上手でも役者に及ばざる遠しだ古今以下は詰らない模倣的だからであると。これは實に至言だと思つた、子規先生が俳句でも和歌でも文章でも、手を染めたものは悉く創作的で、決して他を踏襲したり模倣したり、そんな事はなかつたてす、俳句に至ては非常に嚴格で古人の句今人の句に苟くも似寄たのがあると其れを大耻辱と思ふて居られました、私は此點を實に感謝して居ます、たとへ瘠せても枯れても此點丈けは守つて行きたい、此の感化に觸れた事を私は非常な幸福に感じて居ます。

△芭蕉は創作家であつた、之を眞似して自家の獨創を發する能はざる門人數十人、此に於て蕉翁死するや否や俳壇は沈衰した、蕪村は創作家であつた、決して芭蕉をも模倣せぬ、此に於て俳句に生命が吹き込まれた、蕪村死して幾もなく模倣俳人悉く腐敗した、百年の後、子規先生出て丶蕪村を吞み芭蕉を嚙み悉く消化して獨創の見を起された、創作の人は世紀を作るのである目下の俳壇が漸次沈衰しかけて來るやうですが、其れは悉く子規先生の模倣だからでせう、時代の思潮が段々代つて來る以上は之に伴ふ創作が必要でありますまいか、之を思ふと私共は未だ〳〵研究の初歩にあるのです、私は其れを八釜しく言ふのです、もう少し新思想に入らうではないかと御互に子供の積で昔に返つて研究しやうぢやないかと言ふのです、けれども對岸の火事視して同意してくれません、私の言ふ事を狂人のやうに思つてるやうです、どうも早く大家にはなりたくないものです、貴方方は小説家の方面の内情を御存知で實に文士といふものはイヤなものだと能く仰るやう

ですが、小説家の方はまだ餘程宜い方でせう、どうも俳人と來た日には目も當てられません、虚名と衒氣で持ち切て嫉妬が深く思想が古く頑固一點張でせう、子規先生が死んでから五年になりますが、もう俳壇は全く研究的態度を失つて了つたのです、滅亡近くにありといひ得るでせう。

△寫生文の事ですか、あれは私は能く知りません、あれは子規先生獨創のもので、私は其時から寫生文には趣味を持たなかつたです、先生が完成しない中に死なれたのだから、どうといふ事は出來ませんが、生きて居られたら、只今の寫生文のやうな淺薄な無趣味のものには終らなかつたのでせう、つまり先生の未成品です、未成品を以て先生を論ずるのは世の評者蓋し酷なりです、虛子君や四方太君の寫生文もどうにか發達しなければあれては私は全然反對です、漱石君を以て寫生文の方に繰り込んで了ふのは亂暴です、漱石君のは子規先生の傳へた寫生文とは非常に違ひます、讀んで見たら一目瞭然ぢやありませんか、詰り俳人であるから又ホトトギスに關係があるからといふ點で、同一視するのでせう私は先生の傳へられた寫生文よりも寧ろ漱石君の方に感心して居ます、無論文章の上です思想の上からは全然反對です。

△先達て漱石君の書いた文學論（？）の中に私が同君と對談の折りにモーパッサンのバガボンドを推奬した事を記し、斯るものを喜ぶのは道德心の痲痺した人間であると書いてあります、漱石君は疑もなく私を道德心の痲痺した人間と思つて居るらしいです、實際此點が今の技巧派と自然派との岐るゝ處ですから漱石君の此の論定を私は非常に愉快に讀みました、其意のある處が明瞭になつたからです、其れで私は一つ議論を吹掛けに行かうかと思ひましたが、向ふは學者で私は無學、議論では負けるに決まつてる、口惜しいと思ふて居ると不圖恁な事を考へました、若し子規先生在世であつたならば何方に贊成するであらうか。

△先生は自然を倘んだ人で、俳壇の自然派であつたか
して見るとバガボンドの自然なる情慾を描いた處に相

成するに相違ないと思ひました、其れと同時に寫生文も進歩したならばバガボンド位まで進みさうなものだと思ひました、今の寫生文は極めて不自然なるもので、何でも彼でも美化しなければ止まぬといふ技巧一方に偏したもので、寫生といふ名前とは極めて矛盾してるものでせう、先生在世ならばもう些と何とかするだらうと思ひます、景色や人事ばかりを彩色せずに人間其もの、吾れ〳〵人類の生活の實際を自然に寫す事になるだらうと思ひます、併し其れは想像です、想像であるが何だか其樣に思はれて、まあ自分丈けが安心して居ます、春情文學も隨分振つてるねと先生が破顏一笑されるかも知れません。

△一體子規先生の唱へられた俳句は自然を主としたのは無論であるが、俳句は字數が少ないから同じく自然を寫すにしても措辭の關係上餘程技巧を要するのです、ソコは散文と違ふ處です、今一つ極端の場合を言ふと、俳人は自然を作るのです、自然といふ海の中から眞珠を拾ひ取るのでなく、海の水を掬ひかためて眞珠を製造する場合があります、理想の句などは最も此の部類です、恁くの如く自然の製造術に練磨を經た俳人の事ですから技巧といふ事は決して脫し得ません、先生の句は此の製造は餘り多くないです、吾れ〳〵門人仲間の昨今は隨分製造が盛んです、であるから斯の如き頭腦を以て寫生文を書くと寫生文でなく製造文になるのは免れ難い處でせう、なぜそんなに製造するかといふに「美」といふ禍神が付きまとつてるのです、一にも美、二にも美、三にも亦た美です、其結果は萬象を美化するといふ事になる、何事によらず美くしく製造しやうと力める、美の色を塗らない物品は文學でないとしてあるのです、私も一時は爾思ふて居たのです、が、よく考へると美といふものはどんなものかといふ事になるでせう、俳人の美とするもの以外に未だ忘れられたる美が澤山あるではありませんか、漱石君の所謂を以て見ると情慾及び情事に美が無いといふのでせう、其處は問題です、バガボンドを見て面白いと思ふものが理性の痲痺患者だとすると、私は其ういふ人て

そ助平人種だといひ度いてです、諸君は裸體の石膏像を見て春情を起しますまい、けれども助平國の住人熊公八公が見ると、やあこいつあ堪らねえな抔と騷ぎ立てます此頃或る役者が私の處へ來て博覽會の白木屋陳列場で結婚の盃をして居る人形を見た時、此次はどうなるだらうと思つたら胸糞が惡くなつたと言ひました、此の役者も助平國の戸籍に登錄すべき資格があります、そんな事をいふたら何も書けないぢやありませんか、此に於て美を尙ぶ寫生文は寫僞文となるでせう、到底眞實を書く事は出來んです、私は先生の在世中に此の議論を聞く事の出來なかつた事を頗る遺憾に思ひます。

△寫生文は先生晩年の創造です、先生の晩年は多年の病苦と戰つた爲めに人格は殆ど神の如く潔くなつて居りました、けれども一方には非常な神經質となられたです、第一喧嘩の話が嫌ひになつて、狩獵などの鐵砲騷ぎの話よりも釣のやうな話が好きになられました、當時或人の句に「春の夜の撲られ損や人違ひ」といふ句がありました、同時に私の句に「朧夜の人を嚇すや人違ひ」といふのがありました、私は撲られ損の方が面白い自分の句は詰らないと言ひましたが、先生は君の句の方がいゝ、撲られたら痛からうぢやないかと言はれました、此時私はあゝ先生も亦た病に疲れたるかなと思ふて何とも言へぬ悲しい思が湧きました、同時に只だ〳〵先生の思想が大醇に向はれて美の神が其の苦しい呼吸の間に月の如く立て居るやうな氣がしました、けれども私はこれは美感を重んずる極端の傾向だと未だに記憶して居ります、無理のない事です、猶ほ更ら先生の如く四方八方頭から爪先まで苦痛、灼熱を以て責められて居る人は美にあこがれ美に樂むのは無理のない事です、だが身體の達者な吾れ〳〵までが、嚇されよりも撲られるのが痛いからいやだ抔と病人らしい事を言ふたら、些とは譯が違つて來るだらうと思ひます。

佛前に供へん秋の草もなし

△子規論

佐々醒雪

鳴雪翁や虚子碧梧桐君を初め、所謂る日本派の方々は大抵知人であるに拘らず、故子規君には、妙にかけちがつて、一度も面會したこともない。君の晩年にはことに近所に住んでゐて、屢々門前をも通行したが、御病間を見て一度は會ひ度ひと思つて、紅緑君などに時々様子を問ひ合せてゐる中に、段々惡くなられたので、甚だ殘念なことゝ思つてゐる。かういふ譯だから、君の平常に就いては直接には、知る所がないのであるが、併し僕の竊かに敬服してゐるのは、其の句作よりも、學殖よりも、寧ろ君の人物に在るのである。

君の俳句に關する議論中にも、勿論、實際の苦心から來た卓見を認めないではない。だが、その俳句の詩趣を説いた點に至つては、必しも千古不磨の説とは許し難いものが多いやうだ。その句作の技倆も、秀句が多いに拘らず必しも虚子や碧梧桐君より優れてゐるとも斷じ難い。

君が天保以來の俗俳を排して新旗幟を樹てたことは、勿論日本文學史上の一大貢獻で、ことに元祿の蕉風よりも、天明の蕪村を推重したのは、連句を棄てゝ發句に專なる俳風としては、極て當を得たものである。しかし、これが爲めに、發句のみを重んじて、俳道の最も、主要な詩形である俳諧の連歌即ち連句を輕んじ、終に元祿の蕉風俳人が苦心慘憺の餘に成つた俳道特殊の趣味を咀嚼し盡ささなかつたやうに見えるのは、最も遺憾といはねばならぬ。「ほとゝぎす」にも、今日では連句も見えてゐるが、それは子規君の晩年から歿後にかけて初まつたことで、子規君が連句に力を用ゐなかつたことは明かな事實である。

連句は、譬へば、同人の清談のやうな、汽車の窓から見た景色の樣な、變化そのものに一種の趣味があつて、若し殆んど趣味や信仰を同じうした人々が互に唱和してゐるとすれば、誠に三公の富貴のみならず、江山の明媚も代へ難い清興であらうと思はれる。子規君

連句の美点

の俳道には、この清興が缺けてゐたことは、頗る遺憾ではあるまいか。同人が相會して、ともに發句を作つたり、互評をしたりすることも、面白くないではないか、云はゞ互に批評家と作家との位置を代へて見るばかりて、必しも其の趣味が渾然として一に歸することを豫期することが出來ない。然るに「連句では坐中の一人が前句を作ると、他の人々が直に其の句の詩形や詩趣や餘韻や、あらゆる點を咀嚼玩味して、さてこれに對する附句を案ずるのであるから、必ず作者に對して十分な同情がなくてはならぬ、從つて其の間に一座の人々は、殆んどお互の心胸に立ち入つて、其の奧秘を極めるといつてもよいので、唯句中の文字が表はしてゐる意味ばかりてはなくて、口舌や筆紙に盡し難い餘意餘情までをも、お互に心會默契する、一座は陶然として、湧くが如く俳趣に醉ふ、これが元祿蕉風の俳三昧ではあるまいか。」一座に他念があると句が出來ないといつた蕉翁の語は、必ずかくの如き俳境を説いたものと思はれる。だから、俳諧は一座の興として、俳諧過ぎての點」(即ち後日の批評)は無用のもの丶如く説いてゐる。子規君の俳道には、この清興がない。從つて元祿の俳道に對する批評は、頗る不滿足である。

だから、子規君は、矢張り發句を西洋の所謂る詩と同視せようとしてゐたやうだ。從つて發句の詩趣といふことも屢々説かれた。だが元來發句といふ詩形に、どれ程まで詩趣を具へ得べきものだらうか。なる程ドラマよりも立派なソンネットもあらう、歌よりもよい發句もあらう、大太刀必しも短刀に優るといはれない、でも、一寸の短刀では人は殺し難い。

「一寸の短刀おもちやの刀、これが動もすると發句の運命だ。強いて小詩形に複雜な詩趣を寓せやうとして企てられた發句は、おもちやの飾太刀や豆人形に似てゐる。ちよいと氣がきいて美しくはあるが、大人はその纖細を厭ふのである。かの「時のある句」であるとか、「配合の形」であるとかいつて、なるべく複雜な從つて華やかなものを歡んだのは、いはゞ人形好きの子供時代で、晩年の子規君が、専ら簡單な寫實を主張せ

られ、ことに萬葉風の短歌をも作られたのは、趣味の發展であらう。

「月や朧窓やはつきり影法師」といふやうな艶麗絢爛な調も、子規君の一たび經て來られた境であつた。だが、晩年には、全く平淡なものとなつて、「恣に葡萄取らしむ葡萄園」といふやうな或は名高い絲瓜の汁のやうな俳風に形られたのである。

こゝに重要な問題がある、影法師の句はなる程絢爛て、小刀細工であるとか、人形式であるとかいふ批難はあらうが、しかしとにかくに一種の詩境を描いてゐることは確てある。これに反して、葡萄園とか絲瓜の汁とかになると、その句に顯はれたところは、唯散文の一節に過ぎぬ。これに詩趣を認めるといふ人があるならば、それは自己の詩趣否な寧ろ特殊な聯想の力を以つて迎へるのである、發句の意味から來る必然の餘韻ではない。子規派の人は、或は僕の說の否定するだらう、だが、一般の世人は僕の說を是認するに違ひない。すれば子規君の發句詩趣論は如何に解釋すべきであらうか。

こゝに第二の問題に逢着する、子規君の俳句は果して一般の日本語を解するもの、普通の趣味を具ふるものに讀ませる詩であるかどうか。若し然りといはゞ、晚年の寫實的俳句の一半は駄作である。若し然らずといふならば、子規風の俳諧に對して特殊の知職と趣味と――否な寧ろ特殊な聯想の作用――を有するものにのみ讀ませる詩といはねばならぬ。狃に逢つたものは狃といふ語にすら慄く、一種の俳風に慣れたる頭腦は、平板な殆んど無意味な文字ても、苟も其の派の特色を具へた調子や句形に對すると、直に特殊な詩境を聯想する力を有つてゐる。芭蕉の句が總て神來の聲の如く古の俳人の頭腦に響いたのも、矢張り同じ理窟で、炭俵や別座敷の平板な句も、斯くの如くにして推重せられたのである。

人の心は古から琴に譬へられたゐる、今其の琴が習慣の力て、特殊な調子に合せてあるとすると、その設計を知つてゐる人が、適當な點に僅に一指を觸れゝば

忽ち微妙な響を發する。だが、それは特殊な調子のものゝみてあつて、一般の心琴は、毫も撼がないといふ場合が多い。例へば、「あれを持つて來い」といつても、細君は默契するが、普通人には無意味である。子規君の晩年の句には、この類の句が多い、今の虚碧兩君の句にも、これが尠くない。「あれ」といふ代名詞のやうに、唯同好ばかりに通用すればよいのならば議論はないことで、芭蕉の如きは實に同好に似すだけで滿足してゐたのであるが、子規君に至つては、その俳論と所作とが、多少齟齬してゐるではあるまいか。

故人に對して、失禮な申分のやうではあるが、子規派の俳人には濟々たる多士がある、口のない人に言ひがゝりをする類ではあるまい。

僕が故人に對して、質したいと思つたのは主としてこの點で、嘗て「芙蓉」といふ雜誌の編輯者にこれを告げたことがあつて、肋骨君の御説を聞いたが、未だ要領を得なかつた。近頃、韮山の某文學士が子規派の俳人であると聞いて、矢張りこの疑問を試みたが、同氏も同樣の疑問を懷いてゐるのだと語られた。

遮莫、子規君なくば、俳道今日の盛況はない。俳句に熱中して二十年許り倦まず撓まず、遺著の中で未だ出版せられぬものだけでも、俳句の分類帖等を初として、堆積身の丈にも餘つてゐるといふに至つては、その人格も想見せられるではないか。その發句集は秀句の數に於いて、確に蕪村太祇を凌駕して、明治以前には類例がない、これが壘を摩するものは、碧梧桐か虚子のみであらう。

その篤實な人格に就ては、曾て紅綠君に詳しい話を聞いたことがあるが、これは同君が話されるだらう。とにかく、虚碧以下、力倆は相角逐する程の門下を多く率ゐて、加ふるに舊師の鳴雪翁を頂きながら啻に俳道の上のみでなく、個人としてもこれ等の人々に師事せられた德望は、唯一の蕉翁以外、俳道に於て比すべき人もない。眞に子規君は明治の蕉翁である。

鳴雪翁が素堂とは往年來の定名であらう、虚碧の其嵐、格堂、紅綠、四方太、を初め十哲三十六俳仙など

數へることは容易であつて、門下は千や二千ではない。後世から見た子規君は、遠くして彌々高き富岳にも似てゐよう。嗚呼、一派の祖と仰がれるのは、單に技倆や學問てはない、句作は其角が優れてゐても芭蕉が祖翁てある尙ぶべきは人格である。

蕉翁逝いて蕉風は百家萬流に別れた。子規君逝いて虛碧稍異調を出したといふ說がある、統一した流行は暫く望み難いてあらう。しかも、紅綠は脚本家、四方太や漱石は先生、其他にも新聞記者などの職がある。蕉翁歿後の如き忌はしい黨同伐異の聲を聞かないのは、子規君の爲にも賀すべきてある。

△正岡子規の人物

内藤鳴雪

御承知の如く子規と私とはもと〳〵同郷のものてあつて彼の書生の時分から直接して居たものでありますから私の子規に對する觀察は自然他の大方の諸君の御觀察とも違ふ點があらうかと思ふ。然し諺にも燈臺元暗しと云ふ事があるから私は子規と近い丈け夫れ丈け却て子規の人物について知り得べきことを知らぬ點もあらうし、又夫れと同時に私のみが知つて居るといふ點も或はあらうかと思ふ。

先づ大體に申せば子規の人物は一面には非常に小心にして細かく氣が附いて、些かの事にも神經を煩はすと云ふ風があり、他の一面は非常に大膽にして周圍の人を物の數ともせず、進んでは古今に亘つて眼中に人なしと云ふ意氣を持て居た。此二つが合してあのやうな子規を成就したといふてもよからうと思ふ。細心であつたから調査することは何事によらず、細かに調査してかりそめな事をせず、充分に突き止めてから口を開くと云ふ風であつた。又大膽にして人を人とも思はなかつたから古人の糟粕を甞めず、常に新意見を持ち出して一種の達見を世に示すと云ふことにも至つたのてある。即ち明治の俳句を唱へ出して今日の盛況に至らしめたのも全く夫れが爲めてある。然し他の一面の

事としては人を容れると云ふ量は乏しくて何處までも我意見て通して了ふと云ふ風であつたから其俳句の上に就ても皆吾旗下に打ち靡けて了はねば置かんといふので、一歩たりとも讓歩して人と共に並んで遣つて行かうと云ふ者はなかつた。けれども幸にも時が恰度彼と並ぶべき英雄と云ふ程の者を出さず、兩雄並び立たずと云ふことがなく、子規獨り其の成功を恣まにすることが出來たのである。若し他に子規と同じ位のものがあつたなら、必ずや火花を散らして戰つたであらうと思ふ。其證據は今人には彼の相手とする程のものがなかつたが、古人には誰にでも喰つてかゝつた。芭蕉などの如きも一時隨分子規に輕蔑的批評を蒙つたことがあつた。蕪村のみは彼の惡評を比較的免れたが、これは蕪村の非凡の天才に我を折る所があつたからであらう。が又人を攻擊すると同時に人の長所をも見別けることが出來た。長所を沒して單に攻擊ばかりすることはせなかつた。長所は長所として短所に向て攻擊した。だから吾々は彼の批評を不公平とは見なかつたが只攻擊が少し苛酷に過ぎたと思ふことはあつた。

又彼の人物について目立つたことは、彼は前申した通り人を皆我旗下に靡けたならば其人々に師匠として臨み門弟として扱つたかと云ふに些かもそんな風がない、極く初學のものを初めとして悉く友人扱ひて、應接は固より、一切の談論も全く同等を以てして何時も師匠顏をした事がなく、從て其人々も弟子といふやうに思はず、師匠〳〵などゝ云つたものもは一人もなかつたやうである。これが一寸彼の變つた所である。然し斯の如き態度を取つたのは個人と個人との交際上である。苟も斯道の是非得失に至ては一步も假さず、飽くまで論辯し、之を屈服せねば承知せなかつた。私などは鄉里の先輩であるから常に交際上は尊敬を加へて居たけれども苟も斯道の意見の衝突となつては最早や一步も假さず、果ては罵詈にあつたこともある位である。

只子規の人物をお話すると云へば右の如くに止るが、子規が明治俳句の頭領になると云ふことは最初の

目的ではなかつたやうに思ふ。常に私は彼に直接して居たからよく知つて居るが、彼が未だ大學の籍に居た頃は哲學と文學と云ふ此二つを研究する目的であつた。それが中途病氣にかゝつて精力の充分に續かざるべきを悟つたのでつひに文學のみとし、文學の中でも亦世間一般にうち捨てゝ置いて氣がつかず、芭蕉、蕪村以來荒廢して居たものを振興させたのである。然し此れも初めから確たる目的があつたと云ふよりは、だん〳〵事に當つて研究して此處に至つたものと思はれる。然し晩年ながら餘力には尙和歌の一途にも手を着け、又寫生文も創め、又小說等にもいくらか筆を弄んだことがある。此等は天年を假さずして俳句の如く世間に勢力をあらはさずに終つたが、これも今少し病體の存續を得たなら世間にも大いに位地を得るやうになつたゞらうと彼の人物の上から信ずるのである。尙人物に屬したことをいへば世間の普通の事柄にも常の學者とは違つて餘り迂遠な方ではなかつた。交際上の音信贈答等もよく屆いて居た。これ等は全く世間の俗禮を守つた。

家計は至て貧窮な方で別に家產もなかつたから、只些かの家祿の變じた公債證書を使て學資となし、やゝ成立して後日本新聞社其他の文事に屬する報酬等で衣食を營み、一人の母と妹と三人て下女一人も使はず極めて質素な生活をして、それで病を養ひ藥を飮んで居たのである。此點は今少し餘裕を與へて氣樂にしてやりたいと傍觀者も思ふたけれども、其傍觀者も私初め貧乏人で如何ともすることが出來なかつた。病の激烈なるに充分の療養も出來なかつたに拘らずあれ丈けに生命を保ち、今はの際まであれ丈け筆を揮うたのは全く精神力の非常に强かつた爲めである。此點からいへば僅かに一豪傑と申して宜しからうと思ふ。

今一つ彼の人物に關することをいへば、理想上に於ては別に高い理想を持て居なかつた。文學上の理想も强ち哲學的の考を有して居る譯でなく、只日常眼前の美的趣味を歌ふと云ふ丈けて、人生觀も人間觀以上はなかつた。夫れ故名譽とかいふ事は子規の念頭をはな

れぬ所で、飽くまでも人に傑れた名譽を持たうといふ考であつた。然し決して一世又は現世的の名譽ではなく、長く後世まで知己を待つと云ふ考であつた。そこに至ると高い理想がなかつたに拘はらず、又一個の大人物といつてよからう。今に至るまで我々の仲間では子規を慕ひ、飽くまでも尊敬をして居る譯であるが、それは如何なる點についてゞあるかと云ふにやさしく親切に敎をして貰つたといふ春風の如き感じよりは、あくまでも堅忍不抜の精神で斯道に當ては一歩も假さず熱心に其信ずる所を敎へると云ふ烈日の如き氣象に畏服して居たと云ふ點にあるやうに思ふ。これが又普通の師弟間と變つた趣のある所であると思ふ。

終りに今一つ言うて置くのは此の如き子規其人の業務を成就することに與かつて大ひに力あつた人は前日本新聞社主の陸羯南氏である。此事に關しては私は既に他で度々言うて居るからは只此一言に止めることゝします。

△明治文壇四天王の一人

巖谷小波

此度は正岡子規君の論評を徴されましたが、實際私は、甚だ殘念ながら、子規君とは遂に面識をさへ得る機會を缺いたのでした。隨て同君に就ては、殆んど一言をも論じ、且つ評する資格は無いのです。

俳句ですか、無論多少は見ました然しそれとても、子規君一代の句を通じて見た譯では無いから、輕々しく評隲する勇氣もありません。

然し、人から聞き、又書き物で見た所によると、君は區々たる俳人としてよりは（高が文字遊戯とも云ふべき俳諧に、立派な文學らしい勿體を付けた功勞は、無論稱揚すべきだが）より以上に敬服すべき、一種の高壓力を有した人傑たる事は、私も好んで信じます。

思ふに明治の文壇では、この子規君の如きは、作家としての紅葉、評家としての樗牛、詩人としての鐵幹と共に、その早生の點、傑出の點、病軀奮鬪の點、及

び崇拜家を多く持つて居る點に於て、頗る相似通ふた、立派な四天王として推すべきてありましやう。

イヤ、相似通ふたと云へば、この四人が四人とも、皆それ〴〵にツブシの利く點、一方に非常な崇拜者のある代りに、他方て又相應に敵を有して居る點、及びその高壓力が、死後消滅しない點に於ても、酷似して居るてはありませんか。

兎に角子規君は、決して只の人ては無かつたに相違無いと思ひます。

△子規氏につき

知十

俳界の評論がしきりに面白くッて、トもすれば上下した事もありましたが、只今てはスッカリ氣が抜けて、それに座邊には「季寄せ」ぐらゐの外、俳書一冊もなく、子規のものは隨筆、書翰、句帖、雜誌、凡そ氏を評するに資となるものは一部も備へず。ソレて子規氏につき何かいッて見やうとしたところて、論も評も行屆く筈がない。一體近代の文學史、殊に俳句史には子規、紅葉などはその立場、作品についてしかと評論を待つべきわけてありますが、近來俳句もひろくはなッて來ましたものゝ、子規、紅葉盛時の如く、諸家の氣乘りがして居ませぬので、隨てソンな事に肩肱を張るものもなく、茫々の貌になつて居るやうてす。一片の資料を備へずに評論をしやうとする、同じくこの茫々を免れません、故人に對して失敬の次第にあたります。しかしそれを容赦してもらッて大づかみ二ッ三ッ感じたところを述べて見ましよう。

▲芭蕉と子規

明治の俳壇に子規氏を得たのは、元祿の俳壇に芭蕉を得たよりも得がたい事てありましよう。

元祿といふ時代は一面きわめて物質的てあつた丈に、一面これが反動の傾向もあつた。富貴利達を捨てゝ隱居自適の場に遊んだのは芭蕉ばかりてはない。四圍の事情、時代の傾向は狂句ひとすじを生涯の計と定

めざすべき次第がないてはなかつた。

明治の時代は元祿とはまるて違う。それは文學の隆興は文學者を以て身を立てやうとするものゝ多いのは、元祿よりも過ぐるところがあるが、たかゞ十七字、俳句を以て一家をなさしむるといふ事が、當代の年壯有爲の士を飽かざしめる事てあらうか。それは好きてあつたらう。感興も多かつたてあらう。しかし瓜の香物が好きたからといつて、これを生涯の常食として、一切の食物にかへやうとするものはあるまゐ。駈け出しの床屋の小僧が俳句に指を染めたとはちがう。今の世に宗匠といはれる事を一代の名譽とするものはない。しかるに氏をしてこの當世に芭蕉と似たる運命をもたしたのは、稀代の事とせねばならぬ。

氏は十七字を數字にかけて、若干にして俳句は讀みつくされべきを量知する智識をもつて居られた。氏の頭腦は宗教といふ點には傾きをもッて居られなかつた。そこて禪味と俳味との關係は顧みられはしなかつた。さういふ頭腦の新人物が禪味ひとすじの芭蕉と同じく狂句におそび、その行爲にも似たところのあつたのはいかにも稀代である。

氏をしてこゝに至らしめたのは、一言にして盡く、曰く二豎のしからしむるところ。

氏の長年の病氣は、氏をして他の仕事に從はしめるには餘りに重く。（十七字こゝに至りては極めて妙劑なり）氏をして專念この短文字に力を用ゐしめ。十年小廬、閑寂の生涯を甘ずるの外なきに至らしめたのてあらう。

生涯獨身て終られたのも疾病のいたすところてあらう。俳句と獨身は何等の係るところがないやうではあるが、芭蕉一流の俳句の立場からいへば、俳人は何より獨身がよろしい。行住座臥ともに係累のないのが自然に德を閑雅にする。芭蕉の品位の高く師表と仰がられたのは多く亦此點にある。子規氏はその易簀まで と妹に護られたのはやゝ芭蕉とはちがうが、しかし 見の煩累のないところは、いかにも超俗に見え、殊にその母と妹の質素にして親切なる看護は知ると知らぬと

を問はず、いたく同情を禁ずる能はざらしめた。これが皆な氏の病軀から來たものとして見るべき。稀代の事實であつた。素より慈母と賢妹とは氏が病氣ならずとも、やさしき天稟に缺けるところはなかつたらう、しかし氏の長病はこれを發揮して、當世にめづらしき超脫の德をあらはし、子弟の間にはよき感應、同情の念を加へしめた。超俗、自制、平和、質素かくして元祿の芭蕉は當世に再現されたのだ。子規が句を作る上に天才が高つたにしろ、その境遇が伴はずには、あの成功は覺束ない。あの境遇でなかつたら素より句の生涯は遂げられなかつたであらう。若し夏目氏に姉崎氏の如き友情があつたなら彼樗牛をかつぐよりも此子規を推し廻る方が世の贊同は百倍であらう。尤も僕はそれを殘念とは思はない。

▲子規氏の作品

『句帖』もなく『春夏秋冬』もなく、氏の作品を評すといふのは、あまりに漫然である。しかしその漫然の評を下せはかうでもあらう。

子規氏は新らしき智識をうけた頭腦である。論理的の頭腦である。十七字を算術にかけて乘除する頭腦である。一家の美論を支持する頭腦である。この頭腦は古俳句を讀む上には批評の眼となり、投寄の數千の句を見る上には主張ある選擇となる。蕪村集一部さへ合評とはいひながらあの大部のものとなつた。十七字の短形のものを捉らへて十年一日の如く考究してその配合、その位置、曰く主觀、曰く客觀、凡そ考へつくし評しつくしたといつてもよいであらう。

こう一方考究に考究をつくした上の、一方氏の作句にはこれが影響がない事はなからう。勿論その同人間にその互ひの作を同じ筆法で評し合つたのもあれば、批評の標準は直に作句の定木であらう。そこで氏の句品はどれを見ても、その智識から割り出された句である、その一家の美學に基礎をもッた作である。漫然あるものに醉つて、なぐりつけた筆ではない。あくる日見て自分で自分がいつた事がわからなくなるといふ作ではない。褒めていへば芭蕉の聯句の如くである。一

點のソツがなく、一點のヌケメがなく、何として意の達らざるはない。しかしこれを踏みちがへれは美濃派の流となる。一々定木にあてるからに破格の妙は見るべからざる事になる。一人で句を作つて居るとはちがひ、多くの人の句を選むとなると、それでなくとも自然に批評に傾き、自然にこの定木が出來る、况んや子規氏の如く一家の見地を持して句を選むからには勢ひこの理つめは免れない。

宗教といふ傾向をもたれず。隨て神秘にわたる想念をもたれず。一句を解剖して、空間、時間、を明にせむとせらるゝに至りては、その傾向は自然に主觀よりも客觀に重く、殊に一派の旗幟は『寫生』にありとするに至りては、句は明白にして解し得られざるはなく。何人がよむも不審をうつ句は一首もないであらう。もし失敗ありとすればそのあまりに明白なるところにあまりに意を經たるところにありて、即ち神秘ならざる、朦朧ならざるところにありといふべきかである。しかしそれではあまりに漫然の評である、すくなくもこれには氏の句を引きて論證せねばならぬが、座右には一の資料を備へて居ない。しかし神秘を缺く、朦朧を缺くといふのは、むしろ氏のよろこぶところで、そのしからざるところ、即ち寫生といふところに絶妙の趣味を發揮するのを上乘として居られたものであらうとすれば、この評は氏にとりてはむしろ痛くも痒くもないとであらう。

あまり漫然でこの人を評するには甚だ不足である。しかしもし氏を漫然ならず評すとすれば中央公論全部を以てするとも足りはせぬ、それは直に明治俳句史をつくらねばなるまい。僕の敢てせざるところである。

△子規と寫生文

坂本四方太

寫生文は子規子の創建に係るものだといふが、併し初めから寫生文といふものを意識して作つた譯では無い。寧ろ偶然な機會が寫生文を產出したので、それを

子規子が最も早く認めて奬勵したのである。

「ホトヽギス」が東京に移された後、其材料として毎號二三篇の美文を要する事になつた。最初に出たのが子規子の「小園の記」及び虛子の「淺草寺のくさ〴〵」、子規子は續いて「車上所見」「雲の日記」「いざり車」等を出した。是等の作が多大の興味を以て讀まれた事は云ふまでも無く、他の雜誌には一寸類の無いものゝやうに感ぜられた。併し讀者は勿論、作者自身も其寫生的なところが面白いのだとはまだ氣が附かない。只だ何となく淸新な趣味に富んで居ると思うて居たのである。

吾々仲間は子規子の勉强に激勵されて、大分文章熱が高まつて來た。吾々は當時俳句の方では可なりの天狗であつたので、俳句趣味の文章なら造作なく出來るものゝやうに心得て居た。ところが意外な事には子規子は一として吾々の文章を賞めて呉れない。俳人の文章がこれては困ると、出すやつも〳〵悉く沒書される。會ま雜誌に採用する分はひどく修正されるか、或は再三改作を命ぜられる。悔しくもあり馬鹿〳〵しくもあり、時には大に激論を遣つた事などもあつた。併し子規子は冷やかに吾々の愚蒙を嗤うて居た。

明治卅二年の頃、文章會が起された。根岸の山會といふのがこれだ。諸君の文章には山が無くていかん、とは子規子の常套語てあつた。山のある文章を作らうといふのが山會の目的であつた。此兩三年が吾々の文章の最も油の乘つた時で、鼠骨虛子碧梧桐秀谷左千夫の諸君を始めとして吾々も驥尾に附して大に勉强した。材料を採るには病める子規子の外悉く鉛筆と手帳とを携へて實地見聞に出掛けたもので、此方法によれば善かれ惡しかれ文章の種に困るやうな事は無いといふ事、机上の空想以上に面白い種を發見し易いといふ事、且つ從來の文章は概ね虛僞で散漫で不自然なものが多いといふ事も不言不語の裡に悟るやうになつた。子規子の唯一の忠言は、何でも諸君の面白いと思つた事を精しく書いて來い。面白い事が無ければ或人を捉へて話でも仕掛けて種を造れ。人が居なかつたら犬で

も構はん、終日犬に跟いて廻るが善い。さすれば諸君の手帳の中には自ら山が出來て居るといふのであつた。

山のある文章とは言換へれば纏つた名文章といふ事である。子規子は骨折つて山を說いたが、併し名文章が續々出るといふ譯には行かなかつた。これは理の當然で名文といふものが、一寸規則を說いた位で容易く出來るものでない。作者に因り場合に因り又材料に因て組織を異にせねばならないから、これは仕方の無い事だ。ところが其以外に吾々が寫生に由て期せずして得た利益といふのは實物の觀察法或は寫生法、即ち物を視て文章にする際に取捨選擇の方法に就ては、吾々一同足並を揃へて進歩した事である。各々癖を有して居ながら此點だけは不思議にも一致して來た。吾々は此時を以て始めて寫生文の旗揚げをした時代と認めて善からうと思ふ。即ち寫生的筆法で書いた明治思想の記事文といふものは他に全く類が無かつたと信ずる。子規子は「ホトヽギス」第四卷第一號の始めに斯う書いて居る。

(前略)其外にホトヽギスが力を竭した者は小品文である。それは課題を出して募集したやうな小品文もあるが、最も骨を折つたのは寫實的の小品文であつた。寫實の文章は近來非常に流行して、小說は大抵寫實的に書くといふ有樣だから、何も珍しくは無い、がそれを人事にても天然界の現象にても何にても應用して一篇のまとめた文章とした處にはいくらか今迄と違ふた點もあらう。それはかりでなく空間的の景色でも時間的の動作でも其文を讀むや否や其有樣が直に眼前に現れて、實物を見、實事に接するが如く感ぜしむるやうに、しかも其文が冗長に流れ讀者を飽かしめぬやうに書くのに苦辛したので、其效果は漸く現れんとしつゝあるやうに見える。寫實だといふので無闇に詳しく書いた處で其事物が讀者の眼前に躍如として現れなくては寫實の效が無いのであるから、こゝは我々の大に硏究すべき事である。自分のやうに年中病床に在るものは屋外の寫實が出來

ぬので甚だ殘念に思ふが仕方が無い。外の人は熱心に研究しつゝあるから段々進歩するに從ふてホト、ギスの上に光彩を放つてあらうと思ふ。

今から見れば當然の事のやうに見えるが、子規子は當時吾々の未だ夢中で遣つて居る時代に早くも斯かる特色を認めつゝ奬勵した。併し子規子とても一時に悟つたといふので無く、新しい文章が出る毎に少しづゝ〱寫生文の特色を認識して來たのである。故に細かくいへば寫生文の起りは子規子を中心として「ホト、ギス」一派の共同事業とも言はれるが、大まかに言へば子規子の創建と稱して毫も差支ない無いのだ。

子規子の存生中に現れた文章は悉く子規子指導の下に成つたといふて善い。併し歿後に出た文章は最早子規子に關係は無い。進歩しても退歩しても孰れにしても寫生文作家の責任である。今日の寫生文の傾向は必しも子規子時代の傾向で無い。若し子規子が今日まで生きて居たら、或は大に攻擊を加へるかも知れぬ。或は大に贊成の意を表するかも知れぬ。若しも今日の寫生文が子規子の意に適はないものであるならば、一口に寫生文は子規子の發明したものだといふのも、子規子に對しては却て氣の毒に感ずる次第である。

寫生文が一般文章界に與へた影響に就て書けば材料は澤山あるが、手前味噌になる恐があるから何も書くまい。扨て何等の影響も無いとすれば兎も角、若し何等かの——大にせよ小にせよ善にせよ惡にせよ——影響があつたとすれば、世人は原始時代の作家と監理者と敎育者とを兼ねたる子規子の名を永久に忘れる事は出來まいと思ふ。(了)

△子規と和歌

伊藤左千夫

正岡君に就いては、僕など餘りに親しかッたものですから、却て簡單に一寸批評すると云ふこと難かしいのです、そりや彼の人の偉い處やまた缺點も認めて居ないこともないのですが、何うも第三者の位置にある樣、

冷靜な評論は出來ませんよ。

僕も初めから正岡君とは手を握つて居た譯ではないのです、寧ろ反對の側にあつたもので時には歌論などもやつたものです、それか漸々とその議論を聽き、技倆を認め、遂に崇敬する事となり此方から降服したと云ふ姿です、それてあるから始めから友人交際てあつた人達よりは其偉らさを感じた事が强かつた樣てす從て崇敬の度が普通以上てしたらふ、てあるから僕の子規論などは往々人の意表に出てゝ、世間からは故人に佞し若くは故人を昇いたものかの樣に受取られた事が多いのです。乍併棺を蓋ふて名即定まるで、所謂明治文壇に於ける子規子の價値は、吾々の云々をまつて知るを要せぬことになりました。

今日新派と云はるゝ人々と正岡君の和歌との關係てすか、僕の考へては與謝野一派、竹柏園の一流、其他尾上金子などの一流と即ち今日の所謂新派とは殆んと關係がないと思ひます、第一趣味の根底が違つてますからね。

何う違ふ?、それは趣味上の問題てすから一言にして盡し難いが、今日の新派の人々のなす處を見ると、歌を作つるの前に其の作り出づべき題に對して先づ注文を建てゝ居るやうに見えます、仝へは歌其物の價値と云ふことを主なる目的とせないで、新しくなければいかんとか珍らしくなければつまらんとか、從來の物と是非變つてゐねばいかんとか、又新思想殊に西洋思想などを加味せねばならぬかのやうに初から考を立てゝ置いて作つて居らるゝやうてす、寧ろ詩といふものゝ價値を、直に其新しい珍らしい從來に變つた詩材若くは新思想のそれに存するかの如く考へて居らるゝ樣に見えます、彼の人々の作物其物に就て觀察すると慥かにさう見えます。

玆が甚だ六つかしい誤解し易いところですから、能く注意を願ひます、吾々とて其新しい珍らしい變化とか新思想を毫末も嫌ふのてはない、只詩其物の價値は思想や材料やのそれに存するのてはなく、或種の思想材料に作者の技能が加つた作物の成功それに存するも

のと信じて居るのです、如何に珍らしき新しき詩的材料を捕へ得ても、其成功の如何は必ず作者其人の靈能に待たねばならないのです。

只新しく珍らしく變つてさへ居れば直ちに詩として面白いものゝ如く思ふは、詩といふものゝ價値を根本に誤解して居るところから起る誤りでせう、新を好む人は只新しければよいものと思ひ、古いを好む人は古ければ直ぐに能く感ずる、是等は兩方とも間違つて居ます、新いにもよいのも惡いのもある如く古いにもよいのも惡いのもあるでせう、要するに詩作の價値は、新舊の如何思想材料の如何以外に多くの部分があるのである、着想がいくらよくとも圖とりが何程よくとも只それだけにては直に良畫とは云へないと同じである。

今の所謂新派の人達と吾々とは以上の意味に於て根本的に相違して居るのです、今申上げたことは直に正岡の言ではありませんが、僕の頭にある正岡は慥かにさう考へてゐたと信ずるのです。でこういふことを猶能く具體的に説明するとなると容易でないですから次にうつりますが、さういふ風で正岡君のやり方は、何でもかまはない只出來た歌が面白ければよい、いくら理窟は進歩的でも新思想でも變化して居つても面白くない歌は仕方がないさ、そんなものは文學でも詩でもないさ、といふ樣な調子で、有振れた事であつてなくても西洋趣味など加味せうとせまいと一向頓着せられなかつた、古事記などの詞が非常に面白いと云ふ間にも「ガラス」も「ランプ」も「ブリキ」も平氣に歌に詠んで居られた。

話が外れますが、此の頃ろ萬葉集が大變持て囃されますね、萬葉は佐々木君も面白いと云ふ、鐵幹君も面白いと云ふ、併し兩君の面白いと云ふのと吾々の面白いとするのとは、殆と其趣きを異にして居ると思ふのです、どんなに違ふか、さアこれも一寸説明が六つかしい、萬葉が好いとして取る點は、詞は蒼古だとか、思想が自然だとか調子が雄渾だとか、中には只何となく上代の國ぶりを悦ぶ類であるが、慥な事では眞に萬事の趣味を解して居るものとは元より言はれない、吾人

の萬葉の尊いとする處は要するにその歌が生き〳〵して居る點にあるが、第一に作者の詩的感懐が高い、材料の觀取が非常に廣い、言語の驅使が自在である、使用の言語が非常に饒多である、今日の歌人の作物など感興の幼稚なる言語材料の狭隘なる迚ても比較になるものではない、此等の諸點に一々實例を擧げて云へば面白いがそれは玆には出來ません萬葉の歌は死物でなくして活物だ、活物であればこそ今日我々が見ても陳腐と感じない譯ではないでせうか、此の點から見て僕は今日の新派諸子の作歌を甚だハガユク思ふ一人です、何うも其の歌が眞でない、拵へものの感じがしてならぬ、人工的であッて、天然流露の趣がない。

尾上金子佐々木等の諸君の作物には今日の處接近の見込みがありません、與謝野君ですか……與謝野君の玉と珍重する材料を僕はつまらぬ土塊をひねくつて居るやうに見えてならないです、要するに新詩社一派は根本の一個所に誤解がある様に僕には見えるです、晶子君なとも少ッと考へれば直く解りさうな間違を平て、氣て遣ッて居られる樣だ、もしこの根本の誤解を反省せらるゝの機會あらば、此の派の人々とは吾々も或點まで歩調を一にする日があらうと思はれます、これは例の鷗外宅歌會の折直接に與謝野君外出席の前で直言した事があるです。

これからまた正岡君に返ります、世間では歌に於ける正岡君は未だ成功しない様にいふ樣ですが、實際さうも云へるでせう、何にすろ正岡君の歌を遣り出したのは、明治三十二年で、尤もその以前にもちよい〳〵手を出した事もありますが、竹の里人と名乘を揚げ正式に歌壇の城門に馬を進めたのは三十二年の春であります、三十五年には最う故人となつたのですから、その研究も自から足れりと許すの域に入つてなかつたのは明らかです。然しながら歌の正岡君を未だ成功せぬと見る眼を以て他の歌人を見たらどうでせう、萬葉集以後恐らく一人の成功した歌人はないでせう

その頃ろ正岡君が歌に關する議論の變化は劇いもので走馬燈の樣でした、昨と今とは全然違ふと云ふ調子

て、議論主張は變るのが當然である、終始一貫などゝ詰らぬ事だと云ふて居られた。

歌人に與ふる書を發表した時代には俳句も短歌も要するに形式上の差であつて內容に到たつては全一のものと論じて居る、それてその頃の歌には、俳句趣味を和歌にも宿さうとした、否な宿したのもある樣てす、それが直ぐ形式の差は內容の差を伴ふべきものだと呼び俳調俳歌厭ふべしと罵倒して仕舞はれたのてす、吾々も然う思ふてすなあ、全じく詩てあつても、俳句は概括的に遣つて退ける、和歌は局部局部を唄はふとする、それで俳句では一句で足るのが和歌では五首も費さなければならぬ事もある、だが五首を一句に盡すから俳句が尊いてもなければ、一句を五首にしたから和歌が劣つてるのでもない、詩の價値なるものは全然かゝる數學的關係を絕して居るのは元よりてす。

こんな風に正岡君は常に批評的立脚地を離れないて、どの方面に向つても必ず議論と終始して、其態度はいつも研究的に周到な用意を以て步一步と進んだ人歌を遣るにも、始めはなるらん、けるらん、とかの領分から發足して、次第に一家の風調を成した樣てす、俳句方面にもかう云ふ話かあります、正岡君が虛子君や碧梧桐君に向つて、

「お前方は月並〳〵と云ふて大變恐怖がつて居るが己れなどは月並からやつて來たのだから、もう月並にならうとしてもなれんので恐怖くも何んともない、月並を恐れるのは要するに月並がほんとうに解らんからだ」と一喝を與へたと云ふ話も聽いて居ります。

正岡君などは全く天降たりした神の子の樣な詩人ではなく、立派に地上から生れた詩人てす。勿論世には天才と云ふものかあつて生れながらにして知ると云ふのもありませうが、それはそれとして正岡君の如きは孔子の所謂下問を恥ぢず下學して上達す的の人て極低い程度から始めて、徐々に高處に攀ち、遂るにその絕頂に達し、眸を四顧に放ち、一旦豁然として萬象の諦趣を悟ると云ふ如き、眞に力ある大天才てなければ出

來ぬ仕事と自分は信じて居ます、あアさうですか、まアようございませう、これでは未だ僕の子規子評は序幕ですよ、……　ぢや甚た要領を得ませんがこれで。

△故子規氏について

春　葉　生

故子規氏を一度も見た事は無かつたが、何だか非常に難かしい人のやうに思つてゐた。然し僕の知つてゐる人は、子規君は那様氣難しい人ぢや無い、客を前に置きながら歸るまで一言も發しないやうな事は有つたが、其は病苦の爲で、少しでも快い時には打解けて能く語る人だと話してゐた。

所謂正風の腐れ込んだ俳壇に一旗幟を樹てた人は古來少くは無い。蕪村や一茶や大祇は立派なものだ。然し其は唯旗幟を樹てたといふだけで、子規氏の如き事業は爲てゐない。是は蕪村だつて太祇だつて猶且昔から附まとつてゐる道樂氣といふものを離れなかつたのだから、此點に於て子規氏は何處までも眞面目だ。俳諧史上で子規氏の位置は前の三人より一層高い處に居て、宗因芭蕉と立並ぶべき人だらうと思ふ。或は宗因以上かも知れない。

芭蕉も常に流派を説いてゐるが、何方かと言へば消極的で少くも彼自身は超然主義だ、是に反して宗因と子規は徹頭徹尾進取的奮闘主義である。機山式の芭蕉に對して、不識庵めいた宗因と子規は其氣象に於て頗る似通つてゐる。但し是は作物を言ふのでは無い、時勢も違ふが、無論作物上の二家は別である。

僕は以前斯う思つた事がある。若し子規氏が五六十年前に生れて、これだけの事業を成したとすれば、俳諧水滸傳の著者は宗因の再生だと附强(こじつけ)たかも知れないと。

獺祭書屋俳話は其才能と觀察と意氣とを十分に發したもので、吾人は此一編で遺憾なく子規氏を見るが出來る。

以上は子規氏の俳諧に關する方面だけてある。

△子規子に對する雜感

戸川殘花

子規さんの評てすか、はゝあ、子規さんとは交際がなかつたし、それに子規さんは客觀詩人てすが、私はその客觀の詩といふものが大嫌ひ、ですから私に評をしろといはれゝば勢好い評は言へませんな、子規さんは蕪村、太祇などが好きなのてすけれど、私は又蕪村も太祇も大嫌らひ、從つて子規さんの句も好かぬのです、子規さんには宗教の信仰がなかつた樣てす、佛教信者てもなければ無論基督教信者てもない、會つて見たら如何だつたか、間違つたら御免なさいだ、兎に角句を見ても文を見ても信仰の跡が見えて居らぬ、俳と宗教とは問題が違うといふものもあるてせうが、然し此宗教的精神といふものが胸底に潜んて居つて、何處かに宇宙を達觀した處があると、その俳趣といふもズッと變つて來る、芭蕉翁の佛教信者てあることは元より、其角も日蓮宗の敬虔なる信者て、その精神の溢れてもあろう、極めて親孝行て且つ涙つぽい人といはれて居る、私は此樣な信仰のある人を好むのてす、從つて其角の句は大好きてす、豪放な酒脱な磊落なところがあつて王侯貴人の前でも憚らず臀まくりの出來るといふ質流石は江戸川の水に育つた人間てす、蕪村になると鴨川育ちが爭はれぬ、何處となく窮屈なせゝこましい處がある、一方は江戸趣味、一方は京都趣味といふ對照だ、子規さんは此宗教に於ける信仰がないところからか、何となく局量が狹い、人を容れる餘地がない樣に思はれる、然し氏は病床にのみ居つた人て、此種類の逆境に居る人には、得て右樣な氣質になり易いものだから、強ち咎むる譯にも行くまいが、迚も豪放とか酒脱とか磊落とかの許せる人てはないらしく、それが能く作風に現れて、規模の極小な細々したことがばかり歌はれて居る、世の名聞などに執着が深く、孜々として勉めて己が句の後世に傳はらざらん事を恐れる樣

な感じがある、それは氏自らの太祇句集の序文にも書いてある、此程にまで上手に作つて居るのに後世に傳はらぬのが、如何にも氣の毒相に見える云々といふ樣な筋だつた、私には右樣な考へ方が大嫌だ、俳家は洒々落々浮世の外に超脱して、涬跡も唯ならぬ名聞榮華などは、さらりと一風呂に流した氣持て居つて欲しい、尤もそれは見方もある、沙翁などの心持は如何あつたか知らぬが、總じて西洋人には自己の作物を永久に朽ちざらしめんとする念が強い樣だから、沙翁などは矢張りその考てあつたろう、子規さんなども、自己の精神籠めた作句をば不朽の作（イムモータルウワーク）として永く後昆に傳へんとせられたてあらう、が之は東洋趣味てはない、近松門左は誰も知る一代の巨匠てある、然かも彼の歌には「殘るとはおもふもおろか埋む火の消えて果敢なき朽木書きして」といふのがある、光風霽月の何等執着のない襟懷が窺はれるてはないか、蕉翁なども豈に一句々々後世に傳はるものと思つて秘藏して居らうぞ、然るに今のても作家達が碌てもない句の行列にも拘らず、讀んだものは何ても蚊ても大切に仕舞い込んて、其厚さ尨然此程まて（約五六寸の手積りをして見せて）にして居るのは、文藝に忠實といへばいふだが少しく滑稽だ、私は俳句は娛樂三昧のものと思ふ、此樣なことをいつたら伊藤松宇君あたりから直ぐ叱られるだろうが、私は實際其樣思つて居るのだ、何俳諧ばかりぢやない文學そのものをも其樣思ふ（コウ）のだ、要するに私は此世に執着のないといふ事が一番好きなのだ。少し立場も違うから、此處へ無理に引かうといふてはないが、仁齋門下に尾澤詢吾といふ人がある、その人の詩に、「十年蹤跡遍中州、伏枕歸家過暮秋、他日人若問遺稿、絕無一詩一風流」といふのがある、絕えて一詩なきも一風流、實に我意を得たる趣てある、我身一つの樂みに過ぎない、身後に殘らうと殘るまいと其樣なことは不關焉てはないか。處が子規さんになると此世に重きを置き過ぎる、子規さんばかりぢやない、紅葉さんなども同樣だつた、それ故紅葉さんの句も私は嫌ひだ、何、句が如何だつてそれは上手てしたは、文章と同樣に凝つたもので、修

許は奇麗なものでした、凝るものだから句作は遲い、其處へ行くと巖谷小波さんですな、早いと來たら素的に早い、私に上越して物に執着せぬ人だけに、十句百句口を衝いて出る、その句が又一切理屈のない、唯取合せの旨い處に風韻の豊かな點がある、或る時紅葉さんと小波さんと私と、一所に句作をしたことがあつたが、紅葉さんは私等が各二十句やる中に漸つと一句しか出來なかつた、いや句の旨いと行つたら子規さんも同様だ、それがそれ同情を得る所以で、巧に松山派を糾合した勢力の下に、書生連の人氣を集めるに至つたのだ、此様なことを言つたら日本派の人は怒るであらう、が私は之を以て子規さんを明治の麥太だと思ふ、まあ之位にして置きませう。

（談話筆記文責在記者）

△子規氏

角田竹冷

拜啓度々御問合せの處多忙中失禮仕候市役所へ御來訪の旨御申置き候得共故子規君の評に候はヾ實はゆるゝ愚見申上度候に付此紛々たる執務中は差控度候且常に敬愛せる故人の事なれば丁寧に觀察し其結果を申上ねば氣がすみ不申旁他日に御譲り被下度乍略儀以端書此段御斷り申上候不一

氏を訪問したら此手紙と行違ひになつたことが知れた、兎に角邪魔をして少時間談話を聞いたが、その中には子規氏に對する大體の批評もあり、斷られた理由も籠つて居るから、右の書翰と共に、茲に書き添える事とした、誤謬があつたら勿論責任は僕にある。（一記者）

子規といふ人は多少往來もして知つて居る人だから評するならば委しく評して見たいと思ふが、今は多忙て迚も悠々筆を取つたり、或は話することでさへも十分の暇がない、日々調査會とか協議會とかで役所へ詰め掛ける有様だ、勿論俳句は自分の執心の道であるから、客あれば時には話に耽ることもある、昨夕も十二時頃迄俳談をやつたが、然し子規氏、獨り俳諧ばかりてなく、他の方面にも造詣深く文運に大なる貢獻をした子規氏の如き人を評するに僅かに一二語を着けて濟

ます樣な、左樣なオッチョコチョイは遣りたくない、子規といふ人は守つて移らざる人てはなく、進んで止まざる人てあつた。氏の生涯を通じて見ると、月次調を脱せぬ時代、推理に耽つた箏の時代、死に近い頃の成熟時代等がある、何人も始から偉くはなれるものてなく次第に階を拾つて一段々々と高くなつて行くもので此變轉、之がないものは偉くはなれぬ、それ故斯樣な變化のあるのは賤むべきことでなく、寧ろ尊むべきことだ、氏は惡いと悟つたら後日之を改むるに吝かならぬ人てあつた、勿論明かに之は謬想てあつたと明言したこともあつたし、又默して潛かに改めて行つたところもある、氏の句を見るに、後に見たものは前に見たものより少しづゝ變つたところもある、凡庸なものは之を見て一寸首を捻るが、誤寫でもなければ誤傳でもない氏自らが意識してチャンと改めて居るのだ、が之を誤寫誤傳か或は左樣てないかを定めるのは容易なとてはなく、能く作家の腹に入り得る程に此方にも十分の素養が要る、それ故人の句を選集するといふ事は容易てないといふ事になる、自分の眼識て十分に取捨するか、さもなければ、能く作者の胸中の人となつて、之は未だ發達せぬ時代のもの、之は鍛錬時代のもの、之は手に入つた後の時代のものと明瞭に區別が出來、をの末年のものを鑒識して取るかせねばならぬ、或るものが私の處へ選題をしたといつて持つて來た、春の季ばかりで一萬句拾つてあるから、四季十二ヶ月となつたら大したものだ、斯樣なことは僅か俳道に入つて二三年のものに出來る業じやないと思つて大に感服したが、然し手に取つて能く見れば駄目だ、唯他人の句を雜然と收錄することなら容易いことて、見當り次第に之は蕪村だ之は子規だと拾ふなら幾らでも集せるが此樣なことては故人に對して甚だ氣の毒な感がする、如何な偉人でも咳唾悉く玉を成すものでない、その十代の作を見るなら玉石混淆、いや瓦礫殆んど山をなす樣だ、然し瓦礫山をなすといふことは侮るべきものではなく、その中に一つでも、玉が見つかれば宜いのだ玉を産むことの出來る地層なのだから値がある、が之

を選び出すのは單に鑑識ばかりでなく餘程の勇氣の必要がある、私は貞德、宗鑑、宗祇とか蕉翁、其角、蕪村、一茶、大江丸などゝいふ人達なら隨分批評を敢てするが、現在生存する人や、最近時の人はなるべく評をせぬ積なのだ、が今子規氏を評するとしても此の如く愼重の態度を必要とするから一寸には出來ぬ、十分餘裕のある折を見て、何時か中央公論紙上に細評を試みることゝし樣、唯今の處は御免願ひたい。

△正岡子規君

伊藤松宇

●私は明治廿五年頃子規君の俳句が日本新聞紙上へぽつ〳〵と登載されるのを見まして、例の月並宗匠の句とは餘程趣きが變つて居るし、又折々俳論抔が見ゆる、夫れも中々着眼が高い所から一度同君に逢て俳諧上の意見を聞て見たいと思て居りましたが何分能い傳が無い、其内に文學士高津鍬三郎氏が其頃高等中學と大學の國文學の教師をして居られ、私に俳諧の事を聞て見たいと云ふので尋ねて來られ、談偶々正岡君の話に及び、同君は今大學の文科に居られ時々俳諧の話も出て貴君の事も能く談て居られた、何か近什でも有らば僕が取次で遣らうから見せてはどうだとの事で、私には誠に渡るに舟の好都合で、そんなら是を一つ同君に評して貰い度いと云ふので高津文學士に依賴しましたのが、其頃作て置いた富士百首、隨分いかゞはしい物斗りでした、間も無く子規君から評が出來て來ると同時に子規君からも富士百首が來て、私にも評せよとの事て、夫から私も早速評をして同君に送た、雙方の富士百首が今も殘て居りますが、イヤハヤどうもお話しにならない程幼稚なもので、餘程滑稽な事が有り升、今日あれを出して見ますと實に冷や汗です、其後一夕子規君が私の宅へ尋ねて來られて俳談數刻に及びて別れましたが初めて、爾來屢々行きかひして非常に親密に成りました。

●廿六年の春友人片山桃雨氏の發起で子規君と森猿男

氏と私の四人で「俳諧」と云ふ雜誌を發行し、子規君は俳諧に關する論説並に選評を擔任し、私は古俳書の解題を受持ち、桃雨氏は會計の任に當りましたが、其頃新派の俳諧雜誌を發行したのですから、世間で一向歡迎して呉れぬ、とう／＼三號目で廢刊して仕舞ました、蓋し新派の俳諧雜誌は之が嚆矢かも知れぬのです。

●私の子規君に一番敬服しますのは、非常に意志の强固で有た點です。

●子規君が意志の强固なりし爲め、彼の月並宗匠を壓倒し、明治の俳壇に一新生面を開き、俳句の位置を向上ならしめたるは、全く子規君關て力有りと思ふのです。

●私は最一ッ敬服しますのは、俳句より文章の方が餘程旨いと思ふのです、同君の文章は一種の感動力が有て、此感動力の爲めに俳句の説明でも、序辭論説でも、何でも人々が傾聽し且つ欣慕されたやうに思ひます、私の編輯しました、時雨紀念の序や、五傑集の序の如き、實に千古の名文にして、之を今日の文章專門家に需めても容易に得られべしとも思はれませぬのです。

●連句は非文學なりとして餘り研究せなかつたやうで有りましたが、今日まで存命で居られたなら必ずや何か一新機軸を出されたに違いないと思ひます。

●私は廿七年の夏遠州の片田舍へ引込みまして三十一年の夏迄、足掛五年の間都の俳壇に遠ざかりました、此間に子規君の盛名は非常に高く成られた樣子でした、私は東京へ歸て來て猿男君と同じく秋聲會に入りましたから子規君との俳交は全く絶ちましたが、私交は更に變らず、私も時々同君の病氣を見舞ひ、同君は自分の著書は發行ごとに寄贈して呉れましたし、又ホトヽギスも長逝さるゝ月まで缺ずに送て呉れました、矢張意志の强固な爲でも有りましたらう。

△子規書簡集を讀む

沼波瓊音

子規は裏面の無い人で思ふとは何でも構はず曝(さら)け出

した人だ、こゝが子規の特色で又ホトヽギス文學一切の特色である、まして其書簡を讀むと子規其人の心情が實に殘る隈無く顯はれて小氣味が宜い。

子規の書いたものを讀んで痛快に思つたとは固より屢あつたが又餘り獨斷的で自分で佳しと思ふものは人悉く佳しと思へ自分で佳からずと思ふものは人悉く佳からずと思へと云ふやうな調子があるのが厭に思はれたが、形にのみ苦しんだ文學の嫌味よりはまだこの嫌味の方が忍び得られるものだと此頃では思つて居る。盧子が「詩人とは言葉を詩にするものに非ず其心を詩にするものなり」と云つたを子規が贊成してるのはよく彼の一生の態度を說明して居るものである。彼は心を詩にする爲に見聞し讀書し、そしていざ筆を執ると云場合には心に思ふ儘其儘書くと云ふとにのみ注意したのである、そこがホトヽギス文學の骨である。

彼が自ら「世間野心多き者多し然れども彼れ程野心多きはあらじ世間大望を抱きたる儘にて地下に葬らるゝ者多し左れども彼れ程の大望を抱きて地下に逝く者はあらじ余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり左れどそれさへも未だ十分ならず縱し俳句に於て思ふ儘に望を遂げたりともそは余の大望の殆ど無窮大なるに比して僅に零を値するのみ」といひ又「僕亦いふ覇氣强からざるべからず覇氣强き時は目的も亦大なり目的は如何に大なりとも段々に小になるの傾きあり故に目的は大ならざるべからず又覇氣は强からざるべからず」と云つてるのは其心情見る如してある、兎に角大きな目的を遠く立てゝ置き近く具體的な小目的即ち階段を立て其小目的をドシ／＼達して進んで行く、此遣り口は倦怠を招かず愉快に步を進め得る良方法であるが如何せむ彼に不治の症があるので小目的を達し續けつゝも實に焦慮りに焦慮つた、そして「死は近づきぬ文學は漸く佳境に入らむとす」との歎聲を發したのである、小目的を達し續けた點に於て彼は幸福なる人であつた、病の爲に焦慮るべく餘儀無くされた點に於て不幸なる人であつた。

子規は獨斷的で一酷で偏屈で顏の向けられぬ程剛慢

な人のやうに當ては思つて居たが門弟に與へた書簡を見ると怒鳴り付け嗡付けるやうな文句のうちに實に溫かい〱親切な情が籠つてる、この情を酌み得ずして怒鳴られたのを怒つて彼から離れた人も或はあつたかも知れぬ、併し虛子も碧梧桐も其他の人も皆其情を酌んで彼を離れなかつたのは子規の爲ホトヽギス文學の爲幸福なことであつた。

子規が母に對する孝心が書簡集を讀んだお蔭によく解(わか)つたのは僕の嬉しく思ふ所である、それは母を伴つて上京した途の旅費を叔父に報じた手紙の一節を讀んで解(わか)つたのである、それを讀んで僕は泣いた、それとは次の文句である「私は京都神戸遊覽の事に中等汽車に乘り候事ははじめより自ら咎を引く積りにて斷行仕候身分不相應との御叱責は固よりさることなれども私は私の一生に二度かゝる機會あるや無きやと云ふことに付て寧ろ無之方に相考へ候故に御座候……贅澤と知りながらことさらに贅澤したる汽車代遊覽費等は前申上候通り母樣に對しての寸志にして前途又花咲かぬ此身の上を相考へ候て黯然たりしことも屢に御座候」

△正岡さん

大谷繞石

正岡さんに就て何か書いて吳れといふ御依賴を受けて、ハイ何か書いて上げませうと安受合はしたものの、偖て筆を執つて紙に對つて見ると、更めて書き記るす程のことが殆んど無いにはよわつた。が、それでも濟まぬから、懷ひ出すことを順序も無く書いて見やう。

正岡さんの名は、僕は高等學校初年級在學の頃に知つた。面會したのは確か廿九年の九月の拾日、正岡さんの宅で俳句會の開かれた日であつた。それから三四年の間は、一ヶ月に大抵一二回づゝ會つたが、特別に訪問して文藝上の話を承つたことは眞に數へる程で、其他は皆な俳句會の席上でのことで、それから僕は暫時田舍へ引籠ることになり、自然文通も怠るといふことになりて、箇人として正岡さんとは次第に遠退くやうになつ

たが、然し田舍に居る間も、その作物には始終眼を通して居つた。
元來僕が俳句に趣味を有つやうになつたのは、京都の高等學校に居た時分に同級生の中に虚子君が居られて、同君等が主腦で後來文科に籍を置かうと思つてる連中を集めて、そして銘々自作の小說詩歌美文評論といつたやうなものを輯めて廻覽雜誌を造られたヿがあるが、それへ虚子君が頻りに俳句を出されたので、それを見て初めて俳句の趣味を朧ろ氣に覺つたのである。自然同君の宿も每度訪ねる。そのうち自分の仝鄉の先輩に正岡子規といふ俳句に熱心な人があるといふ評を聽いたのが正岡さんの名を覺えた初めて、「小日本」に現れる作品なんどは殊に愛讀するやうになつた。それから出版にはならかつたやうてあるが、正岡さんの編まれた「一家二十句」といふものがある。宗砌、心敬、宗祇、宗長、宗碩、宗鑑、宗武、紹巴、玄仍と時代を追ふて、非風、瓢亭、古白と自分の仝聲まて、丁度百五十俳家を選んて、自分てその傑作と思はれたのを廿句づゝ集めたものである。これは廿六年の冬當時虚子君と同宿てあつた碧梧桐君から借受けて僕は寫して置いた。此時に僕は、正岡さんがその研究に誠實熱心てあるのに先づ感服した。
それから京都の高等學校が解散になつて僕等は仙臺へ追ひ遣られるやうになつたが、恰も虚子君碧梧桐君も仙臺行になられて、御互に文科に籍を置くヿになつたので愈よ親しく交る、俳句を勸められるといふ仕儀て、仝じく仙臺行きとなられた四方太君と共に虚碧二君の指導を受けるヿにした。所が間も無く二君は退學して東京へ遊學されるヿになつたが、殘つた四方太君と僕とは同じ宿の同じ部屋に机を並べて相共に句作に耽つたヿもあり、そして虚碧二君からは相變らず手紙の上ての指導を蒙つた、だから其時分日本新聞紙上に現はれた正岡さんの「俳諧大要」などは精讀熟讀したもんて、僕等が日本へ投じた句屑が幸ひに正岡さんに拔かれると實に愉快を感じたもんてある、だから四方太君と一所に大學へ入るヿになると、一所に正岡さんの

宅を訪ねて種々文學上の話を聽かうと樂しみにして居た。

所が根岸の方面は一向地理不案內であり、四方太君は歸省して仲々上京して來ないので、それで廿九年の九月十日、碧梧桐君に道案內して貰つて獨りで初めて面會した。其頃はまだ病氣がさう進んで居なかつたから、起き直つたり腹這ひになつたりして談話されたやうに記憶して居る。

斯んな事情の下に初めて面會した僕が、その時どう感じたかといふに、どう言つて善いか一寸文句に困るが、溫かな慕はしい人だと感じたといふ他に言ひやうが無い。運坐の會に集る連中は一二の人を除いて、先づは文藝の上から言ふと遙か後輩の者のみであるのに、それ等に對する正岡さんの言葉が至つて穩かで、長上らしい言葉が決して無い。衒氣が微塵も無い。慢氣が更に無い。僕は實に慕はしく感じた。

此の時分は、運坐に集る者、否な所謂日本派に屬する俳人が左程多く無かつたので、會するものはいつも鳴雪翁、虛子、碧梧桐、露月、紅綠、四方太、墨水、把栗、瓢亭、肋骨、愚哉、樂天、碧玲瓏の諸君で、十五人以上のヿは滅多に無かつたやうに思ふ、だから運坐も今時の運坐のやうに騷々しくも無く實に趣味ある會合で食事中も種々な雅話が取り交されるし、運坐終つてから色んな文藝談が始る有樣で、その間知らず識らずの裡に非常な教訓を得たヿと思ふ。俳句の指導の他に、これも亦正岡さんの御蔭で、大に感謝せねばならぬヿである。

前に述べたやうに、正岡さんには毫末も衒氣が無く慢氣が無く、そして後進の者を誘導するに頗る懇切であつたといふ事は特記せねばならぬヿである。今思ふと、あんな容態の身體で、あれ程思索執筆に多忙で居ながら、能くもまあ澤山の地方俳人の俳句選拔を請ふのに應ぜられたヿと思ふ。近頃出版になつた書翰集を讀んで見ても、その後進誘導の懇切であつヿが能く判るでは無いか。

そして俳句研究の指導にも、決して自分の好む句風に從はしめやうとはせで、その人その人の長所短所を

能く見分けて、その長所を發展させるやうに力められたやうに思ふ。讀者は二十八九年頃の俳風を御存知であらうが非常に變調が流行した。字餘りの句で今記憶して居るのに

白きは山櫻蛾の如きは人なんめり　鳴雪
奥の院へ十町と記す石に凉む　子規
若葉日さして小鳥など鳴く嬉しき　碧梧桐
深き藻の花の白き蝦の長き足　同
案山子喟然として曰く如かす遺民となならんには　左衛門

といふのがあるのを見ても判る。僕も

水鉢に石置いて三つ計り水仙の根
散つて芒雨に風に月に恐なり
蒲の穗や日を背に湖を小さき帆走する

などゝ大分造つた。然し考へると餘りに變調である。それで一つは俳壇の景氣をつける爲めに、當時の帝國文學で僕は稍や之を批難した。すると日本新聞の白雲君(俳號飄亭君)が僕の書いた雜報に答辯されて、互に言ひ合ひ論じ合ふて、たしか帝國文學の三號か四號に渉つて僕は書いた。論戰の終つた月であつたと思ふが、正岡さんの宅での運坐の席上で飄亭君に會ふたら、同君が僕に、帝國文學には今迄俳句の雜報が無かつたのに近來僕等のことを何んだか彼んだか論ずるが一體あれは誰れが書くんです、といはんたので、僕は、ハヽあれは僕ですよと言つたら、それを聞いて居られた正岡さんは、例の飛び離れた眼を細くしてヒヒと微笑された。その時僕に何とも話しは無かつたが、後で他の人に向つて、あれを變調だと難ずる人があるだらうが、兎も角一歩俳句が進歩したのだ、境地を開拓した譯だ、そのうちにまた自づと發明することもあらうし、何も邪道呼ばわりをするに及ばないと言はれたといふことを聞き、顧みて自分の幼稚な見解を恥ぢたことがある。

それから正岡さんは非常な勉强家であつた。あの身體でよく俳句分類などの面倒な仕事をされたことだと思ふ。いつか僕が伺ふた時、テイヌの英文學史を讀みたいから貸して呉といふとて貸して上げたことがある。そ

の時にもさう思つたことだが、僕等のやうな頑健な者は、もつと〱奮發して勉强せねばならぬ。

それから正岡さんは或る程度までは色んなことに博く通じて居られたやうに思へる。「墨汁一滴」や「病床六尺」を讀んだ人は直ぐとうなづくことであらう。

それから事に趣向を凝らす人であつた。ホトトギスの當時の編輯の具合が他の當時の文藝雜誌と軌を異にして居たのを見ても知れる。運坐の例會は別だが、何か特種の會合には必ず一趣向凝されたものだ。卅年正月四日の新年會には福引をやつて、貰つた品物に就て一句づゝ徵するといふやうなことをされた。

福引の虛子にあたるや赤き足袋

いふ句があつて、そして旨く小さな赤足袋が虛子に當つたので微笑された顏が頭に殘つてるが、それも此時てあつたやうに思ふ。この年の蕪村忌の折てあつたと思ふが、行つて見るといふと、床の上に色んな八百物が陳列してあつて、それに一々附紙がしてあつた。蕪の下には鳴雪と記るしてある、胡蘿蔔の下には墨水とあるの類て、それに一々註が施してある。例へば山の芋の附紙には「四方太、つくね芋に似て長し」て、慈姑の附紙には「漱石、旨けれども少しゑぐい處あり」の類てあつた。そしてそれが大抵あたつて居るやうに思つた。

前に正岡さんは溫かな慕はしい人てあつたと言つたが、然し唯の溫和な人ては無論無かつた。初對面の後進の者にも極鄭寧な取扱をされると仝時に、鳴雪翁などに對しても文藝上の談論には隨分手酷しい言葉も用ひ、自ら信ずる所を强硬に主張されたのを耳にしたこともある。そして時間の約束とか、物品の貸借とかいふことには几帳面てあつたやうに思ふ。

要するに僕が敬服して居たことは

後進誘導に誠實熱心てあつたこと。

あの病氣て居ながら病氣に煩悶することも無く着々文藝の事業に從事して居られたこと。

文學者に有り勝ちと思はるゝ傲慢な點は少しも無くて謙遜な、下問を恥ぢぬ、凡帳面な人てあつたこと

て、實に僕等の師表として餘りある人であつたといふ感が今更ながら起つて來る。

なんだか話が散漫て讀者には讀みづらからうと思ふ。それに僕の外に、俳句中興者としての正岡さん、歌壇に一旗幟を樹つた歌人としての正岡さん、寫生文鼓吹者としての正岡さん等色々御話さるゝ方があらうし、僕には出來もせぬから、これ丈けて御免を蒙るとにする。(八月十七日)

故大槻磐溪の逸事

文學博士　大槻文彦

亡父磐溪の逸話を聞かせろとおつしやるか、逸話も澤山あるが、今一寸思ひついた事を、二つ三つ、御話しよう、

今、清國韓國て、利權回收とか、排日熱とかて、騷いて居るのを、惡罵する者も多いが、五十年前の日本のありさまを考へたならば、餘り惡口もきかれまい、嘉永六年に、魯西亞船が長崎へ來て、交通を請うた時、磐溪が隣交行といふ詩一篇を作つた、すると次のやうな和韻をしたものがあつた、

隣交行

九㆓分宇內㆒有㆓其一㆒。肯比米利與㆓英吉㆒。不㆔唯萬國推㆓帝號㆒。風俗淳龐人沈實。我是天地一桃源。花開花落三百春。縱使㆓洞門深自鎖㆒。其奈外人來問㆑津。不㆑如及㆑今結㆓情好㆒。假㆓手隣邦㆒防㆓强暴㆒。君不㆑見煙波萬頃瓊浦秋。空艦只待一封報。

右長句一篇。大槻平次所㆑作。一誦百罵。不㆑堪㆓覼瑣之障㆒。因以㆓狂詩㆒和㆓其韻㆒。以戒㆘亂心如㆓平次輩㆒者㆖。

世間馬鹿誰第一。蘭醫小僧溺㆓英吉㆒。曾作㆓愚文㆒稱㆓獻芹㆒。大言一向虛無㆑實。何知王道有㆓淵源㆒。皇統綿々幾千春。身生㆓皇國㆒心歸㆑賊。馬乎鹿乎彼何人。漫稱外國風教好。其奈追㆑年慟㆓亂暴㆒。君不㆑見百千萬歲祖宗恩。彼馬鹿輩何以報。(自注云、原韻押㆓津字㆒。今押㆓人字㆒。和㆓馬鹿詩㆒。固不㆑拘也。)

蘭醫の小倩とは、磐溪の父大槻玄澤は、阿蘭陀醫であつたからである、磐溪、又獻芹微衷と題する開國論の建白を書いた事があつた、開國とさへ云へば、直ぐに罵詈したは、此和韻した人ばかりではない、其頃全國の人が、皆さうであつた、此人は誰だか分らなかつたが、近頃、蒲生重章の作つた近世偉人傳の五編を見たら、月形弘といふ人の傳があつて、

月形弘者。舊福岡藩士也。通稱三太郎。晩改稱深藏。號漪嵐。云々。會同志講尊攘之道。時東北阪有一老儒。好蕃學主和議。弘次其七古韻。極口罵詈。云々。文久二年四月五日沒。年六十五。

とある人だ、此人が、今の世まで生存して居たならば、何と思ふか、

又、安政四年八月、京都所司代の脇坂淡路守が、江戸へ歸つて、磐溪に、當今の時勢を問はれた時、磐溪が、次の詩を作つて呈した、

天開行

天開鎖國通聰明。靈慧妙智從斯生。日月所照地所載。自有火船可横行。奈何此時却猜々。窘於蕃吏智亦屈。吾恐一旦邊警傳。不免呼神仍呼佛。何如直駕萬里風。一擧雲鵠凌長空。君不見出洋一歩天地別。仙島神山森羅列。

閼藍梁云。此篇最是磐兄得意之作。但鋒鋭太發露。似無含蓄氣象如何。春田九皐云。詩有當含蓄者。有不當含蓄者。如此篇痛快必若許。而爲得體。但其所論。或有不必然者。當待面晤竭之耳。崇云。當時不聞其說。至今以爲遺憾。

當時、親友の間でも、かやうな評があつた、

又、萬延元年正月、幕府の軍艦奉行木村攝津守が、亞米利加に航する時に、磐溪が詩を贈つた、

乘長風破萬里波。快語久聞紙上傳。何圖今日在日域。送君長風萬里船。維　皇安政七年春。洋千八百六十年。新公垣公奉使節。鷁首遥指米利堅。木公別艦導之往。火輪先着第一鞭。是爲吾邦航海始。開物至此豈非天。嗚呼長風萬里行。幷君胸中書萬編。實往而實歸。示我天地未曾有之雄篇。（新公垣公は、新

見村垣の二氏である、）

其翌、文久元年十二月、箕作秋坪先生が、竹内松平の二使節に從て、歐羅巴を巡られる時に、贈つた詩がある、

自ㇾ開二海門一達二四聰一。萬里風濤信始通。米魯英佛望ㇾ風至。孛漏葡荷競朝ㇾ東。來而不ㇾ往亦非ㇾ禮。今日奉ㇾ使有二二公一。博望窮河何足ㇾ比。延陵歷聘略相同。從官箕子稱二才俊一。載二將橫文一助二其信一。咨詢本是使臣事。好把二工藝一細問訊。窮理精確彼所ㇾ長。周二遊名都一技益進。噫嘻四寸舌一枝筆。待君來佩六國印。

當時、攘夷鎖國の論の、火の燃えるやうな世の中で、かやうな論ばかりして居たから、磐溪は、人々に憎まれた、其頃、開國論を唱へた人は、幕府の人々を除いて、滿天下に、磐溪と佐久間象山ぐらいのものであつたが、象山は凶刃に斃れ、磐溪は辛く免れた、是等の事を思ふと、洵に今昔の感に堪へない、併し、今は昔の物語となつたは、實に目出たい事である、明治五年に、磐溪の左の作がある、

眼看文明開化風。自嘆先見不ㇾ欺ㇾ公。一千八百西洋暦。七十二星歸二此翁一。（明治五年は、西洋千八百七十二年、磐溪は、七十二歳であつた、）

あゝ、淸國も韓國も、早く眞の文明開化に進めてやりたいものだ、

東西比較　楊柳美觀論（下ノ上）

芥舟漁郎

七八月兩回の休講は例年の如く余の學窓最も多忙なる時期にして執筆すべき餘暇なかりしによる、茲に記して反省社及讀者に謝す。

絹柳の俗名がOsierで猿柳の俗名がSallowであるから Willowなる總名のもとに歌ふ英米詩人がまづは極めて尠いと斷じても、枝垂柳の輸入が新しい爲めに、古代より悲哀の意味を背負ふて居る柳屬のうち俗名もWillowで通る、比較的に顯著なる若干種を茲に記すべき必要があらうと思ふ。弱柳 S. fragils とても譯

すべき一種の柳は英吉利に於いて立派に樹木として存する最も重なる二つのうちの一つであるが、二十年にして八九十呎の高さに達する。若條は柔軟ながら丈夫であるが其根本のところから容易に折り取ることが出來るので、俗名Crack Willowを帶びて居る。葉は鎗形で三吋乃至六吋の長さを有し、四五月頃に柔芽を現はす。他の柳と同じく濕り勝ちの低地を好むけれども、さらばとて平原のみに限られずしてノーサムバーランドにては海拔千三百呎の高地にもある。北はロッスシャー迄に及ぶ。白柳 S. alba は日光が葉面に當つて反射するときの美觀から稱せらるゝのであるが、繁き葉のある夏の頃、水邊に枝を垂れて居る趣きを視ると、洵に美しい。樹の高さは六七十呎に及び、葉の長さ二吋乃至四吋にして極めて狹長である。弱柳と白柳との間種にベッドフォード柳 S. russelliana とて高さ五十呎までに成長するものもある。佛蘭西柳 S. triandra は小木であつて高さは凡そ二十呎、河岸に沿ふて絹柳などゝ一處に見られる。白柳ほど枝々が繁らないやうであるが、また捨てがたい趣きがある。老利兒葉柳 S. pentandra といふて老利兒の樹の葉に似たる芬香を放つ葉の長さ一吋乃至四吋ほどの卵形葉を具えて、樹の高さ凡そ二十呎程の小さな直立せる樹となるが若しくは八呎程の灌木なる一種の柳がある。柳屬のうち最も遲く花咲くと稱せられて居る。

ところで、是等の楊屬柳屬を參照しながら支那及日本の分布を取調べて見ると、同じものも異なれるものもあるので、美觀として詩歌の着目したる諸點を比較するに興味を生ずる。移楊は西部亞細亞から東部西伯利亞にまでも及び、支那の東部北部西部中部と日本とにある。黑楊の變種たる支那黑楊は中央支那と北支那とにあるが日本にはない。白楊は日本には無論なく、支那にもない。支那で白楊と稱するものは移楊のことか、左もなくば或る一種の楊のことであつて、此一種の楊といふのは支那黑楊のことらしく自分には思へる。英吉利に於いては千六百九十二年初めて北米よ輸入したるバルサム楊 P. balsamifera は北亞米利加

ら日本を經て東部西伯利亞及び支那の東部西部北部中部に分布し、變種Genuinaは支那に於て胡桐と呼ばれ變種Suaveolensは日本に於いて通常デロだのドロノキだの北海道でヤイニなどゝ謂はれて居て、北米では八十呎にも達するが英吉利では四五十呎を出でずに、卵形の稍々鎗形に近き葉を具えて居るものである。此他支那にはP. adenopodaもP. lasiocarpaもあるから日本の二種に較べては三種も多いので、甚だ豐富と稱さなければならない。柳屬は日本も支那各々十數種もある。就中、西に擴がれる枝垂柳が東は中部南部東部の支那に亘りて日本を席捲し、殆んど柳屬の代表となつて居るといふ事實は最も注目すべき價値がある。吾々が東京市中を散歩しても枝垂柳は目を衝く程澤山あるので、普通は柳といふものは枝垂柳をいふものだと思つて居る。老利兒葉柳も猿柳も絹柳も共通であるが、また水楊S. purpureaも東西に亘つて共存する。

友の南京より還り來れる者、支那の不潔を罵倒し、野卑を罵倒し、無趣味の風光を罵倒し、豚と家鴨と泥水の支那だとまで罵殺するに拘らず、楊花紛々飛び去り飛び來つて雪の如き下を悠々として二十世紀を知らない支那の大官が輾して行く美觀は眞に日本に見られざる一幅の好畵であると口を極めて嘆賞する。友の南滿より凱旋したる者、「胡砂吹く風」に始めて逢ひ「車軸を流す雨」を始め沐びたが、別して沁み〲と心に感じたことは、文字其儘の意味に於いて柳は遠く烟るが如く芳屋兩三其間に隱現し、若しくは輕々たる柳絮人衣を點して、日本にあつて未だ一度びも覺えざる這般の詩美を恣にすることが出來たことであると言ふ。全體支那に於ては楊柳と併記して楊と柳とを意味するときと、唯だ柳だけを意味するときとあるのは、丁度日本と同樣であるから、楊柳長く垂れて地を拂ふなどの文句も珍らしくはないが、流石に楊條が長く垂れるとは謂ふてないやうである。それから楊花でも柳絮でも事實上差支はないが、吾が兩友孰れも植物學者でないために、枝垂柳でないことだけは分つても、恰かも龍山の雪と見紛ふばかりに地に滿ちて來る花は楊の絮

か將た柳の絮か、これ又た植物學の智識甚だ覺束なき自分がところ／＼を尋ねて見ても相手の觀察も足らず自分の判斷も鈍いので、遂に全く要領を得ない。しかし詩美の研究としては楊柳なるものがあつて、これが枝を垂るゝときも、絮を飛ばすときも、風に亂るゝときもあると感じただけで大なる差支はない。蓋し支那流の識別法は「柳は楊の下垂する者、楊は柳の揚起する者」といふ極めて簡單にして曖昧なる識別法であつて下垂せざる柳をいづれに置くかゞ分らないやうな有樣であるからだ。

崔豹の古今注に「移楊圓葉弱蒂微風大搖一名高飛一名獨搖」とあるのに賈思の齊民要術に「白楊一名高飛一名獨搖」とあるから、移楊と白楊が同一物になつて仕舞ふので、李時珍の本草綱目によつて「鄭樵通志言白楊一名高飛與移楊同名今俗通呼移楊爲白楊且白楊亦因風獨搖故得同名也」を參考として覺えておくは必要であるが詩觀上一つにしてもよい。埤雅には四種ありと稱して「白楊葉圓青楊葉長赤楊霜降則葉赤材理亦赤黄楊木性堅緻難長俗大抵云歳長一寸閏年倒長一寸」と區別してあるが楊屬のうちに葉長のものはない筈であるし、楊屬柳屬のうちに木性堅緻のものもない筈であるから、記述が甚だ粗笨なる爲めに果して柳屬を含有せざるや否や果して楊屬柳屬以外のものを含有せざるや否やさへ頗る不明である。唯だ王象晉の羣芳譜に「北方材木全用楊槐楡柳四木是以人多種之」の文句があるから北方に於いては楊と柳とが普通に逢遭し得られるであらうとの想像だけはつけることが出來るけれども縱令、楊以外のものがあるにもせよ、しばらく支那流の觀察法に從つて其詩觀を調査する方が至當であらうと思ふ。

易經に所謂「九二枯楊生稊」「九五枯楊生華」は、楊屬柳屬の陽氣に感じ易くして濕地を好む點に着眼して居るのであらう。但し稊を根とする說も葉芽とする說もあるが自分は更に一說たる蘖とする說に贊同したい。さうすればShootを出すところをも着眼したことになる。詩經に所謂「東門之楊其葉牂牂」も「昔我

夾楊柳依依」も共に葉の盛んなる貌であつて「阪有桑隰有楊」も「南山有桑北山有楊」も共に楊柳の陰濕なる土地を好むところを知らせ「汎汎楊舟載沈載浮」も「汎汎楊舟紼纚維之」も楊にて舟を爲くるべきことを想はしめる。更らに支那黒楊ではあるまいかと疑はれる所謂白楊に就いて言はば古樂府に「白楊初生時、乃在豫章山、上葉拂青雲、下根通黄泉」とあるだけでは未だ此楊の特色が擧げてないけれども詩聖李白の句になると「白楊亦肅肅」とか「腸斷白楊聲」とかあるので、移楊黒楊白楊灰楊などの葉が風につれて容易に鳴る趣が忽ち現れて來る。昔者、梁修仁新に大明宮を作りて白楊を庭に植ゑ、何力に示して此物成し易く數年ならず庇ふべしと曰へるに、何力は答をなさずして但だ「白楊多悲風、蕭蕭愁殺人」の句を誦したので、修仁は驚悟して更に植ゆるに桐を以てしたといふことが何力傳に出て居るが、風に鳴り騒ぐ楊の詩美は東西を通じて渝らぬと見える。

尾崎紅葉

塚原澁柿園

紅葉君とは御懇意にしました。て其の性格も一通りは存じて居ます。極めて熱誠のあつた昔しの江戸ッ兒肌の人で、或は文學者といふよりも寧ろ政治家質(タチ)の人であつたかとも思はれる。人を動かすのは熱誠だが、その點からしても、氏の文章が一世を風靡した所以が知れます。私の知つて居る人で彼れ位熱誠のあつたのは、外には星亭さん位のものですな。斯樣の氣質の人の常として、偶(ひよつと)したことが癇に障る。紅葉君も此て一寸附合惡いところもあつたが、附合つて昵懇を重ぬるに至つたら此程懷かしい人はあるまい。極端にまで憎まれる敵となつたら堪らない。その代り氏の門弟子に對する情誼も同じく極めて親切なもので、血を分けた骨肉でも到底及ばぬ程に世話を燒かれる。今の風葉、鏡花、春葉等の諸君が先生々々といつて、沒後

幾年といふ今日迄も慕はれるのは全く其所故だらうと私は信じて居る。併し又た一面にはそれだけ嚴肅て、時としては破門談なども持上る。其れもやッぱり氏の熱愛の餘に出た、其人の爲め好かれがしの折檻だから破門された方でも決して恨みとはせず、筋道を立てゝ詫を入れると氏も納得されて、勘氣がゆりる。ゆりると又た以前に變らず大肌をぬいて世話を燒かれる。其處らの胸襟の洒落といふものは實に昔しの江戸の侠客といふものは此んな風でもあつたらうかと私も每々敬服させられたです。其れから氏は、諸事「生熟」といふが大嫌ひて、此は角田竹冷氏から聞いた話だが、僅か十七字の俳句の上でも腑に落ぬ事は合點しない。私は俳句に於ては眞正の門外漢だから能くは分らぬが、僅々二字か三字の布置按排の上についてもそれが一場の座談では濟まされずに、直樣尋にも餘る長文の消息となつて、竹冷氏の机上に舞ひ込む、竹冷氏が之に答へれば氏は又直に之に酬ゆる、氏の根氣には驚くと竹冷氏も言つて居られた。又た氏は文章に於ては百千練磨主義を取られたので、一字一句も疎かにすることはなかつた、それてありながら草稿といふものは作らずに初から直書き下す、だから氏の原稿と來たら貼紙だらけだ、書いて氣に食はぬと紙を裁つて貼り付ける、それから氏の癖て、貼つた上をコッコッ叩く、その爲め一寸右の中指に隆起が出來て居た。私は別に草稿をつけて淨書する方の流義だから、或る時氏に向つて、其樣にするなら矢張り初に下書をしてそれから淸書をなさる方が宜いでせうといつたら、氏は頭を左右に掉つて、私にはそれが出來ぬ、下書だと思へば下書の氣になつて筆を疎かになる、初から眞劍勝負、筆を執つて紙に臨んだら最う戰場の覺悟で前後左右を顧る暇はない、全力を集注して一心不亂に書く、此呼吸ばかりて文章が出來るのだから、草稿流では迚も書けぬといはれた。「筆を執つて紙に臨んだら最う戰場の覺悟」とは成る程好い議論であると私に感服した。それから其の百千練磨主義に對して恁う云ふ御話も一つある、僕の一友人に一氣呵成主義の人があつた、私は文章が下手

だから自分は一氣呵成流は遣らぬが、若し夫れ腕の出來上つた人に於ては此の主義も可いと思つてゐるから、或る時——たしか巖谷君の洋行を送つた席かと覺えてゐる——私がその友人の説を許らず紹介すると、紅葉君直に躍起となつて論鋒を向ける、理趣を究めずんば止まぬといふ意氣込なので私は大に困らされた事がありました。此樣に氏は何でも物事を中途にして置くことを嫌つたのだ。然し自分自身の作物に對しては世間て如何樣な批評を向け樣とも、それには一切構はなかつた。之は氏の平生と矛盾の樣にも見ゝ樣が、氏が何時も言つて居ることには、他の問題から口を付けるが自分の作物に對してだけは何ゝ言はぬ積だ、詰り瑕疵を付した酷評は生中の贊辭よりも多大の利益を自分の身に與へてくれるから、とのことてしたが、此邊は特に氏の性格に於て感すべき點だと思つて居る。

　氏一代の作て傑作といつたら多情多恨を推す、私は一冊秘藏して居るが、折々繰返しゝゝゝ讀む、表紙の除れたのを自身修繕つてまて讀んて居る。然し讀んて面白い作といつたら隣の女、對話の巧みな作といつたら冷熱などてあらうが、冷熱は惜いことには完結して居らぬ。全然結構その他の點から見て、首尾貫徹した完璧の作といつたら私は如何しても多情多恨を推す。實を言へば他のものはズット段が違つて居る。此事は紅葉氏自身に向つても直接話した事てす。彼の葉山誠也と鷲見柳之助とが或る待合て藝妓や下婢を相手にして遊ぶ所は、詼諧百出、眞に文字の奇を窮めてはゐるが、併し彼處だけなら私にも如何にかしたら書け相にも思ふが、彼の柳之助に長時日間、同じ愚痴を繰り返し捲き返し續けさせる、それて層一層より深く讀者の同情を惹くといふに至つては如何して書けたか、彼れだけは所詮眞似事もならぬといつたら、氏は、誠によく見て呉れた、實はそれが私の最も精力を籠めたところて、今迄書いた筆致を追へば、最う此れ以上のものは書けぬといはれた。ても之は私が言つた語を受けての挨拶か、其處は分らぬが、兎に角此の多情多恨が氏の作物に置ける一轉捩をなして居た樣て、此次に出た

金色夜叉に至つては言ふ迄もなく少し風變りの文字となつた。勿論金色夜叉も結構てす。結構てすが前の多情多恨ほどには私は感服せぬ。それは「歌がるた」から「熱海の別れ」又た宮が一月十一日の雪の威」、節々を取れば露の滴るやうな名文句も多いが、一段の錦繍としてどちらを愛翫すると云へば、私はやはり多情多恨を取る。殊に間貫一が滿枝といふ美人にあれ迄慕はれながら、色好い返辭どころか、何時も睨み附けて追歸すといふのは何ぼ夜叉の夜叉たる本領、其處にありとしても餘り苛ど過る、と私は言たら、氏は、然う言はれては困ると笑はれた。其れに地の文にも何處やら斧鑿の痕も見えるやうで、何時もの椋磨きとは行かない。それから節々の好い點から云ふと二人女房なども其れてある。が惜いことには雜誌に切れ〳〵に出されたので、初めには元祿振、中頃に、雅俗折衷體、果ては言文一致調といふ樣に、全體としての調和が缺けて居る善くは出來て居るが唯それが瑾だ。それから猶ほ氏の作に敬服するのは對話の妙と警句て、如何なものでも仇矢がない。私は曾て或る作を讀んで眼目の對話の所まで來ると、故と次を讀まずに隱して仕舞う、そして作者に代つて自分て句案をして、此の間に氏は何う答へさせるかと試み〳〵して見ましたが、臨みて見ると、矢張り原作が一番宜い、場所に嵌まつてチンとして動かぬ、此てその及ぶべからざるを悟つた。又た氏は色男を書くと如何したものか半道の滑稽じみた者を多く出す、冷熱の勝見琢次、隣の女の粕壁孃の如きはそれだ、氏に聞いて見たこともあつたが、笑つて居て能くは答へて吳れられなかつた。昔しの芝居には色男は半道の心掛てするといふ自然の掟があつたさうだが、其樣な事でも考へられたのか其處は知らぬ。自然を寫すことは氏の長技てない、烟霞療養なども氏の筆としては慊らぬ節が多くある。



日露協約と世界

『東京毎日新聞』

日露協約發表後、吾人が受取りたる諸電報を併觀すれば、歐米の兩方面の輿論共に今度の日露兩國政府の決定を喜び、彼協約を以て世界平和の一兆と爲すものゝ如し。かかる觀察を此まで廣く博したるは、日露兩國政府の一成功といふ可し、而して兩國共に其成功の報酬を受くることともなる可きなり。といふは他にあらず。三年前の大戰爭後、平和は如何にも回復せられしに相違なけれども、ポオッマス條約に對しては日本側に不足の感あり、露國の側に於ても亦勿論不滿ならざること能はず、而して彼條約を以て一時の休戰條約と見做し、啻に心に思ふのみならず、之を口に發して憚らざりし向もあり。世界各國共に之を知るを以て、今後何時又兩國間に平和の破裂を見るやも知る可からずとて、暗に之を患ふる者も少からず、從つて其想像中の未來の戰爭が引起す可き害毒を避くるため、豫め經濟上の注意を其資本の行先きに加ふる者もありたらん。然るに今度の協約を見れば、露國は復仇戰を斷念したるらしく、又日本の側にてもポオッマス條約の不足の感を忘れたるらしく、此れならば兩國間の平和も安全ならんとて、更に心を緩めて兩國と經濟上の關係を結ぶものを生ず可き一種の道理なきにあらじ。而して兩國は此邊よりして、漠然ながらも、其報酬を受くる事ともなる可き望みなきにもあらず。此望みを生じ得べきもの、兩國中いづれが多きかは、今此場合に細論するの要なければ言はずとして、吾人は只茲に兩國の成功を認め世界の喜びを喜んで共に之を祝せんのみ。豈他あらんや。

そもそも平和は世界經濟上の滋養品といはんか、强壯劑といはんか。平和の固き處經濟上の繁昌は必ず至る。事實の證明する所も亦爭ふ可らざるものあり。就ては日露兩國とも今後に於ては新協約の効果を殘る所なく享受して、以て相互に必要なる經濟上の滋養を攝取し强壯を加ふるの用意なかる可からざるなり。之に關し、吾人の見る所を直言すれば、其要は交通機關を最も經濟的に使用するに在り。今や日露鐵道聯絡に關する協約も亦成り、吾人をして兩國當局者の眷々たる所以を看取せしむるに足るもの在りと雖も、吾人は尙一歩を進めんことを後日に期し、今より之を言ひ置く所なきこと能はず。固より吾人は協約を尊重す、而して協約が尊重する所の『締約國間に謄本を交換せる締約國と淸國との現行諸條約諸協約（但し機會均等主義に反せざるものに限る、）並にポオッ

マス條約以下今度締結せられたる諸特殊條約を一尊重す。故に今日に於て之を紛更せんことを欲する者にあらずと雖も、此條約及び協約に規定する所の交通機關處分中、兩國に取りて共に不經濟の原因たること爭ふ可からざるもの有るに關しては、焉んぞ兩國當局者の後日の考慮を煩はさゞらんと欲するも得んや。彼の長春以北、哈爾賓に至るまで東清鐵道一線は、經濟上に於ては、如何に考へても、露國に取りては一疣贅たるに外なること能はず、而して日本に取りては垂涎の種子たるに外なるを能はず、吾人は此言ふことを憚らざるなり、而して日本よりは此に對して相當の補償を露國に與へ、露國は日本が與ふる所の補償に對して此線路を與へ、以て互ひに其交通機關を經濟的に整理するの必要缺ぐ可からざることを公言するに躊躇せず。戰後に於て、日露兩國の當局者が其權利の何種たるを論ぜず、又後來の經濟上の得失如何を考慮せず、單に取捨の一分一厘を爭ひたりし場合に於ては一寛城子停車場を兩分するが如き騷ぎを演ずるも餘儀なかる可きが、今日に於て尚此を演ずるの要無し。且つ吾人は固より協約以外に勢力範圍の劃定別約ありと稱する世間の流説を信ずるものにあらず、而して外蒙古に關して別約なきのみにあらず、南北滿洲に關しても斷じて之なきことを疑はざるものなり。此に於て兩國が今後に於て最も熱心す可きは、而して世界の稱贊に負かざる所以は、經濟を善くするに在るに顧みつゝ、敢て此言を爲すもの也、敢て他日に期すもの也。

俗識と學識

鎌田榮吉

俗識と學識、俗識と云ふのはチト可笑いやうだが、學問をせずに分つて居ることなので、之には常識といふ語が丁度宜いかも知れぬ。所がコンモンセンスを常識と譯して居る、少し譯が惡いやうだ。併しまあ何んでもそれで通用しさへすれば宜い。常識は已にコンモンセンスに取られてしまつたから、已むを得ず之れを俗識としよう。そこで俗識と學識との關係を述べやうと思ふ、例へば茲に錢を此のコップの水の中に入れると下に沈む、コルクを入れると云ふと浮く、是は誰にも分つて居る俗識だ、錢は沈みコルクは浮くと云ふとてある。是は見た所では反對の作用を爲すか、其の反對の作用を爲さしむる所の原力は一つてある。何てあるかと云ふと重力といふもの、即ち比重の作用である。錢は水より重くして水より下の地位を取り、コルクは水よりも輕いから上の地位を取る、要するに重力の作用であると云ふことを若し知つたならば、是は即ち學識と謂はなければならぬ。又茲に蠟燭に火がついて居る、それを水の中に投げ込むと、是は消えるに極つて居る、誰しも知つた事で、是は俗識である。けれどもポッタシュムを水の中に入れると燃え出すと云ふことは・知らぬ、之を知るは學識に依らざるを得ぬ。

是は誰有形的、理化學上の事でありますが、今一歩進んで此の人間社會の事になると、政治にしろ經濟にしろ、均しく此の俗識と學識との別

がある、まづ之を經濟の方で申すと、ちよつと吾々は斯う考へるでせう、海岸には魚は多いものである、大森に行つて新しい魚を食つたならば、是は大森の海で取れた魚、流石は海岸、魚が新鮮で宜いと云つて喜んで食つて居る、併しながら其の實は日本橋から買つて來た魚である。又向ふの千葉の海岸に行つて魚を食はうと思ふと、どうも良い魚が食へない、殊に大漁の時は尙更食べられない、漁獵の少い日は却て魚があると云ふやうな事がある。

是は何であるかと云ふと、元と此の田舎の地方の爲に魚を捕るのぢやない、之を東京に出す、日本橋に持つて行かうと云ふが目的でありますから、東京に出すに足りないと云ふやうな不漁な時だと、却て其の土地でもつて魚を賣つてしまうと云ふことが起る。デちよつと考たよりも、實際非常な違つた作用を爲して居る場合がある、過般も或る蜜柑好きの人が蜜柑の名所たる紀州に行つて大に失望して歸つて來た。何故なれば上等の品は青い時に取つて都會に出してしまふからである。皆に蜜柑と魚類のみでない、百貨集散の作用は皆此の如きのである。總て物は需用のある處に集まると云ふ經濟上の道理を知つて居れば始めて之を知つて失望する筈もない。歌人は坐らにして名所を知るとは此事である。又政治上でも學識なくして單に俗識丈では妙な事を考へ出して到底理に於て望むべからざる事を望むことがある。近來各地方から續々諸願が出る。どう云ふ請願かと云ふと、政府が數億萬圓の金を出して市町村の基本とし、各村およそ平均一萬圓づゝの金を分配してもらひたい、斯う云ふ事を請願する。是は非常に可笑しな話であつて、全國假りに三萬の町村が一萬圓づゝ金を欲しいと云へば三億圓の金が要る、三億圓の金と云ふものは面々一萬圓づゝ出せば出來る、面々一萬圓づゝ出して、それを一旦國庫に集めて、再び分配するより外に出來やう譯がない。露西亞から三億の罰金を取つて其れを分けるとでも云ふなら分つて居ますが、罰金も取つたことが無いから、村々が一萬圓ほしいなら村々が一萬圓出すより外に資金の出來よう筈が無い。此の如き分りきつた事を兎に角一地方を代表する者などが寄つて、請願すると云ふに至つては、實に驚かざるを得ないのです。只政府は無盡藏であるかの如き迷信から起る、若し一歩を進めてどうして國庫は出來て居るかと云ふことを考へたならば三歳の童子にも直ぐに分る事を三十歳四十歳の大丈夫に分らない、これらも學識と俗識との區別を證明するに好き例であらう。（中略）

此の俗識學識との差異は、一は直覺と經驗とから生じ、一は概括と分析との二作用から起るので、即ち事物をゼネラライズする、又アナライゼスして生ずるのが即ち學識と云ふもの、現に剃刀を研ぐとよく切れると云ふ事は誰も知る所、それから坂道を削りて低く長くするときは登り易くなると云ふ事も人のよく知る所、此の二つは全く違つた互に縁のない事實のやうに思ひませう。土方が此の塾の表坂の土を削りて居る。又坂下の床屋の小僧が剃刀を研て居るのとは丸で縁の無い事の樣に俗識では思つて居るが、學識の方から見ると全く同じ事をして居る、剃刀を研ぐも坂を削ると均しく物理學上楔を鋭くするの道理に基いて居る。即ち

學問の役目は事物を分析して其の組織成分を明かにし其の共通の點を概括總合して其の原則を知る。論理學から云へば歸納法に依て得たる總綱を更に演繹して事物々說明し、以て格物致知の作用をなすといふものである。そこで剃刀と坂とのみならず、其の他千種萬樣の事實にして、此の一律の內に入るものがありませう。所謂天則の下に事物を統一するのが科學の科學たる所以てある。是が又哲學となると一層廣く概括して總て事物は最少抵抗の方に向ふと云ふ上乘の腐理に歸せしむるてあらう、即ち最初の錢は下へ沈んてコルクは上へ浮ぶのも、研ぎ立ての剃刀が切れるのも削つた坂の登り易いのも、魚類蜜柑の都會に集るのも皆最少抵抗の方面に戀ふと云ふ一の總則に歸してしまふのが哲學の本領である。そこて之を纏めると斯う云ふ式になつて來る。俗識が統合されて科學となり、科學が統合されて哲學となる。

デ人間の世に處するのには俗識ばかりではいけぬ、どうしても學識が無ければならんと云ふことは明白てある、けれども此の學識をまる出しにしては俗識と調和の取れぬ場合が起て來る。此の調和を圖るのは何てあるかと云ふとこれは所謂常識の力に依る外はない、古來學者と俗人の間に聯絡が付かず貴重な學問が社會の用を爲すことの意外に少ないのは雙方に常識の缺乏せる爲めてあると云ふ事は度々申す所てあります。先づこんどは俗識學識常識の御話丈にして置きませう。

學校生活と社會生活

安部磯雄

吾が國に於きましては、學校を卒業して社會に出ると云ふと、其生活の上に非常なる變化があるやうに思はれるのです。これ慥かに學生の爲めに不幸なことと思はれる、若し出來るならば、學校生活をもつと社會生活には近づけるがよろしい。一寸例を擧げますれば、衣服にしても、學校にある間は先づ概して粗てなければども、學校を卒業して會社員となり教師となるといふと、一朝にして紳士然たる服を着けて行くこととなる、これは外形上のことてあるから先つよいとして恰度其通りに、思想も非常に違つて來る。會社に出れば、一足飛に何か大人らしくなつた感があるのてあります。外國に於ける學校生活と云ふものは極めて社會生活と似て居て、例へば今お話しました衣服にしても學生の時から餘り教師と違はぬ。服から云へば學生と教師と餘り見分けがつかぬので殊に何か會がある時になれば禮服を着ける、場合によつては矢張燕尾服を着ける、何れが學生か何れが教師か一寸見分が附かぬ有樣である。故に社會に出たからと云つて俄かに服を改めるとはない、これ啻に形體のみにはあらず、思想上にも亦然りて、學校その儘て社會に入ることが出來るのてあります。

それて、この學校生活と社會生活とが懸け離れて居るといふことは隨分色々の點に於て不利益と思ふのてあります。私は最も體育の方に密接な關係を有して居るのてあるが、學校に在る中に、運動の方に熱中して

居る人々は卒業後餘程困難を感ずるのです、尤もこれは日本のことであるのです。今の日本の學校には體育の設備があるが、社會には此の設備はありません、會社に於ても銀行は於ても、執務時間が隨分長いので、歸れば直ぐ日が暮れるから殆んど運動の暇はないのであつて、よし運動場があるところにしても今の場合では時間がない。それで、或る私の知つて居る運動家の如きは、卒業後或る銀行には入つて、朝から働いて、忙しい時には晩の八時迄も働いて日曜も休み無しの有樣である。丁度昨年五二會の博覽會があつた時分、私の知人は集會係の方でありましたが、その時早稻田と慶應とのベースボールの競技があつたけれども、それにすら忙しくて見物に行くとが出來なかつたのです。運動家が社會に出て後運動せぬといふと體が惡くなる、遽かに止めるからである。故に私は、運動家にとつて日本社會では運動が出來ぬので大變不愉快であらうと思ふ、私は、一層のことアメリカに行つたがよかろうと、度々彼等運動家に話して居るのであります。

これ等が明かに學校生活と社會生活とが懸け離れて居て、これより生ずる弊害の一つと見ることが出來る、これ色々の方面に弊が及ぶことは、先づ學問の上から言ひますれば學校は勉强する所と考へる結果、卒業の後に今迄のやうに勉强を續けるといふ考がないといふことで、日本では學校に於ては極端に勉强し、其の反動として卒業後は亦極端に勉强せぬ。けれども、アメリカや英國にはこう云ふのは少ない英國でもアメリカでも學校そんなに勉强せぬ、先づ時では午前中勉强し午後は運動し夜は社交的に費すといふ風で、私がアメリカに居た時なども、私の學校生活中夜勉强するものは無くて、マア私獨り夜勉强したといふ有樣です。故に英國やアメリカの學校は、一日を三分して、三分の一は勉强、三分一は運動、三分の一は社交的にと斯いふ風であつてひどく極端にしないで、苦んで勉强することがないから、卒業後も勉强を嗜んでやることが出來るのです。學問の上から云つて非常に長いことであつて、到底學校生活の八年位では學問は出來ぬ、徐々としてすれば勉强の爲めから云つて悠々長くやる方針を採らればならぬ。

それから道德の方面から云ひますれば、日本の學生が學校に在る中の生活と社會に出て後の生活とが、道德の上に大變化を及ぼす樣に考へる、學校は學問する處と思ふから學生は社交の觀念がありませもん、衣服も食物も皆、粗衣粗食といふ風で、或者は禁酒禁煙を守る位であるのです。處が卒業して社會に出れば紳士の考で居て、品行が紊れて來る、酒を飲む煙草を喫する、寄宿舍の嚴重な規則の下の生活と反對なだらしない生活をする、餘り社交せぬ者が不意に多くの人と交り、殊に婦人と接する樣になつて、遽かに社交が面白くなり自然に不品行に陷るといふことになる、之等も僅かに兩方の生活の間に餘りの懸隔ある爲めに此の如き弊があると思ふのです。

だから、今後にに於ては、教育の方針も、も少し二者を近ずくるやうにすれば、幾らか今日の學生の社會に出た後の弊を防ぎ得ることであらうと思ふのです



死人

佐藤紅緑

七月五日、東京なるG君へ。

大阪よりK生

大阪へは屢々來た事がある、けれども道頓堀を見るのは今度初めてゞある、宗右衞門町は浪花第一の狹斜の地、其處に僕が宿泊する事となつたので。

宗右衞門町は東から西へ一筋長く軒並の行燈昔床しく、今も黄金の木葉が雨の如く降る處ださうだ、此町と川を隔てゝ相對するのは道頓堀で、西の端れは惠比須橋、東の端れは日本橋、其間の二つの橋、此等を引括めて道頓堀川を中心とした一廓は凡そ東京にも見る事の出來ない繁華な地としてある。

僕の宿は少許の明地を向側に控えて川を見渡し得る處なので。丁度日本橋から數へて次の橋相合橋の畔になつて居る。二階から見ると道頓堀五座の櫓が見える、此の櫓から向ふ側の洋食屋、寫眞屋、繪葉書屋抔の家根に引き渡す萬國の小旗は路の上を穹門の如く塞いで其間に役者の名前の幟、表看板などが隱見する。橋を渡るもの日に幾萬人、芝居、見世物、義太夫、劍舞、往く人歸る人此等の凡ての聲、凡ての音が、一塊になつて只たわあつといふ埃り臭い濁つた色の響となつて聞ゆる。

概して此の道頓堀の通は老舗らしいもの一つあるでなし、どれを見ても、柱が新らしく店が明るく奥行が淺く、恐ろしい大きな看板に興奮色の力めて人目を惹くやうにと強い色を塗つたもので、恰らに菓子で作つた五色の町のやうなものだ、人間に落着のないといふ事を言ひ得べくば此町には確かに落着いた處がない、只た華美に、只た賑やかに、只た騷々しく、只た陽氣てある。

僕の二階から一番能く見えるのは此の町並の家の裏面で、其れは道頓堀川に向いて居るからてあるに出雲屋まむし、東京庵、疝氣の藥、うどん井筒なんといふ蕪汚ない廣告が處ろ〳〵に斑剝けのやうに見えて、其の下は半分程は泥に漬かつた石垣、其上に檻獄の格子戸ともいふべき太い格子や、雨曝らしの丸太などが竪に横に斜めに上の家屋を支へて居る、此の汚ならしい家屋が、くるりと廻つて表通から見ると例の美くしい五色の菓子製となる。

此川は汐の引く時分になると眞中丈けに水を殘して兩岸は泥ばかり、其れが赫々と照る日に射られて蒸し騰すやうな陽炎を造つて、皿の缺、片器の毀れ、古下駄、破れ俵などが臆面もなく骸を曝らす、すると此處を五分間隔位に往來する小蒸汽が客を乘せたまゝ底に吸い付けられて寸も尺も動かなくなる、機關手が頻りに火力を熾にして船の喉首から苦しい息を吐かせる、同時にかたびし〳〵慌た〻しく歯車の音がする、併し船は依然として動かぬ、乘客は物珍らしさうに自分の船の動かぬを見廻して照り付くる日に顏を眩しさうに反けて居る、船は盛に藻掻いて悲鳴を上げる、汐は次第に減る許り、僕は此の船の汽笛と歯車の音を聞くと何だか恁う暑苦しさが腦の底から湧て來る、其處らに齷齪働いて居る石荷いの土方共、彼等は一生泥に坐つた船のやうなものてはあるまいか。

此船が去て午後の二時頃、丁度潮の出盛りてあつた、只ならぬ人の叫聲が聞えた、窓に出て見ると往

來の人が悉く足を止めて河の方を見て居る。

「土左衞門や〳〵」と叫びながらバリカンを持つた床屋らしいものが走せて行く、僕は何といふ事なしに宿を出て前の明地の河岸に立つた、

と見ると相合橋の上は早や充滿の群集、欄干に犇々と詰まつた、人の顔は五百羅漢のやうに重なり合ひ、犇めき合ひ、全て顔ばかりの掛圖の樣に人襖を作つて居る、中には自分の指してる日傘を高く〳〵他人の頭の上に建て掛けて口を開いたまゝ水面を見詰めてるものもある、左日本橋はと見れば是れも隙なき人間で、欄干から食み出しさう向の道頓堀側の出雲屋まむし、東京庵、鮓や、牛肉店、小料理屋、家といふ家は仍且悉く人の顔、此方の宗右衞門町河岸、美くしく並び立てる二階はこれ亦悉く靑簾を捲き上げて、大妓小妓、丁髮、梳櫛、髮の光り顔の白さ、美くしく又涼しさうに廊下側に出て居る。

凡そ、線を引いたら川を圍繞く長方形の圈内にありとあらゆる家は凡て人の顔で埋まつた、顔は一樣に水面を向いて居る、

其中には一刻輜珠を爭ふ商人もあらう、急病に赴く醫師もあらう、御座敷に行く藝妓も、掛金に行く小僧も、士も農も商も工も悉く足を止めたであらう、向側の飲食店ではまむしを食つてるもの、鮓を食てるもの、どぶろくを飲てるもの、悉く箸を投して欄に立つたであらう。御茶屋の二階で低酌をしてる客、御稽古をしてる雛妓、晝寝をして居る女將亦悉く盃を捨て撥を捨て枕を捨てゝ起ち上つたであらう、

其れは只た、

「土左衞門や」といふ一つの聲の爲めである。

僕は此時不圖恁う思つた、一の死骸は萬人の足を止める、死といふものゝ力は實に大なるものである。

と次て亦愁う思ふた、是等の人々が同瞬間に一様の動作を取るといふ事は畢竟好奇心の致す處だ。

人の死人を見たがるのは好奇心が其の眼を促がすのである、死其ものは奇てあるまいか。開いてる眼が塞がる、動いてるものが休む、其れまでの事であるが、其れまでの事が既に奇てあるまいか。さればこそ、殆んと一萬にも近い此の人の群が一つの死骸を見戍る。

人は一生に一度必らず遭遇すべき運命を有て居る、其れは死である、吾等の背後に死といふ秘密の影法師が妖怪の眼の如く付き絡つて居る、けれども吾等は何故か其れを深く考へる事を好まぬ、實際其那事を考へるのは病人か老人か何れ實世界に用のない人のする事だ、背後の影法師を前の方に見て居る人のする事だ、吾等は眼前に衣食住といふ敵を控えて戰ひつゝあるのだ、生活の苦鬪を續けて居る間にどうして背後の影法師を振向く餘裕があらう、であるから吾等は死といふ問題をば恰當急がんでもいゝ月賦の借錢位に思ふて居るのだ、深く考へると將來は必らず死ぬ、其れは分明つて居るが目先に飛んで來る蜂を拂ふに忙しいぢやないか、蜂に螫されぬ中に早くも膏藥の事を考へてる馬鹿があらうか。此の馬鹿を稱して宗教家といふのだ。

けれども、けれどもだ、僕をして、もう少し言はして呉れ給へ。

日が暮れると影法師が無くなる、影法師の無くなる時は死である、死といふものを見たい、どんなものかを知りたい、死後の事は猶ほ知りたい、けれども之を知るの時は即ち死の時である、そこて人間は死は知るべからざるもの、顧るべからざるものとして諦めて居るのだ、諦めて居るものゝ仍旦心の底には知りたい見たいが籠つて居る、他人の死骸は見る事が出來ても自分て自分の死骸を見る事が出來ぬ、これが世の初めより世の終りまで釋くべからさる鐵の錠に

封じられた天地の大秘密である。

秘密といふものは氣に懸るものだ、往來で死人に出會す時、吾等は此の影法師に觸れ秘密に觸れたやうな心持で無意識に死骸に對して注意を拂ふ、自分も遠からず死ぬから見て置かうとの爲めでは無い心の中は何といふ事もないが只た其方に惹付けられるので。此の惹付ける力を君は何と言ふか、其れも仍且好奇心であるまいか、此場合の好奇心は樂隊に對するのとは違ふ、見世物に對するのとは違ふ、花火に對するのとは違ふ、凡てのものに對するのとは全く違ふ。

午後の二時半、炎天の日盛である、强い／＼日光は薄濁つた川から反射して、まむしやの二階から靑簾の御茶屋から、橋の欄干から照り返しては照り輝く、彼方道頓堀の笛太鼓、三味線の音、車の響、賑やかさは猶ほ暑さを募らす。

きら／＼と燦めく河の水に、死骸らしいものは一つも見當らぬ、水上警察の端艇は彼方此方と漕ぎ廻る。

「何だんね／＼」と背後から又背後から見物が次第に殖えまさる。

「土左衞門や／＼」と同じ事を繰返す。

「男だつか、女子だつか」

「女子だす」と一人は言ふ、其癖未だ見もしないのだ。

「え、女子？えらいこつちやなあ」と身體を搖り上げて首を延ばす。

「女子、女子／＼、女子／＼」といふ小聲が波のやうに彼方此方から傳ひ傳はると、見物の顏はざわ／＼と色めき渡る。

其拍子に只だでさへ遮られて確かに見えない。「若い女子だつせ」

「十七八だつせ」

此時警察の舟は、何やらを水の中から引揚げた、家根の天幕に遮られて確かに見えない。

「女子だつす、女子」と向側の見える方の人が自慢らしく叫ぶ、此方の見物は一同に延び上る、其拍子に只だでさへといふ響を作る。

警察の舟は莚などで死骸を蔽ふた、

「何て死んだのだつしやらうな」

「こりや堺筋の子守だつす、」

「情夫の爲めに死んだのだつしやらう」

「御腹が大けのんだつす」

「さうや、さうや、」何が何やら聞取れぬまで、種々の取沙汰果してがない。

G君よ、死骸といへば直ちに女を聯想し、女といへば十七八を聯想し、十七八といへば情夫、懐姙を聯想す、君は之れを何とか思ふ。

死骸を載せた舟は宗右衛門町河岸の御茶屋と御茶屋との間の細い小路の下り口に着けた。

二人の巡査は足と頸とを抱えて舟から陸に移さうとする、舟の傾きに身體が搖れて巡査が足を滑らす拍子に死骸の莚ははらりと水に落ちて荒縞の單衣にメリンスらしい赤い帶を締めた死骸は無造作に突放すやうに泥の上に置かれた、扨こそ十七八であつた、巡査は柄杓に川の水を汲んでは、ざぶり〳〵と死骸の泥だらけな顔を洗ふ、川の水は既に泥七分である、泥を以て泥を洗ふのだ、洗ふ度毎に死骸は其泥

水を呑み込むかの如く、眞赤な鹿の子が束ね銀杏と共に哀れにがくり〳〵と動く。

見物は一同に眉を顰めた、萬人片唾を呑で息がない、此の事件の爲めに進行を中止して居た小蒸汽から見て居た無數の客の顔は物に魘はれたやうに瞬もせず靜まり返つて居る。

死の色といふものを君は見た事があるか、死人の顔色でない死其ものゝ色である、其れは水の色よりも暗くして地の色よりも明るく空の色よりも白い。

顔を洗ひ終つた巡査は杓を水に投げ捨て、默つて死骸を見詰めた、今一人の巡査は、劍の柄を犇と握つて短端に腰を下し之も死骸を見詰めて居る、實に靜かな光景である、向裏の芝居の幟がはた〳〵と風に音するのさへ手に取る如く聞ゆる。

道頓堀の萬戸から赫と吐き出したやうな雲の峯が恐ろしくのさばり出て見る目眩ゆく丁度此處に集まる千萬人の人を呑み込みさうに思はれる。

「ほゝゝゝ」といふ笑ひ聲が僕の頭の上で聞ゆる、と見ると二階の欄干、並んだりな大嬌小嬌、凡そ二三十人、其中に絽縮緬の破格子、白絽に黑繪の帶をしどけなく垂れた年齡正に二十三四、下膨れの色白で、潰し磨きの稍々斜なるが、ぷうと酸漿を鳴らして次なる老妓に囁いて居る、老妓は堅横の明石に絽繻珍の帶、型の如くにきちんと肩の邊り大分肉衰へて、全盛の名殘は其の眼の涼しさに留めて居る、

「まあ子守だんがな、汚ならしや」と破格子は態と眉を寄せる、

「可愛さうにおまんがな、旦那別嬪だつせ、見て見なはれ」と老妓は振返る。と、年齡四十前後、大兵肥滿の惠比須顔、御勤先では何かの廣告と綽名を取て居さうな重役らしいのが、のそり、浴衣の下から象の脚氣を端短かに露はして、

「どれ〳〵、あゝ足が見えてる」
「いかにも、死骸の膝から下鈍く白い其の肉色が露れて居る、俯伏になつてゐるので足の裏が特に眞白だ。
「あんなもの見たら胸が惡うなつて來た、見んと置きなはれ、いやらしうおまんが」と破格子は旦那の胸元に一寸手を懸ける、
「どないに心配しましたろやな、ほんまに」と老妓は猶ほ一心に見惚れて居る、此時見物は何といふ事なく、只だわあいと鬨の聲を揚げた、同時に
「檢査の御醫者はんだつす」
「どないにしまんねやらうな」と口々に言ひ罵る、警察醫か來たのらしい、再び喝采の聲が起つた。
「ねいちやん、見て見なはれ」と慌たゞしく呼んで欄干に兩袖をはらりと掛けて下を覗き込む、形は舞にある宙を飛ぶ鳥の見え、友禪絽縮緬に藥玉模樣の帶を蜻蛉結び、桃われに紫陽花の如く挿した簪はむら〳〵と下を向いて、眉の太いはつきりとした細面の肥り肉、十四歳は覺束ない。
「いやだんが」と破格子、旦那の胸を又た一突き、旦那はと蹌踉簀障子の中と入りかける、と
「ねいちやん、早う裸にしてまつせ、裸に」
見物の方は三度鬨の聲、
「何、裸に？ 其奴あー」と旦那は足踏みしめて乘り出すを やらじと破格子は止めて
「いやらしい人やな、置きなはれといふてるのに、嫌いや」
と無理に伴ひ一間へこそは入りにける、
「裸だ〳〵」と見物は犇めき合ふ、僕の方からは只だ二本の足の動くのが見える許りだが、向ふの形勝

の地位を占めた見物人は何とはなしにどよみを作つて一生懸命に見惚れて居る。

老妓はきちんと唇を結んで、

「ほんまにいやだんな」と傍らの二十二三、丸髷の水々とした女將らしいのに言ひかけて染々とした樣に瘠せた肩を窄める、女將は笑つて

「もう男を知つてまつしやらうか、」

「其りや、あの工合では、如何だか知れまへんな」と仲居らしいのが言ふ。

「惜しい事をしましたな」と女將は下を覗き込むで仍且笑つて居る。

「死骸が流れて來たよつて緣喜がよろしう御まんな」と仲居が言ふ。

「死んだ當人の身になつて見なはれ」と老妓は猶ほ欝いて居る。

「姐はん、此方へ御いなはれ、何していなはるのやな」破格子の聲てある。

「南無阿彌陀佛〳〵」と旦那の聲。

「チヤン、西に向いて合はす手もツン〳〵ツンツレン」と破格子の合の手交り。

「ねいちやん、恐い、どないにしませう」と蜻蛉結びは兩袖を欄干から返して兩手は端長く、頰をかくしながら袖の間から仍且下を覗いて見る。

「そないに恐けりや此方へ御いなはれ」と破格子。

「見たう御まんが姐ちやん」

「やあ見えましたぜ〳〵」と見物は四度喝采した。

盃洗に洋盃の觸れる音がちりんと聞えた。

G君よ、昨夜此處まで書いて置たが、今朝の新聞を見ると、六號活字で溺死一束といふ處に二行記載してある、身投の理由は使が遲いので父に叱られた爲めであつたさうだ。

* * * * * * * * *

豫告

本誌はいよ〳〵來月一日を以て「秋期大附錄號」を發行せんとす。其詳細は載せて本誌卷頭の廣告にあり。而して來る來る十一月の誌上には小說

男五人　眞山青果

外一二篇の佳作を掲ぐべし。「男五人」は青果氏の全力を注いて書き上げたる傑作にして本誌の三十七八頁の長さあり。本篇一度び出でゝ青果氏の聲望いよ〳〵高かるべく、本誌の詞藻欄亦ます〳〵好評を博すべし

金魚

「並木」の副主人公　原　某

日比谷公園て相川に分れた原は、そのまゝ自宅へ歸るのも曲がない、舊友を尋ねるか本郷邊の先輩を訪問して米櫃に有りつく道を求めやうと考へて、すぐに「本郷本所行」の電車に飛び乘つた。電車といふものは中々面白いものである、面相を異にした各種の人間が究屈さうに押しつめられて居る。風體、擧動、階級、年齡と、何から何まて異にして居る多人數が、一處に搖られながら急速力て運び去られる急速力て運び去られるのは、器械的てあるが、そのなかに世相の百態が收められて居るから面白い。原は電車に乘つてこんな事を考へながら、なほ車の內をキロ〳〵と見まはすと、「ふとも〳〵」を出す事は、掲示のうちに「おことはり」と立派に出て居る。而もその筋の御注意に依りとあるが、色の黑い肥滿した服裝も賤しからぬ男が、大面をして二人分の席を占領しながら、毛むくじやらな「ふとも〳〵を」を麗々と出した計りか、奧の方にまだ白いものを見せつけて居る。それが鼠色てなく原色の白てあつたのはまだしも幸てある。併し車掌はそれを咎めも仕なかつた。咎めたら面倒が起るからてあらう。神田橋の停留場から風呂敷包みを持つた婆さんと年增とが乘り込んだ。坐る席は最うない。如何するかと原は見て居ると、風呂敷包の婆さんは、インバネスの紳士と麥藁帽の書生との間に用捨もなく割り込んだ。定めし汗と白髮頭の油の香とて、二人は臭い事てあらうと想像される。年增の方は暫時下げ皮につかまつて立つて居ると、片方に居た此れは衣肝に至る書生さんが、サアおかけなさいと立つてやつた。年增はま

ことに如何もと酷く丁寧に頭を下げて其席を貰つた。原はつく〴〵感心した。此の電車のなかには、紳士も居れば淑女も居る。官吏も居れば職人も居る。學校の先生らしいのも居れば――現に原はその古手であるが――宗教家らしいのも居る。併しながら此の年增のために席を讓つたのは衣肝の書生さんである、然るに此の書生さんを教育して居る先生達、教育家と銘打つた先輩達は、今の青年は腐敗して居ると云つて居る。墮落して居ると云つて居る。なるほど墮落するであらう、腐敗するであらう。こんな心懸けで居ては失敗るに極つて居る。女などは獸類と同じに考へて居ない以上、墮落するのは尤もである。併しさういふ古い考を破らうとして居るのが今日の教育でありながら、教育の當局者は其處に氣がつかず、只男女の學生が腐敗した〳〵と言つて居るのは馬鹿〳〵しい。そんな墮落なら、墮落した方が良いのかも知れない。妙な世のなかになつて來たものだと、原は切りに考へて居る內に電車は小川町まで來て仕まつた。大勢ドカ〳〵と降りる。お乘りのお方は少々お待ちを願ひますと車掌がいふ。それについてそのお乘りの御方がドカ〳〵と入つて來て思ひ〳〵の席に就く。勿論席は不足なので、下け皮にぶら下つて居るのが澤山ある。エ、切符の切らないお方はありませんかと、乘り換のお方は切符を拜見しますと車掌が怒鳴る。六づかしい言葉があつたものだ、切符の切らないお方とは文法上一寸解釋が仕惡い。併し意味は分つて居る。全體文法などゝいふものは餘計な手數をかけるものであるが、切符の切らないに至つては非文法も甚しい。併しそれかと言つてその意味を正しく言ふとしたならば何と言つて良いか、これにも少し困る。東京の言語も亂れたナ、併し亂れざるを得ぬのだ、仕方がない、時勢といふものは恐ろしいものだと、東京ものであつて永年先生をして居た原は再びこんな下らぬ理屈つぽい事を考へて居ると、電車はすでに須田町まで來て居た。

電車の窓から見ると待ち合はせて居る客が幾十人ヅヽか一團になつて處々に立つて居る。それが電車の來る度にゾロ〳〵その後について走つて行く。行く手の方には黒い服をきた旗振りが三四人も居て、赤の旗を勿體らしく肩と平均の高さに、手と一直線に差し出して居るのもある。綠の旗を得意氣に二三度バタリバタリと振つて居るものもある。原の乘つて居る「本郷本所行」が此の停留場に來ると、左側に待ち合はせて居た客の一半は、恰も此の電車に引きづられたやうにゾロ〳〵と一處について來る。なるべく早く乘らうと云ふのである。なるべく早く乘るのは、他人の占領して仕まはない內に、席に坐らうといふ了見であらう。此の了見が無意識に顯はれて、此のゾロ〳〵と葬式の後を追ふ乞食のやうな體裁になるのであらう。淺間しいものである。向ふ側を見ると、其處にも同樣な光景が顯れて居る。「三田行」といふのが來ると、矢張ゾロ〳〵と乞食のやうにお客が車の側にたかる。

原がこんな光景に見取れて居る內に、色白の氣高い紳士が後ればせに乘り込んで來て、丁度原の前の下げ皮にぶら下つた。紳士がぶら下るはやゝ可笑しいが、電車は四錢均一であつて、此の車のなかに入るものは、紳士でも淑女でも悉く平均されるのであるから、紳士もぶら下らざるを得ぬのである。新來の客が前にぶら下つて、向ふ側が見えなくなつたので、原は此の紳士を見上げると、豈に計らんや、それは舊友の西川であつた。西川は近眼であるから原には氣が附かないらしい。その上多人數居る中へ突然入ると、誰れが居るか一寸見分が附かないものである。

原は立つて「西川君ではないか」と聲をかけた。

西川はまぶしさうな眼をして一寸見て「イヤこれは」といふ。

「久しぶりでしたネ」と原がいふ。

「イヤ如何も御無沙汰をして居ます、シテ何日御上京で？」と西川がいふ。
「四五日前に」と
原が答へてから、極つた二三の挨拶がすんだ後、西川は今何處へ行くのかと原に問ふ。原は何處といふ宛もなく、只本郷邊の先輩の家でも尋ねて職業の周旋でも賴む考で居ると返事をする。職業の周旋にでもは甚だ冷淡に聞えるが、原は實際職業に付てそれ位の考外持つて居なかつたのである。西川は自分の宅へ來ぬかとすゝめる。殆んど行き當りばつたりの原は無論直ちに同意した。實は內々西川の家も尋ねやうかと思つて居つた處なのである。親しい間柄の舊友同志は電車のなかゝらすでに話がはづみ始めた。
「如何です。東京も變つたネ」
「實際變つたヨ、お互は東京ものだが、一體東京は如何なるのかネ」
原の此の話に西川は笑つて「そんな事は餘計な心配だ、それより電車を乘り違へない樣に用心するサ」
「誰れがそんなどぢをやるものか、今日も君、日比谷公園で仲猿樂町へ行くには如何乘つたら良からうと聞く男があるから、精しく乘り方を敎へてやつた位サ。イヤ東京には隨分ぼんやりも居るよ、四五日前に田舍から出た計りの者にそんな事を聞く奴があるのだからネ」
西川は只笑つたのみで、そんな事は如何でも良いといふやうな樣子で居る。原は眞面目でこんな事を言つて居るのであるが、西川の心には、東京の變化などより一層大きな考が收められて居るのである。世界を周遊した此の男にはこんな掃溜のやうな東京は、實は眼中にないのである。それ故原の此の話も馬耳東風とき、流して居る。原はそれと見て話を轉じた。
「今僕は相川に遇つて來た處です、實は日比谷公園で分れて來た計りなのだが、相川は不相變大した氣

焰だネ」
「イヤ相川の氣焰には驚くョ」
「そして何時も若いネ」
「君だつて若いじやないか」
「僕が何若いものか、此の髯を見たまへ」と原は口髯の白髮を見せる。原の隣の乘客は忍び笑をする。二人は親しい同士で、電車のなかであるに拘はらず、また相應な紳士であるに拘らず、こんな小供らしい書生らしい事を言つて興じて居るのである。

對話の内に電車は本郷四丁目まで來て仕まつた。西川の家は團子坂にあるので二人は此處で下車した。交番は不相變角にある、巡査も不相變の白服である、「かねやす」の店も不相變繁昌して居る。併し道幅は廣くなつた。道幅は廣くなつたが、往來は昔に增して頻繁なので廣くなつたとは思へぬ位である。二人は汗をふき／＼大學の方に步て行く。此の炎天に紳士たるものが車にも乘らずに步いて行くのは少しく體面に關はるといふ人があるかも知れぬが、二人は久しぶりの會合て、一刻も長く話を仕たかつたからである。併し每時無遠慮に口を切るのは原である。
「君、アノ女の着物はあれは一體なんだい。アノ大きな形の更紗の模樣は？　、まるて風呂敷を着て步いて居るやうじやないか」

女學生であるか、看護婦であるか、何れにしても海老茶の種族の一人が大形の更紗の浴衣で前に行くのを見て原はかく言つたのである。
「若い人の好みが變つて來たのサ」と西川は冷然て居る。

「變つたのは結構だが風呂敷の着物は恐れるネ」

「併し華族女學校の生徒の風を見たまへ、變つた處も中々良いヨ」

「華族女學校は知らんが、アレアノ車の上の男の唐茄子頭も厭やだゼ」

「何んだい唐茄子頭とは?、」西川は訝つて尋ねた。

「イヤ、アノ、ハイカラ刈リサ、頭の恰好がまるで唐茄子じやないか」

「君の氣焔も中々相川に負けないネ、四五日前に出た許りてそれでは、此の先きが思ひやられますナ」

「愚弄つては困るヨ」

話しながら二人は遂う／＼團子坂の家に達した。西川は手早く洋服を白ちゞみの浴衣に着かへる。その間に原は女中が汲んで進めた水に顔と手の汗を落して居る。

やがて二人は坐に即いた。坐にはすてに氷と葡萄酒とが置かれてある。

「ほんとに久しぶりてしたナ。何れ面白いお話も澤山ありませう。承はり度いものですナ」と西川がいふを原は打ちけした。

「イヤお話するやうな事は何もないのです。實に碌々たる半生て……」

二人は兄弟よりも親しい間柄てあつたのに、此の三年間ほどは膝を交へて語る事が出來なかつたので、互言葉も極めて無遠慮に出るかと思ふと、時々又妙にあらたまるのてあつた。

原はさらにつゞけて「君にこそ定めし面白いお話があるてせう。無ければならない筈だ。承はり度いものて」と鸚鵡がへしにやる。

「僕は君、新聞や雑誌に何もかも書いて居る通りて、一向つまらぬ事ばかりサ」

「それは表向きの事サ、新聞や雜誌には書けない裏の筋かあるだらうじやないか」
「イヤそんな事は一切なしだネ」
「嘘言を言ひたまへ。如何です、巴里のグリセットは?」
二人は相應の紳士たるべき資格を持つて居る人達である。然るにその話はまるで舊の書生時代のと同じである。書生時代からの親しき友達であるからでもあるが、これも時勢の然らしむる處であらう。原は今まで東京の變化風俗の變遷氣風の推移を氣にして居たが、自分等も亦時勢に伴つて歩いて居る事には思ひ至らぬと見える。相川に紹介されて日比谷で青木に遇つた時に、今の青年の心は自分達の青年であつた時の心とは非常に違つて居ると感じたのであるが、今壯年である自分等の心は同じく今老年に近づいて居る人々の自分等の年輩であつた時の心と、全然違ふ事とは心附いて居ないと見える。それ等の人達の當年に對して、自分達は遙かに進歩して居る、少くとも異つて居る事を自覺しないと見える。青年に對して時後れて居るかも知れぬが、先輩に對しては進歩して居る、少くとも元氣はある。自分達よりは青年の方が元氣があると同じやうに、先輩に對して見れば、自分達の方が元氣に滿ちて居るのである。
併しこんな事を自覺して居るか否か解らぬが、原は又次のやうな事を言ひ出した。
「君、僕は東京市なるものが氣になつてならん。こんな亂雜な帝都は世界に無からうと思ふが、君、倫敦や巴里は如何かネ」
西川は又たかと言つたやうな顔をして、
「君は不相變やかましい議論でなければ承知が出來ないと見えるネ」
と言つて、「僕はそんな事は知らんといつたやうに話頭を轉じ

「議論と言へば君、近頃何か面白い論文でも出來ましたか」と尋ねる。
「論文も出來ません、併しそれより實は君の文學談を疾うから覗ひ度と思つて居るのだがネ」
「僕の文學談を？」
「所謂趣味の變化といふものだらうか、君、僕の持つて居るやうな趣味は今日には通用しないのだからネ」
「通用しない趣味とは妙だが、君の趣味とは全體如何な趣味だネ」
「さう聞かれると少し困るがネ、兎に角英吉利流の文學は流行らないヨ。今も相川に僕はチョン髷だと言つて來たのす」
「ウム、チョン髷は贊成、僕も大にチョン髷だ」
「チョン髷會といふのを組織するかネ」
と言つて原は書棚の方を向いて
「併し君のチョン髷は舶來のチョン髷だが、僕のは和製だ、一つ舶來の本を見せたまへ」
とつゞけざまに饒舌つて、小豆色の表紙で一寸ばかりの厚さの洋書を取つて見る。
「オヽ、ハリソンのメモリースだネ、出版になつたとは聞て居たが、未だ見なかつた。ウム題目が面白いネ、『理想の倫敎』『歷史的の巴里』か。併しハリソンの評判は彼方では如何ですネ」
「大家だネ、先づ第一流だらうヨ」
「左樣だらうネ、僕もハリソンのものは少しは讀んだが、文章も明快で、それで中々味があるネ」
「君、此れが一寸面白いものだヨ、倫敎の郊外を書いたものでネ、中々讀めるヨ」と西川はジエフエリ

ーを取つて見せる。

「これから拜借して讀みませう。君もチョン髷黨で大に難有い。併し相川なんぞは全然露西黨だからネ尤も相川の露西亞は眞物て、中々造詣も深いが、今日ては讀んて居ても讀まないても、大陸文學てなければ通らないヨ、それもなるべく新しくなくては駄目なんだからネ、ダヌンチオやハウプトマンては追つ付かないのだ。僕などには發音も覺束ない、アンドレエフとかエチエガレーとか、鳥の名か魚の名のやうなのも最早古い相だ。まづ文壇は魚がしだネ。……イや此れは獨りてお饒舌をして失敬」

「君は豪いヨ、不相變健鬪家だネ」

「煽動ては困るヨ」と原は一寸坐を後へ下る。

「イヤ實際君のいふ通りだ、大陸文學も結構だが、あまり飛び跳ね過ぎるやうだネ」

「それが所謂今日の時代て、新趣味なのだから仕方がないサ、大勢には抗すべからずダ」

「大勢て思ひ出したが、高瀬は大した評判だネ。何か大作も出來るさうだつて」

「あの男こそ實に豪いヨ、健忍不拔といふのだネ」

「僕は外遊中てあまり近作を讀まぬが、創作は如何かネ」

「大した評判だから、作も良いに違ゐないのだらうがネ、僕は高瀬の小說よりはアノ短い雜文の方が良いと思ふ。それからアノ男の評論は君も知つて居る通り立派なものだヨ」

「併し世間ては高瀬の小說が出る度に大喝采をやるさうてはないか」

「それが所謂新趣味だらうヨ、一寸僕等には解からない處だがネ。否、矢張その解からぬと言ふのが、僕等のチョン髷たる所以てあらうヨ」

「イヤそんな六つ個敷趣味が解からないのを以て、時勢に後れたといふのなら、後れた方が良いかも知れない」

「解からない處が、サムボリストさ」

「併し西洋のサムボリストの書いたものは、良く解るヨ」と西川は西洋の事をいふ。

「處がネ、日本の文人は西洋のより進んで居るのださうだ。僕は西洋のを良く知らんが、今日の吾が文人は西洋の奴等の上手を行つて居るのだといふ事だ。君は西洋の事には通じて居るが、實際日本の方が進んで居るのかネ」

西川が只微笑つて居るので、原は又つゞけて

「僕は一つ新趣味征伐てもやり度と思つて居る。唐茄子頭の風呂敷趣味は恐れるからネ」

「大層凄いネ、万望お手柔かに願ひます」

と西川は輕く受けて、又話を親友の上にうつし

「又高瀬の話をするが、アノ男の書くものは、みな本氣だといふ評判ではないか」

「シリアスだ、全く眞劍だ。だがアノ眞劍はお面お胴の眞劍て、抜身の眞劍ではないネ」

「併し人生に觸れて居るといふのが、世間の評判のやうだがネ」

「だからサ、世間でいふ人生に觸れるなんていふ事が、甚だ覺束ない事だと僕は思つて居るんだ」

「高瀬を一つ金に困らせるのだネ」

西川の此の一言が酷く原の氣に入つたか、原は大に笑つて

「それ〳〵それだ、何でも借金て首がまはらん様にさせなければ駄目だ。さうなつてからか眞實の人生

だ、拔身の眞劍だ」
「處が高瀨は金に困り得ない男だヨ」
「困り得ないは少し變たが、實際さうだナ、あまり凡ての事を整然と處理して行くからナ、好漢惜むべしかネ」
「金に困らないのが惜むべしなら。金持ちてあつたら何といふネ、ハッハッ……
「實を言ふと、金に困る困らぬは創作に何の關係もない事てはあるが、高瀨の作もモオ一と息だヨ」
「定めし高瀨は今時分嚔を仕て居るだらう」
「ハッハッ……」
「此の時、梨の削いだのが水に浮かされて、二人の間に運ばれた。二人の注意はそれに向けられたので話は遂に全く途切れて仕まつた。

久しぶりだから是非一處に夕食でもと切りに西川が止めたのであるが、原は大事な用を控へて居るからと言つて、西川の家を辭して去つた。大事な用とは日比谷を出る時に考へた、身の振り向きを定める事てある。が電車のなかで西川に職業にでもと言つたのとは大にその口調を異にして居る、併し原は舊の敎師の許に行つて職業を求むる丈けの勇氣を持たぬ、大量を持たぬ。それこそ原には敵の軍門に降を乞ふやうに感ぜられるのである。節を屈するやうに考へられるのである。思ひ切つて敎師の前に膝を屈する事も出來ず、退いて獨力を以て自活の道を開て行く事も出來ぬ、中ぶらなる原はまことに憐むにたえたる人間である。斯樣いふ人間が華嚴にも行かれず、生きて行く事が出來ず。まことに始末の惡く出來た人間である。田舍であつたから高等の學校にも居られたのであるが、東京に出て來ては何とも仕樣が

ないのである。

併し仕様がないでは濟まされないので、矢張のら犬の餌をあさるやうに人の門を叩いて職業を求めるのであつた。そこで團子坂から千駄木に出て、同窓中の先輩の家を音れた。先輩は深く原の身に同情を寄せてくれ、色々と職業の事に就き懇談してくれた。併し結局今差し當り何處といふ宛もないといふのである。無論オイソレと仕事のありさうな事はない。氣を永く待たなければなるまい。原はなほ態々依頼して先輩の家を出た。

先輩の家を辭して一二町歩き、すゝめられるまゝに車に乗り本郷の通りをお茶の水の方に走らした。原は車の上からも珍らしさうに左右の店をキヨロ〳〵と見る。水菓子屋には水蜜桃か澤山に並んで居る。自分の青年時代には固い秋桃などを喜んで噛つて居たものであるが、かうして見れば食物の趣味も變つて居る。而もこれは良く變つたのである。金鍔の店はマシマロー西洋御菓子と變つた。最近の東京は万事に改善せられて居る。此の間に於て獨り文藝上の趣味のみが惡くなつたとも思はれぬ。形の上の事は覿面にその結果の顯はれるものであるが、精神上の事に至つては、容易にそれが見えるものではない。今の世の中の趣味も此の變遷の間にあつて、實は變化の中途にあるのであらう。而もそれはやがて良くなるものであらう。併しその良い處はすぐに顯はれては來ない。古い趣味が打ち壞はされて新らしい趣味が發展するまでの間に色々な變怪のやうな趣味が跋扈するのは已を得ぬ事である。かう考へれば今の世は面白い時である。高瀬の小説が賞められるのも一時已を得ぬ事であらう。それが賞められる所以は、やがてアノ男の小説にかくれたる長所があるからであらう、左様に違ゐない。それは左様としても今の世の惡趣味はこれを退治しなければならぬ、馬鹿〳〵しい小説はこれを處分しなければならぬと、やかまし

い理屈を言ふのが原の癖て、今も車の上から町を見ながら、力瘤を入れてこんな事を考へて居たのてある。

スルト何やら鼓の音のやうな聲が聞える。原はまたキョロ〳〵見まはすと果して鼓てあつた。弓町の方へ鼓をたゝいて、下駄の齒入れが行く。豆腐屋の喇叭、煮まめやの鈴などは古いもので知つて居るが、下駄の齒入れの鼓に至つては始めてゝある。なるほど妙に變つたものだナと又も原はツク〳〵感心した。

その内に車はお茶の水まて來て仕まつた。車から下りてすぐに甲武線の電車に乘ると、電車は忽ち刻むやうな妙な動力の音を出し、やがて心持の良い笛の音と共に勢よく走り出した。此の電車を好むものは原に限らぬてあらう。太もゝを出すなとの其筋の注意は掲けてないが出して居るものもない。煙草はゆるしてあると見えて、原の近くに坐を占めた男が「敷島」を出して吸い始めた。スルト向ふの隅に乘り合はして居た妙な西洋人がノソリ〳〵と歩き出した。西洋人は肩から不恰好な鞄をかけて居たが、その鞄には色々な字が落書きしてあるらしい。だん〳〵近寄るのをよく〳〵見るとそれは恐れ多くも耶蘇教經典の文句てある。昔は聖書なるものは非常に尊重され大事にされて、普通の人には滅多に見る事も出來なかつたものてあるといふ。今ても耶蘇舊教の方てはその風を守つて居るとか。如何にも左樣なければならぬ筈てある。然るに此の西洋人は勿體なくも此の難有い文句を鞄に落書きして居る。怪しからぬ奴があつたものだ。併しこれも自然の大勢か、民主平等主義の惡趣味てあらうと、原は見る物聞く物何もかも自分の考へて居る方に引きつけて仕まふのてある。それて歩て來た西洋人は何をするのかと見て居ると、原に接して坐つて居る「敷島」の男の前へ來て「煙草の害」と書いた薄つぺらな小冊子を渡して舊の坐に戻つて行つた。貰つた人は定めし退屈凌ぎの良い材料を貰つて、お蔭て煙草か却つてうま

く吸へたであらう。それにしても本氣でこんな事をして居る西洋人は馬鹿か利口か、田舍出の原には一寸見當が附かなかつた。

原は千駄谷で下車した。家族を呼び寄せる準備として原は此處に先づその家を定めたのである。幾度か電車線路を蹈み切るうね〳〵した道を通つてやうやく千駄谷の本通りに出て、それから眞直に自分の家の方に向ふ。最早六時に近いのであるが、夏の夕日はまた照りつけて、中々暑い。汗をふき〳〵テク〳〵と足早にやつて來ると、道のほとりに風鈴屋と金魚屋とが荷を下して、日陰げて話をして居る。幾多の風鈴は折からの一陣の風に盛んに鳴り渡つた。原はこの二つの荷を見、風鈴の音を聞て非常に心持ちよく感じた。殆んど恍惚として仕まつた。チリリン〳〵と一寸オノマトポーエチツクにも顯はしかねる良い音を出して歩く風鈴賣りや、金魚や金魚と云つて歩く金魚うりは、春から初夏にかけて、茄子や胡瓜隱元なた豆の苗、朝顏の苗や夕顏の苗と、美音をならして來る苗うりや、新藁や新藁と云つて來る新藁うりと共に、原が小供の時からのおなじみであり且つ尤も好んで居つたものである。電車の東京、日比谷公園の東京、活動の東京を歩き、鼓の下馱の齒入れをこそ見たが、少しも昔の趣味の東京を見る事の出來なかつた原は、此の郊外而も自分の家のほとりに、舊の東京の面影を認める事を得て、少なからず嬉しく感じたのである。暫らく見とれて居た後、原はつか〳〵と二人の前に行き、再び暫らく見まはして、金魚と風鈴とをくれと鷹揚に言つた。相手の二人は一處に立つて各自の賣りものをそれ〳〵出して見せる。原は一個の忍草の附た風鈴と硝子の容器に入れた五尾の金魚とを買ひ取つた。此の二つを買ひ求めた原は小供のやうに、その厄介極まる荷物を手にしながら、それほどに苦にもならぬか、得々として七百二十九番地の自分の新宅まで歸つて來た。家には妹と女中とが留守番をして居る。併し原が歸つ

て來ても迎に出るものもない。折角氣に入つたものを買つて來たのであるに、だれも迎に出ないのみか家の内へ入つても人影さへ見えないので、一寸拍子の拔けたやうな心持がしたのであるが、兎に角手中の二品を椽側に置き、裏口の方に出て見た。原の其處へ來たので始めて氣の附いた妹は、「お歸りてしたの？、少つとも知りませんてしたワ。……今、ネ、黑に御飯をこしらへて、やつて居る處てすノ」と挨拶やら說明やらを一處にする。

黑とはのら犬の名である、原が此處へ移つてから食物を施してやるので、黑は毎日やつて來るやうになつた。むしろ此處を自分の家として仕まつたらしいのである。

妹は原と共に内に入つた。原は「こんなものを買つて來た、此れは椽先へつるして」と風鈴を渡し、それから金魚を何かへ容れてと妹に注文した。

「兄さんには呆れて仕まふワ。まだ御飯の道具だつて揃つて居ないのですよ、それに金魚なんか買つて入らしつて。容れるものなんぞ如何してありは仕ませんワ」

「何か有りさうなものだナ。硝子のなかに入れて置くと、鼻をついて死んで仕まうからナ」

「兄さんのやうな事を仰有つて居ては、金魚より人間の方が先きに死んで仕まいますワ」

「何んでも良いから、容器をさがしてくれ、なければ何か桶でも買つて來てくれ」

原には自分の生命よりは犬や金魚の生命の方が大事なのであらうか。

故郷

水野葉舟

一

私が九の時。――と、かう言ふ風に私はこの事を思ひ起す。――春の暮であつた。私の家は又福岡の町から門司と言ふ處に移る事になつた。それを聞いた時は私は何とも思はなかつたが、先づ學校の先生の處に行つて、その事を話した。すると加藤先生の方が、私よりは驚いて

「それは大變遠い處に行くんだね。…………………」と言はれたが、暫く私の顏を見つめて置いて、

「だが門司と言ふ處は大變な處だぞ。狐や狸が晝間でもそこらをうろついて居る處ださうだから……

……………と言ふ風に、色々人氣の無い恐ろしい山の中の樣な話をして聞かされたので、私の心の中は樣々な想像で滿たされてしまつた。――私は上から重くおひ覆さつた樣に薄暗く樹の繁つた、美しい花や可愛い草などは少しも無い、人の少ない廣い土地が遠く連らなつて居る處の樣な氣がぼんやりと心に思ひ浮べられる。それを覺束なく考へて行くと如何なる事かと思はれる。けれどもそれは極く極くぼんやりと起つて來る感じて、祖母さんに昔話を聞く時と同じ樣な風に心に映つて來るのであつた。

その薄暗い淋しい處が恐ろしいものの樣に、私の目に浮んでは來るのだつたが、しかし、今まで私の家がある福岡の町と言ふのも、決して晴々した心持のいゝ處では無かつた。古い士族町の跡だから、どの家を見ても古く陰氣で、軒の垂木にはものの精が宿つてでも居る樣な家ばかり並んで居る。私の家から一軒置いた隣には草が生へて荒れて居る屋敷跡があるが、その隅の方に古井戸と四人でだく位な大きな榎

の木がある。その榎樹の梢にはどんな靜かな日にても、風が當るので糸車を引く樣な音がする。するとこゝらの子供達はこの榎樹には糸引婆の精が宿つて居て、始終糸を引いて居るのだが、靜かな日にはその音が聞えるのだと言つて恐ろしがつて居た。その樹ばかりでは無くその町では、何處に行つてもその樣な話が付いて居る。――實に何もかも古びて居る。半分壞れかゝつた土塀だとか。倒れさうになつたまゝの古い門だとか、さもなくば垣根も何にも無くなつて荒れはてて居る家敷跡だとか言ふものが、まるて不思議の表象てでもある樣に亂雜に並んで居る。

その町の中に居る子供達が又眞からその怪談を信じて居て、集ると互に聲をひそめてさも恐しさうに、色々と聞き覺えた怪しい話を話し合ふ。中にさも自分々見た樣な事を言ふものがあると、皆てそれを疑はないて、次から次へと話し傳へる。その子供達はいつも日が暮れると町の一個處に集まつて遊ぶ。月の夜などには、町の中を走り廻はつたり、大聲をあげて流行唄を唱つたりする。その中には女も交つて居た。――そして散々遊び廻はつた跡て、又一所に集ると誰れが言ふとなく怪しい事を話し出す。

「私が一人て皆に離れて馳けて行くと、曲り角の處て鼠色の衣を着た坊主が風の通る樣に私の前を通つて行つた。」と一人が言ふと、それにつれて又一人が

「私はあの屋敷跡の井戸の處て。悲しさうに人の泣くを聞いた。」と言ふ。すると皆恐ろしさうに身を縮めて、一團になつて吐息をつく。――かう言ふ風て私達には、色々な不思議なものが見える。

かう言ふ事にはとりわけ感じやすい憶病な、好奇心の強い私にとつてはその樣な子供達のする事は私の心に眞から響をつたへるのてあつた。それてその子供達の中に私はかう言ふ友達を持つて居た。一人は淸ちやんと言ふ洗濯屋の娘て、物を言ふ時にはいつもさゝやく樣な聲をする。そして誰れよりもよく、

お怪(ばけ)の話を知つて居た。一人は區役所の書記の子で、和田と言つた。十三になるさうだが、片足が少し短いので、始終杖にすがつて歩るいて居た。色の青白い、子供だのに頰骨の高くなつた可愛想な顏をして居た。

その和田の家(うち)には色々な草花が鉢植ゑにして大切にされて居た。その中でも大切にして居たのは、百合の鉢で、それを和田は私が行く度びに見せて

「これは爲朝百合つてね、なか〳〵種が少くないんだとさ。お父(とつ)さんが縣廳のお役人の處で貰つて來たのだよ。」と言ふ風に、一々其名を繰り返して、如何にも珍らしいものの樣に話しをする。

此外にも私は友達を持つて居た。その友達は學校の秀才で、立派な家の兒であつた。それはまあ、私にとつては晝の友達とでも言ふのだらうが、しかし私が始終遊ぶ子供と言ふのは、この夜町の隅に集まつて、お怪話をして恐(こは)がつたり、流行唄を唱つたりする夜の友達であつた。その仲間になつて居て私は自然と怪しい話を信じて、小さな草や木にまで恐れを抱く樣になつて居た。それかと思ふと、いおけた腐りかゝつた樣な草花なぞを見てうらやましがつて居た。全くそのくすんだ陰氣な古びた町のいやな心持そつくりに成つて居たのだ。

私はこんな風の心から、新しく移る門司と言ふ處の事を想像したのだ。

二、

やがて日が迫つて來た。加藤先生や晝間の友達とは別れの寫眞を寫したが、愈々出立する前の晩に成つても、夜の友達には何とも言はずに別れてしまつた。

其日は朝早くから博多の停車場に行つた。其日になつて見ると、私は今迄想つて居た事などは大抵忘

れてしまつて居た。父や母や、其他大勢の人達と一所になつて汽車に乘つて出立した。

私は母のわきに坐つて居ると、何時の間に母の隣に居たよその叔母さんと話を初めた。私がほしいまゝな自分の想像した事を憶面もなく話すと、其叔母さんは一々面白さうに笑つて聞いて居た。私もそれに調子づいて喋つて居たが、暫くすると、それにも飽きてしまつて、汽車が長い長いと思つて居ると、やつとの事で門司へ着いた。

汽車から降りると何處となくぱつとして明るい處に來たやうで、私は先づ新しく堀りさげた赤土の崕を見た。――すぐ目に迫つてこんもりと繁つた山も見える。きらきらと波が日に反射して居る海の上には、帆を張つた船も見える。……私達は竹矢來を結びまはして、そこら四邊に、敷石にする花崗石を積み重ねてある、廣い空地を通つて、まだ堀り割つたばかりの、てこぼこした赤土の道に出た。

私は歩くのが面白く思へてたまらなかつた。道の兩側には、今迄見たこともない草が生ひ茂つて居て、それに色々な花が咲いて居る。今朝は夜あけ頃から起きて來たので、まだ草には濕り氣があつて、いきいきした心持のいゝ色をして居る。それが今迄見馴れて居た様な藪かげの草や、恐ろしい取ると祟りのありさうな草の様ではなく、のびのびして居るので私はそれを見て居ると飛び立つ様にうれしい心持がされる。――道はだんだん、登つて行つて、大きな坂の上に出た。私達は山の上かと思はれる様な高い處に來て居る。そこは、山を壞した跡が其儘になつて居る様な處て、下を見ると赭色をした大きな石が幾つとなくころがつて居る。その上に日の光が照らして、燒けた跡の様な暑さうな色をして居る。目の先には海峽が深碧をたゞえて横はつて居る。案内について來た爺さん、皆の一番さきに出て危いと思ふ程、崕の端に立つて極く丁寧な言葉で説明をした。

「向ひ側のあれが長洲の方の山でござりますあの山の裾にある町が赤間ヶ關と言ふ處で…………」

と言ふ。それを皆は休みながら聞いて居た。

こゝまでゝも、もう私は大變歩いたと思つた。身體中が汗ばんで、黑く、咽が乾いて來た。母の顏も赤くなつて汗がにじんで居る。　小さい方の妹はいつの間にか叔父におぶはれて居た。それまで私は母のわきに居たが、此時にすぐの妹と話をし樣と思つて見まはすと知らない他の女の兒と二人で道ばたにしやがんで休んで居た。

「そこに居たの……すまちやん」

私はそのわきに行つてからきくと妹はそのわきの兒を一寸見て、うなづいた。暫くすると妹は

「兄さん、これからまだいくの？」と言ふ。

「もうだるくなつたね」

「私も」

皆休んで居たが。又歩き出した。此度は私は妹と手を引いて歩いて行つたが、暫くすると家のある處に出た。其處まで來るともう歩けないと思ふ程だつたから叔父に、

「叔父さん、僕の家はまだ？」ときくと、

「僕の家はまだもうすこしだ」とそつけなく云ふ、私は泣きたくなつたが知らない叔母さん連が居るから默つて口を結んで歩いて行つた、するとうつとうしい程茂つた林の中に入つた。道の右の方は山だ、左の方には幹（みき）の白つぽい大きな樹がずつと茂つて居てそこらが薄暗くなつて居る。その林に入ると身體がすつとして、涼しくなつた。默つて歩いて行くと私は一體こんど自分のゆく處はどんな處だらうと初

めて思ひ出した。行つても行つてもその幹の白つぽい樹が道の兩側に生へて居る。

「叔父さんこれは何ていふ樹？」

「これかい、はぢの樹といつてね、ろうそくの蠟を取る樹だよ」

するとわきから他の叔母さんが

「まあ、左樣でございますかね」と云つた。――樹の間から時々海が見える。私は愈々もう歩けないと思つて居ると、そのはぢの樹の林の中で道は不意に二つに別れて居た。それでこの別れ道の處まで來ると、爺さんは急ぎ大きな聲をして

「さあ、皆さまやつと葛葉につきました。」と言つたので皆はおどろいて足を止めた。すると爺さんは、號令でもかける樣な調子で

某さんと某さんと某さんのお家は下の道でござりますその外は上の方で御座りますから上へお出て下さりませ」と云ふ、それで皆安心した樣に吐息をつくやら　あいさつをするやらして二つに別れた。私の家は下の方だつた。家の前まで來て見ると、山の方にずつと三十軒ばかりの新らしい家が一團になつて建つて居た。中にはまだ矢來をゆつたまゝの家もある。方々でまだ家を建てる音がして居る。私はもう何とも言へない氣がした。氣がはきはきして新らしい嬉々とした心持がする。私の家は道よりか一段低くなつて居る處であつた。庭はすつかり赤地で、丈の低い松が二三本植ゑてあるより外何にもない。けれど家の周圍はすぐ野原で、草の花が一ぱい咲いて居るし、家の椽がはに立つて見ると、はぢの樹の上から遠くの方に海が見える。島も見える。丁度そこから正面に當つて松が茂つて居る少さな島が見える。

家につくと母も妹達も今迄の疲れた事などはすつかりわすれた樣になつて喜んで居る。私は像がはに立つて鳥を見て居ると、妹が後に來て、

「兄さん、私嬉しい」と言ふ。この妹はその時七つだつた。私達はこの家に着くと二人とも、まるで放された小鳥の樣な心持がした土でもなんでも見るものが皆新らしい、色々な恐ろしい話がつきまとつて居たり。人が住み古るした隱氣な臭などが少しもこもつて居ないので、私だちは思ふまゝにその中を聲をあげて遊びまはることが出來る。たゞ嬉しくつて嬉しくつて、そこいらにあるものを何でもかでも手に取つて見た。すると、如何なものを見ても私は驚くことばかりだ。私は木の葉や草の葉がその樣に美しい晴れ晴れしたものであらうとは思ひもかけない事であつた。――私の心は何と言つていゝかわからない程だ、毎日々々たゞ驚いてばかり居る。あまり驚く事が多いので私は今迄の心がすつかりくづされてしまつた樣に思へた。

三

けれども、――私は新らしい家の周圍の物珍らしさて來る日も來る日もすつかり心が、まぎれてしまつて居たけれど、こつちに移つてから一人も友達がなくなつてしまつた。私はそれが何となく淋しく思はれて居た。そこへ福岡の友達の一人だつた近藤君から手紙が來た。――これは私が生れて初めて友達から受け取つた手紙であつた。その手紙は學校で習つた通りの文句てあつたが、終りに、加藤先生からも、熊谷君からも、中田君からも、宜敷と書いてあつた。私はこういふ風に友達の名だけ書いてあるのを見ても、すぐ福岡の友達の事を思ひ出した。

私は其手紙をば幾度繰り返してよんだらう。それを讀むでから、色々と今の家の事を書いて送らうと

思ひ立つた。手紙を書きつけないので、非常に困つたが、私は最初の言葉はやはり「拜啓愈々御勇壯賀し奉り候」、とし樣と思つた。私は加藤先生達に是非、こゝの景色や何かを知らせなければならないと思つたのだが、どうしても書き方かわからないので、遂々近藤君の手紙と同じ樣な、學校で習つた通りの、返事を出した。その時も私は、友達がほしいと思つた。

こゝに移つて來て間もなく、私は大里といふ處の小學校に通ふ事になつた。此の葛葉の近處には學校はないので、父が一番近い大里と言ふ處を選ばれたのであつた。――それでも、大里まではこゝから半里位はある。そこまで、其頃來た梅といふ女が一所について、通つて行く事になつた。毎朝その梅と、私とすまちやんとで辨當をさげて、出懸ける。私はつばの廣い帽子を、かぶつて、カバンをさげて、すまちやんは傘をさして、私と同じのカバンをさげて、それに草紙を結び付けて行くのであつた。道は汽車から降りて歩いて來たのとは別の方で、田甫の中を通つて小森江と言ふ處を通りすぎると、廣い、長い坂がある、其の坂を登りつめた處は汽車の線路の上に架かつて居る空橋で、それを渡ると坂が下りになつて居て、その下に深い川がある。そこにも橋が架かつて居る。その橋の欄干でゆきにも、歸りにも休んで川の水を見て居ると、時々、魚がはねる、それが面白くてたまらなかつた、その河の岸の草むらの中には常夏が咲いて居る。

その橋から學校までは直きであつた。――學校と言つても門は頽れかゝつて居た。敎場も薄暗い處で、机は汚れた小さなのであつた。生徒は皆、漁夫の兒だと言ふので、よごれた衣服を着て、砂まみれになつて、あばれて居る。中には、繩を帶にして居るのもあつた。――そこに入つて二日目位に算術の時間になつた。先生が問題を出したが、その答を出すのを見ると、式も何も書かない

「術に曰く何々……」と言つて、文章の樣にして讀むで行く、私の習つたのとはまるで違つて居るのを、先生も平氣な顏をして聞いて居る。私は隣の席に居る兒に、

「これでは、いけないのかい」と言つて自分のしたのを見せると、その兒は妙な顏をして、

「そんな字は、おりや習はんけ、知らん」と言つた。そして、大きな聲をして、

「先生、この人は違ひます。」と言つたので、皆私の方を向いた。先生も、ずかずかと降りて來て、私の石ばんを見た、

「あ、洋式の方か……」と言つて、知らん顏をして、歸つて行つて、

「術に曰く、それから誰れか出來たものは、言つて見ろ」と言つたので、私は急に悲しくなつて、福岡の學校の事を思ひ出してしまつた。その時間がすんで、敎場を出てから梅に

「僕はもう歸る」と言ふと、梅は、

「何故でございます?」と言ふ、

「だつて、こんな學校は嫌ひだから歸る」

「まあ、そんな事を言ふもんじやありません……」と言つていつも辨當を食ふ家に連れて行つてくれた。私達はいつも、その家の坐敷に來て辨當を食ふ事になつて居たのだ。その中にすまちやんも來て、辨當を食べたが、其日はそれて歸つてしまつた。私一人まるて、大里の學校は大嫌ひてあつた、別のものにされて居て、先生ても、生徒ても、少しもかまつてくれるものはなかつた、それに汚なくつて、何を敎へてくれるのだか、ちつとも面白くはない。けれど學校に行く道は實に面白かつた、色々な花が咲いて居る。色々な木が生へて居る。福岡に居た時に和田が大騷ぎをして居た、百合なども、いくらでも

ある。それを見付けて、折つて來るのが何より嬉しい事であつた。

或る日、こんなこともあつた、歸り道に、梅が、私達を待たせて置いて、道わきの草の中に入つて行つた、と思ふと、赤い大きな實(み)を手に一ぱい取つて來た。

「それは何？食べられるの？」

私は一番にきいた。

「食べられますとも、苺つて言ふのです」

「苺、つて何？」

すまちやんが聞く、二人とも、それを不思議そうな顔をして見た。梅は「苺つて草の實ですよ」と云つて赤い水の垂れそうなのを一つ、つまんで、すまちやんの口に入れてやりながら、

「おいしいでしよう？」と言ふ。私はうらやましくなつたので

「僕にもおくれ」と言ふと、梅は、手に持つて居るのを、半分くれた。私は初めて草の實を食べた。やはらかい、甘すい、味が口の中一ぱいに、心持のいい香がした。

四、

或る夕方私は晩の御膳をたべてから、叔父と一所に門の外に出て立つて居た。私の家の門の前には物を賣る家が二三軒ある、その家のはづれからずつと坂になつて山の上の方に行かれる樣になつて居る。その時はもう夏の休みで暑い盛りであつた。私達は白い衣服を着て、海の方から來る風に吹かれて居た。すまちやんは叔父さんに色々な話をしてもらつて居るから、私は一人別になつて、何といふ氣もなしに毎朝學校に行く方に歩るいて行くと、坂の上の方から私より二つ三つ年上の男の子が、勢よくかけて降

りて來た。私の顏を一寸見ると急に立ち止まつたが、それなりにそろそろと私の歩いて行く通について來る。私は何だか變だから後をふりかへつて叔父さんの方を見樣とした拍子に私はその男の兒と顏を見合はしてしまつた。すると、その男の兒は一寸笑ひかけて、大人らしいませた調子で

「君は山田さんつて言ふのですか」と聞いた。私はこれまでこんな風に云ひかけられたことはなかつたので、どぎまぎしてたゞ

「えゝ」と云つた、

「君に加藤さんから手紙をことづかつて來て居ます」

「加藤さんて加藤先生の事？」

「えゝ、橋口小學校の先生の……」

加藤先生を知つてると言ふのをきくと私はその人が急に友達の樣な氣がして、

「君、加藤先生をどうして知つてるの」と親しそうに聞いた、すると、

「同じ町に住んで居たんだから、加藤さんに色々君の事をききましたよ」と私の事を何でも知つて居る樣に云ふ、

「さう、ぢや君は近藤君つて人も知つてる」

「知つてます。……やつぱり橋口小學校の生徒でしよう」

「えゝ」

こんな風に話をして居ると、私は急に親しい友達が一人出來た樣な心持ちがした。その男の兒は一重瞼のはつきりした目をして鼻の長い、口のしまつた、色の黒い怜悧そうな顏をして居る、暫く默つて居

ると、

「加藤さんの手紙は今日忘れて來たから明日持つて來てあげましよう、ぢやさよなら」と云つて、私がさよならと言ふのも聞かずに、私が立つて居た道を先の方にずんずん歩いて行つてしまつた。私はそれを見送つてから門の方に歸つて來ると、得意になつて叔父さん達に

「僕、お友達が出來たよ」と言ふ、すると、ずまちやんが目をまるくして私を見る、叔父さんも私を見つめて、

「友達つてどんな人だ？」と言ふ、

「今話してた兒。やつぱり福岡から來たんだつて」

「この社宅の人かい」（ここの人達はこの山腹の家の一群を社宅と呼んで居る）

「うむ、知らない」と言つたが新らしい友達の出來たと言ふ事は私にとつては非常な嬉しいことであつた。その友達の事を想像してゆくと又新らしく自分の日々の事に變つた樂しみが起つて來るのを思つた。

次の日、朝早く昨日の男の兒が加藤先生の手紙を持つて來たが私にすぐこれから自分の家に來ないかと言つて誘つた。私は誘はれるまゝに家を出て坂を登つて山の上の方にあるその兒の家に行つた。

「まあ入りたまへ」と言つたが私は何となくさうすぐは入りかねたので門の處に立つて、この家の苗字を見た。小田内恒雄と書いてあつたが私はそれがどうしてもよめない、小田と讀むのだらうか、小田内と讀むのだらうかと思つて考へて居た。するとその兒が内から出て來て

「入りたまへと」言ふので内に入つた。その兒の室は玄關だつた。小さな机があつてその傍にきちんと本が積み重ねてあつた。そこに上ると、その兒は色々な畫を出して見せて、

「僕の東京の叔父さんが書かきだからね、こんなに書をかいてくれたのよ」と云つた。私はそれを見て居たが、きまりがわるくつて仕樣がなかつたけれど思ひ切つて、

「君の苗字は何と讀むの」と聞いた、すると

「あれはね、おだうちつて讀むんだよ、皆讀めないのでいゝかげんな事を言ふんだよ」と言つた。小田内の家は上から二段目にあるのでその庭から見ると、この社宅が全體一目に見える。三十軒ばかりの家が一團りになつて山の樹を切つた處に建てられてある、中にあたる處に大きな家が二三軒あつて、それから上の方に小さな家が二並びになつて、幾段もある。こゝに來ると、私の家の前の森も、低い下の方て島が海峽の眞中にたつた一つぽちりとある、舟が幾艘か島のまはりに浮んで居る。

「こゝからはよく海が見えるんだね」私が云ふと、

「あゝ時々はね大きな蒸氣船が通るのがよく見えるよ」

「そうかい、僕も見たいなア」

「待つて居給い今日も今に通るかもしれないから、夜は青や赤の燈火をつけて通るよ……君の家からは見えないのかね」

「見えるかも知れないけれど僕はまだ見たことがないんだもの」

「そうかい歸つたら椽がはに立つて見たまい見えるかもしれないよ」

こんな話をして居ると小田内は本箱の中から少國民を出して來て見せて

「君、雜誌をよんどるかい」と聞く、

「いゝえ……」と言つて、それを手に取つてあけて見ると色々な繪がついて居る。小田内はその話を

して

「君は尋常科だらう、この雜誌は高等小學少國民と言ふのだから君はお父さんに幼年雜誌つて言ふのを取つて貰いたまい」と云つた、私はさうする事にきめた。

歸る時に小田内のお母さんに逢つた。私を見ると笑ひかけて、輕くあいさつをしながら、小田内に「政雄、どこの坊ちやんだい？」ときく、小田内は

「そら此間お母さんに話した山田つて言ふ人の處の」

「あゝさうかい……よくいらつしやいましたね」と半分は小田内に半分は私に言つた。私はその顏を見ると家のお母さんの顏によく似て居る樣だつた。こゝに來る時に一所に汽車に乘つて居た叔母さんの一人もさうだつたが私はいゝ叔母さんは皆自分のお母さんと同じ樣な顏をして居るのかと思つた。

五、

小田内は色々なことを知つて居た、紙で袋をはつて蟬を取つたり。きりぎりすを取つたり、ばつたを取つて絲で縛つたりして歩るいて居た。小田内はいつも弟をつれてゆくのだつたが、それからは私もその仲間に入れてくれた。家に居る時は小田内はいつも書を書いたり雜誌の書に色をつけたりして居た。私はそれを見ると皆うらやましくつて、自分でも色々まねをして見た。けれどどうしても小田内程うまくはなかつた。

或る日三人して泳ぎに行つた、私の家の下の方を行つて鐵道線路の處に出ると深く掘り下げた、はゞのせまい危い坂がある。それを下つて線路をこすと、そば畑があつて濱の入江になつて居る處に出る、そこで、私達は泳ぐのだその日も散々泳いで歸りに廻り道をして例のはぢ林の中に入つた。草が生ひ茂

つて居る中を行くと小田内の前から大きな足の長い蛙が一疋飛び出して、薗の中に入つた。すると小田内はそれをす早く見つけて、

「や、赤蛙だ」と云つたと思ふとそこに手ぬぐいをすてゝ、それを押へた、二三度押へそくなつたが、遂々その足をつかむだと思ふと、足の先きを持つて、いきなり土の上に打ちつけた。

蛙はぐうとかすかな聲を出したが、そのまゝ長く、手も足もつつぱつてしまつた。小田内はそれを尙ほ二度も三度も土に打ちつけて居たが、ふいと私を見返して、得意さうに、

「見給へ、大きいだらう。これを歸つて燒いて食はふね、藥になるよ、東京では君、賣に來るんだよ」と言つた、私は何だか氣味が惡くつてたまらないから默つてじつと小田内の顏を見つめて居ると、

「何だい君は蛙が恐いのかい」と云ふ、私は

「僕は何だか汚ならしいもの」と云つたが、そんなものが食へるのかと思つて、

「それをどうして食べるの?」ときくと、小田内は、

「皮をむいて……うむ皮をむいて見せ樣、こうなんだ、こうなんだよ」と云ひながら死んだ蛙の片足を持つて、その指の處の皮を爪でむいてその皮をつまんで引つぱると、きゆうつと身體中の皮がむけてしまつた。其皮をむいてしまつた蛙を、

「これね……ね、こんなだよ」と言ひながら私の目のまへにさしつけたので、私は覺えず二三歩あとにすさつた。すると小田内は笑ひ聲を立てゝ、

「何だ君は弱いね、さ行かう僕の家に行つて燒いて食はふ。」と言ひながら先きに立つて行くので私も不思議でたまらなくつてあとからついて行つた。

家につくと小田内は指てその蛙の目の玉をぬき出しながら平氣な顏をして。

「あんまり水て洗ふとまづくなるからね」と言つてその手て腸もうまく取つてしまつた。それを一寸水て洗つて火鉢の上にあみをかけて、手と足をもいてその上にのせた。そして臺所から醤油を皿に入れて持つて來て、それをつけては燒いて居たが、

「君うまさうな香がするぢやないか」と言ふ、私はたゞおどろいてそれを見て居た。

暫くすると、羨しさうに見て居る弟に、

「もう燒けた。博、お前にこの手をやらう、山田君、この足を食べて見たまへ」と言ひながら小田内は先づ片方の足を一口にほうばつてしまつて、さも甘さうに骨をぽりぽり言はせて居た。私はあつけに取られてそれを見て居ると小田内は

「君はなぜ食はないの」と言つて私の顏を見たが、私が默つて居ると、

「食はなきや僕が食ふよ」と言つて私の分の足までも獨て食つてしまつた。

私は歸つて來て今日の事を母に話すると、母は目を見はつて默つて居たが、さもきたなさうに

「みつちやんも食べたの?」と言ふから、私は首をふつて

「食べやしません」と云ふと默つてうなづいた。

六

八月の暑は盛も過ぎた。小田内は小倉の高等小學校に通ふのだとか言ふので、其迄のやうに逢へなくなつた。私も大里の學校をよして門司の學校に通ふ事になつた。門司の學校も大里の學校と同じ様な汚い學校てあつたが私は好てあつた。この葛葉から毎日一所に行く見達も、五六人居たけれど、皆私より

年が下てあつたから、私は同じ級の生徒で近所から來る兒と親しくした。この葛葉と並んで白木崎と言ふ處があるがそこから來る磯部健之助と言ふ兒と私は仲がよかつた。健之助は目のきつい、言葉つきのはき〳〵した兒て、私には非常に信切だつた。どんな事でも私の言ふ通りにしてくれた。

その中にその年は暮れた。私には又弟が一人生れて、兄弟が五人になつた。私は尋常科を卒業して小田内達と一所に小倉の高等科に通ふ事になつた。

私は毎日汽車に乘つて通つて居たが、三月許りすると、私は始終汽車にゑふので、通ひきれなくなつて又門司の學校に歸つて來た。——その三月の間に學校は新しく建つてすつかり變つて居た。

白木崎からも又一人大森と言ふ兒がふえて居た。私はいつとなしに大森と仲がよくなつた。すると健之助は人が變つた樣になつてしまつた。顏を見合せると、わざと怒つた樣な眼付をしてにらむ。私に何かあつたらばと覗つて居る樣な風が見える。私は妙に氣味が惡く思つた。

或る日、大森と二人て歸つて來ると、健之助は三四人づれて、後から追いついて來たが、「山田！」と大きな聲て呼びかけた。私は驚いて振り返ると、いきなり肩を怒らせて、私の方に押して來たが、

「山田！、われ（貴樣）は覺えとれ！」と言ふ。

「なぜ?!

「なしもくそもあるか。！」と言つて肩でぐい〳〵押しながら、道わきの草の中に押し付け樣とする。

私は押されて居たが不意に身を交はした。すると健之助は自分の力で、よろよろしながら危く倒れかゝつた。今迄肱を張つて居た身體の度を失つた其姿が如何にもおかしかつたので、私は覺えず笑つた。すると健之助は益々怒り猛つて、

「何うするか？、よし、われはおれを倒したの」と言つて其處にある石を手につかみ持つた。其擬勢がすさまじいので、私は二三歩すざつて、

「君を倒したんぢや無いよ。………僕はよけたんだ。」と言ふと、

「なにい！、君も僕もあるか、そがな毛唐の樣な言葉をおれの前で使ふな。」と言つて暫く私の顏をぢつと見て居たが、何と思つたか、持つて居た石を急に捨てゝ、

「今日はもうこらへてやらうと言つて、得意さうに肩をふりながら、その連れと歩るいて行つたが、道のわかれる處に立つて

「わーい、わーいと頻りにはやし立てた。大森は其迄默つて居たが、

「かもうな、ほんとに來るなら、おれがどうかしてやるけ……」と言つた。私は其時一時に悔しく成つて來て淚がこぼれた。

それが初めて、それからと言ふものは健之助は何かなしに私にあたる。そのくせ、何かの拍子で學校の歸り道に二人連になると、わざと角ばつた樣子をして見せはするが、何やかやと話をしかけて、私の方に倚つて來る。そして路が分れる處に來ると、

「おれがた（自分の家）へ遊びに來んか？」と言つて引張つて行く。そしては何やかやと機嫌を取つて一所に遊ぶ。それが明日になると、まるで變つてしまつて、そんな事はけぶりにも知らない樣な顏をして、自分の仲間を集めて自分につきかゝつて來る。

健之助は級中のものを私と遊ばせまいとした。その頃、小森江から一年上の級に池本と言ふのと馬場と言ふのが入つて來た。私は池本を見ると、其敏捷な身體と、物を言ふ時にやえ齒が出るのが、何とな

く目に付いた。何時か話をして見たいと思つて居ると、或る日その歸り道に二人と一所になつた。それて

「君は何處から通ふの？」と聞くと、

「小森江から」と言ふ。

「小森江つて葛葉の先だね。僕は先大里の學校に行つてた時に通つた事があるから知つて居る。

「さうかん、あんたも大里の學校に行きよつたのか。おれども丶行きよつたンぞな」

「さうかい。……それから何處の學校に行つてたの？」

「小倉の高等小學……」

「僕も小倉の高等小學に行つてたよ。」

こんな話をして歸つて來る中に、私達は親しくなつて來た。それからは毎朝、池本が誘つてくれるので、それと一所に來た。

その中に冬が來た。黄櫨の葉は皆落葉してしまつて、山には大きな羽音をして鵯鳥が集まつて來る。そして時々悲しさうな烈しい聲を出して鳴く、その聲が、冷めたく凍つて居る空氣に響きわたつて行く。その頃も私は池本と一所に通つて居たが、その代りに大森とは疎くなつて居た。

池本は學校の歸りに山の中に入つて方々に、係蹄を懸けて、それを毎日見廻つて居た。

或る日兎獵に行く約束て、池本の家に遊びに行つたが、網が無かつたので、そのまゝ近所の森の中に入つて、たき火をしながら遊んだ事がある。

落葉を山の樣に積んで、その周圍に池本と私と、も一人村の兒と三人て陣取つた。池本は家から持つて來た芋をたき火の中にくべながら、

「あんたは兎獵に行つた事が有るか？」ときく
「いゝえ」といふと、さも矜り顔に
「この裏の山に行くと、二疋か三疋位はきつと取るゝのぢやがな。此間行つた時にやのう」と、わきに居る兒を見返つて、
「小犬の様なのが居たのう。」と言ふ。すると其兒はうなづいた。
三人とも其儘默つて居ると、風が林の梢を吹いて行く。寒さが襟からしみ込んで來る様なので、私達は覺えず襟を縮めながら火の方によつて行く。暫くすると池本が
「もう芋は燒けちよろうか？」と言ふと、も一人のが
「まだぢやろう。枯葉の燠(おき)は、わらのよりは遲いけんな。」と言ふので、又默つてしまつた。火の中で霜にぬれて居た枯枝のもえ端(はし)が、じゆうじゆう言ふ。その音が何となくしんとした中に響いて、淋しい心細い氣がする。その時に池本は不意に顏を上げたと思ふと、頭の上にある枝に、ばさりと大きな音がして鵯鳥(ひよどり)が一疋止まつた。そして其鋭いはしつこい身體を振つて、四邊をきよろきよろ見廻はして居たが、一聲高く鳴いた。三人は驚いて一時に頭を上げてそれを見た。すると又一聲、烈しく高い聲をして鳴いて止まつて居る枝を蹴る様にして飛んで行つてしまつた。その拍子に池本は
「もう芋が燒けちよろう。」と言つて枯枝の一本でもつて、火の中を攪(か)き廻はして芋をほぢくり出した。それを熱つさうにふう〱吹いて二つに割つた。
「丁度燒けちよら。……あつあつ。」と言つて、その半分を私にくれた。三人は又默つて芋をほり出しては食ひ、ほり出しては食ひして居たが、その中に火はだんだん勢が無くなつて來た。すると、池本は

口の周圍を灰て黒くして居るまゝ立ち上つて、
「わなを廻りに行かう。」と言ふ。それで私も立ち上つた。それに續いて、も一人の兒も立ち上つたが、
「この火を消さにや」と言つて、いきなり右の足で消えさうになつて居る火を、踏み付けた。灰がぱつと立つてそこらに散らかる。ふうと口に入りさうになつた灰を吹き出して、池本が、
「辰そろつとせんか！」と言ふと、辰も口に入りさうな灰を吹き出して、唾をしながら
「消さにや、又山火事が起るとわるいけ。」と言つた。
それから私達は山を廻つて、係蹄にかゝつて居る鳥を取りに行つたが一疋もかゝつて居なかつた。

七

私はもうその頃には、福岡の先生も友達も全く忘れて思ひ出しもしなかつた。福岡よりも葛葉の方が、何となく何時までも自分の家のある處の樣に思はれて居た。今になつて福岡の事を考へると薄暗い始終曇つた陰の樣な處から、急に明るい處に出て來た樣な氣がする――それだけではなく、私は次第次第に新しい友達を作つて、日を暮して居たが、こゝに來て三年目の春の暮、ふとした事から私は熱病にかゝつた。

初めの中は何でもなくたゞ腹の痛い病氣で、一週間ばかり寢て居たが、もう大抵よくなつたからと言ふので、或る朝、門の處に出て、すまちやんの友達や、池本だちが揃つて學校に行くのを見送つて居た。久しく逢はなかつたので池本は私を見ると、笑ひ顏をして
「や、もうようなつたのか！」と言ふ、私は
「まだ………もう二三日したらいゝんだつて」と言つて別れた。池本はその捷こい歩きつきをしな

から、折々後を向いて、口笛を吹いたり、手を振つたりして居たが、それが見えなくなつたと思ふと、私は寒けがして來た。家に入つて、

「寒い！」と言ふと、母が額に手をあてゝ見て

「熱があるよ」と言ひながら床を取つてくれた。其處に寢ると私は身體中がふるへ出した。寒くつて寒くつてたまらない。何となく身體がじめじめして、慄へながら水づいた衣服を着て居る樣だ。

私が慄へ出すと母は驚いて、其身體を私の上にのせる樣にした。すると其處だけが暖かい。

「母さんもつと押へてちようだい。寒いから。」と言つて押へて貰つて居ると、やがて何となく慄へるのが取れて來て、身體の奧が何處となくあつくなつたと思ふと、顏がもえる樣になつて來る。私はほつほつと息を吐いた。身體の中から汗がじつくり出る。口の中が乾いてしまつて、如何する事も出來なくなつた。

やがてうとうとすると、夢を見る。――健之助と二人て山に遊びに行つて居ると、高い岩の上にのぼつた。そこで健之助と何か言ひ合つたと思ふと、健之助は其岩の上から私をつき落さうとする。私は色々あやまつても聞かないで、私の帶の處を持つてつき落した。私は岩の上から直線に落ちて行く。身體がずーんとして沈むと思ふと目がさめた。ほつとしたが、まだはつきりしない。口の中が干乾びた樣になつて、喉が渴いて仕樣がない。誰かの聲が枕もとでする。

「瘧ですかしら？」と言つたのが耳に入つたから、水を貰はうと思つて手をのばすと、手が自由に動かない。私は氣ばかりあせる。すると此度ははつきりと母の聲で、

「目がさめたかい？」と言ふ。私は初めて目をあけた。すると枕元には醫師も坐つて居た。

「もう樂になりましたらう?」と醫師が言つた。

「水」

私は何より水がほしい。

こんな風で私の病氣はおこりに定つた。一日置きに熱が出る。一月許りはそうして寢て居た。

其病氣の中に私の家に宇津さんと言ふ人が來た。――私が寢て居ると、夕方きつと枕元に來て「今日は如何です?」と言ふ人がある。

「まだどうしてもはつきりしませんので、」と母が言ふ。私はだるい目を開いて、その人を見ると、顏の長い、口の大きい、目のはつきりした人だ。その目でぢつと私の顏を見る。私はいつとなしによくその顏を覺えてしまつた。

一月許りして私は癒ると初めて、この宇津と物を言つた。その晩宇津さんが歸つて來ると、「もう起きられるんですか。」と言ふ。私は恥かしい樣な氣がして默つて、うつむいた。すると宇津さんは立つて自分の部屋に行つたと思ふと、雜誌を持つて來て、

「これを御覽なさい。」と言ふ。私はその頃小國民をとつて居たが、宇津さんの雜誌は少年園と家庭雜誌と言ふのであつた。私はその雜誌を開けて口繪を見て居ると、

「みつさんはこんなものが好きですか?」と言ふから、

「えゝ」と言ふと、宇津さんは

「ふむ……」とうなづいたが、

「それおやもつと良くなつたらば、何か話をしてあげましよう」と言つた。すると母がわきから、

「どうぞ願ひます。何ても敎へて下さいまし。」と言ふ。

「は、私は何にも知りませんが話する事や何かは好きてすから」と言つて、又私の顏を見る。その目は何かしげしげと心に泌み入る樣だつた。

宇津さんは二十六七の丈(せい)の高い、肩幅(かたはゞ)の廣い、赤黑い皮膚の色をした、健康(じやうぶ)さうな人だつた。物を言ふ時にも、何をするのても、勢よくすつすつ歩いて行く樣て、少しもねばり氣がなく心持よく感じられる。鐵道會社の技手だと言ふ事だが、毎朝起ると、すぐ洋服を着て、勢よく出て行く。

病氣が癒つてから、私は宇津さんと學校に行く事になつた、宇津さんは、歩いて行く道々私に色々な話をしてくれた。馬に化ける老婆の話や、走り靴を持つて居る魔法使の話や、羽根が生へて飛んて行く娘の話や、それをさも目に見て居る樣に話するのて、私はその話に魅せられてしまつた。

夜は私とすまちやんとに英語を敎へてくれた。その後(あと)ては宇津さんは自分の本箱(ほんばこ)の中から、面白い書を出して少しづゝ讀んて聞かせてくれる。宇津がいつも讀んてくれたのは西遊記と水滸傳とてあつた。私は西遊記も面白いと思つたが、水滸傳の方が尙ほ面白いと思つた。それを聞くのは私の一日中の樂しみて、宇津さんが飽きて止(よ)さうとするのを、私達が二人てもつともつとゝ言つて、うるさくせがんて居た。すると宇津さんはそつけなく舌打をしながら又讀み續ける。

丁度其頃小田内は東京の叔父さんの處にあづけられて行つたし、池本は學校を廢(よ)してしまつたので、私はにはかに淋しくなつてしまつた。その代り、日曜には必ず宇津さんが方々に遠足につれて行つてくれた。私達はよく社宅の裏の山にのぼつた。山にのぼつて草の上に腰をおろすと、遠く玄海灘までが見える。それを眺めながら宇津さんはこんな事を言ふ。

「みつさんは大きくなつたら何になるの？」
私はわけも無く
「大將、」と言つて宇津さんの顏を見ると、宇津さんは親切さうな目て、私をしみじみと見つめながら
「大將よりえらいものは無いの？」と言ふ、
私は何となく不安に感じながら、
「僕は知らないんだもの、」と言ふと、宇津さんは
「學者におなりなさい。そうして立派な事を人に敎えてやる樣な人になる方がいゝ」と言ふから、
「ぢや、どんなことを敎へるの？」ときくと熱心に、グラッドストーンの話をしてくれた。話をしてしまふと、宇津さんは立ち上つて、ふといステッキを振り廻しながら、足に力を入れて、草の上を歩きまはつて居たが、ふつと立ち止まつて、私を見ると、
グラッドストーンはえらいてしよう？」と言つた。私はわからなかつたが、たゞ宇津さんの言ふ事を信じて居た。
私はそれまでは希望と言ふ事を、はつきり知らなかつた。何にならうなぞとは少しも思はなかつたが、宇津さんから、時々こんな風の話を聞いて居る中に、自分は何にならうと、時々思ふ樣になつた。
宇津さんは、平常は默つて居る人だつたが、時々は、きつい重くるしい、聲を出して私を叱る事があつた。我儘て、我の強い私だつたけれど、宇津さんの、力のある目て見られて、叱られる時には、私はすぐ、よしてしまつた。
私には、宇津さんのする事が何ても、立派に見えてならなかつた。物の言ひ方ても、歩き方ても、何て

も、はつきりして居て、男らしいと思つた。
私は、自分でも、自分がそれまでとは、非常に變つたと思つた。時々は唱歌をうたひながら、自分は何して、えらくならうと思つて居ると、今までして居た事が皆いやて、自分で恥づかしくつて、たまらなくなる。すると、私は、宇津さんのする樣な歩きつきをまねて、そこらを歩るいて見る事があつた。
或る日、丁度例の、チーイ、チーイつと鳴く鳥の聲がするころだつた、私が學校から歸つて見ると、宇津さんが、もう、會社から歸つて居たので、
「宇津さん、どうしたの」ときくと、宇津さんはいつになく、そはそはして
「あ、みつさん私はね、二三日うちに佐賀の方に行く樣になつたんですよ、」と言ふ。
「いつ歸つて來るの?」
「もう二年位歸つて來ないでしよう」
それを聞くと、私は驚いて其顏を見たまゝ物が言はれなかつた。そこへ母が出て來て、
「宇津さんは佐賀の方にお出になるんだからよくお禮をお言ひなさい」と言ふから、私は默つておぢぎをした。すると母は、
「そしてお出立の日もきまつたんですか?」ときく、宇津さんは、
「え、明後日にし樣かと思ひます」と言ふ。
この二日位、私の心にはげしい感動をあたへた事はなかつた。學校に行つて居ても、私は始終胸が騷いで居た。獨りぼつちになつた樣な、何とも言ひ樣のない心細い、氣がして堪へられない。こんな事はこれまで感じた事のない事だつた。しかし何と思つても、遂々その日が來た。

宇津さんの荷物は車に積まれて、たくましい宇津さんは皆に、快よくあいさつをして、後も振り向かずに、さつさつと歩いて行つてしまつた。

宇津さんが居なくなると、私は泣きたくなつて來た。そして又誰れか友達が欲しい、友達がほしいと思つて日を暮して居た。その中に私は中學に入る事になつて、葛葉を去つた。

九

私の樣な心持で故鄕でない處を故鄕と思つて居る人も世の中には少なくはあるまい。——私は大人になつてから故鄕と言ふことを聞きあきる程聞いた。聞いたゞけではなく、幾度となく自分にも故鄕があるだらうかと思つて見た。その度に私は何處を指して自分の故鄕と云つたらいゝだろうと思つた。故鄕のないと言ふことは私にとつては悲しいことではないが、淋しいことだ。物足らぬ事だ。——けれども事實私には故鄕と指して言ふべき處は無い、私に取つては旅をして宿つて歩いたと言ふ樣な記憶より外に、一つも心を靜めて懷かしいと思ふ處はない。

それならば生れた處は?——と言はれるだらうが、それは人のより集つて雜踏して居る東京だ、と言つたらば大低の人はさうかとうなづかれるであらう。東京には、はしやいだ砂ぼこりと、騷がしいものゝ響と、急がしく往來する人の足音より外に靜かな安らかなものを思ひ出す事はむづかしい。

しかし故鄕の無いと言ふ事は私にとつては實に淋しい物足りない。さう思つて自分の半生を考へて行くと、私は必ずこの葛葉を思ひ出す。時の上から言つても、この葛葉に居た間は、わづかに四年だ。しかしそこに住んだ時に私は初めて、心の中でこゝに永い間住むのだと言ふ事を思つた。しかも、とりとまりのない、騷がしい自分の幼なかつた時の姿と、その同國の人とを思ふばかり。——たゞそれだけでも、私には生涯の中で一番なつかしいと思はれる處なのだ。

これが故鄕と言ふ可きものを持つて居ない、旅をして知らない處に泊つて歩るいて居る中に大きくなつた私の樣なものゝ思ひ出す故鄕だ。

(をはり)

勝公

田山花袋

「何うしたんです？」

何か事あり氣に、大工夫婦は語り合つて居るので、私は訊ねた。日光の大谷川に臨んだ一室、十日ほどの滯在に、種々の世話を爲て貰つたのは此の大工夫婦で、女房は快活な、勝氣な、話の上手な三十女、末の子を背に絡り付けて、洗濯もすれば庭の草取もするといふ働き者、私は退屈まぎれに、よく出懸けて行つては會話に耽つた。

「何アに、詰らねえ事ですア」と例の莞爾した顏で、大工は打消した。

「ほんに、馬鹿々々しい、一年も世話して、自分の娚だからッて、默つて伴れて行かれた日には堪りこはありやしない」

「勝公、弱つてるだらう」

「弱るの何んのて、お前さん、この盆だといふに……彼方此方を借り倒して、昨日預けた金を持つて、亭主の衣類までも引攫つて、トットと突走つて了つたんだから。此盆に、仕方が無いから、家を仕舞ふッていふ騒ぎさね……勝さん、男泣きに泣いてるたんべい」

「不運な男さア」

と大工は言つた。

「何うしたんです？」何か面白い話らしい。で私は再び問うた。

『何アに……』と　女房は私の方に顔を向けて、『旦那さん、知つてなさるてせう。その下の長屋……そら、此間、此處に來て居たあの女さ、旦那さん知りなさらんかなア、あれが前の亭主に伴れられて、昨日の三番て、默つて突走して了つたてすア』

『前の亭主？』

『太い女てさ、昨年の今頃前の亭主に捨てられやがつて、生れたばかしの子を抱へて、大師堂に轉り込んて、食ふや食はずて居たてさア。其時分の樣ッたらありヤしない。襤褸な單衣一枚着た切て、ヒー〱泣く子には衣服も着せられないて、女乞食だッて、もつと氣のきいた風を仕て居ますだア。それを勝さん、氣が好い人だて、氣の毒だッて言つて、その連の子ぐるみ、伴れて來て、嬶にしたてさア。女子は懶惰者て、亭主の留守には踏反かへつて晝寐をするか、長屋を廻つて、油を賣るかばかりして居て、仕方がねえ女だッたてさア』

『勝さんと言ふのは何を商賣に仕て居るんてす？』

『なアに、商賣ッてありヤしません。牛乳の配達やら、日雇取などをして居るてすア』と大工は傍から言つた。

『年齡は？』

『四十七八にもなんべいかナ』

と女房は亭主の顏を見つゝ言つた。

『前にも女房を持つたことがあるのかね？』

『二十三の時持つて、五年ほどして、子供も無くつて死んて了つたんてすと、それから昨年までは嬶と

言ふものは無かつたとから、淋しかつたんべい、その女子を婿に連れて來た時は、嬉しがつッて、それからはえらい挊人になつて、婿にちやほやして、他人の餓鬼を自分の子のやうにして可愛がつて、それァ眼に餘つて見て居られないやうな嗅孝行だッてね、長屋の神さん達が評判して居つたてさァ」

「女は若いのかね?」

「二十五六だんべい」

「別品かね?」

「別品どころかナ。旦那さん、知んなさらんかナ、此間、旦那さんが此處に來た時、其處んどこ(前の庭を頷て示して)に立つてたがナ。鼻のビッシャげた、眼のぎよろりした、反齒な、それァ私見たやうな不容量だか……ても、私よりは肥つて居るから、抱き心は好かんべいがナ」

「前の亭主と謂ふのは?」

「上州吉井ッていふ處に居る博奕打て、泣音とか言つて、少しは子分なども居るんだッて言ふ話てさァ……それかね、旦那さん……」と女房乘地になつて、「五日ばかり前だ。私、あの女と慈觀堂に行く約束を仕て置いたから、仕度をして下りて行くと、女め、若い男と話をして居る、辰さん行かねえか」と私が聲を懸けると、女ア、振返つて、私を見て、「お神さん急に用が出來て……」と言ふぢやないかね。用ッて何だ? 手を離されねいやうな用事はお前さんにはねい筈だと、構ふことは無い、つけ〳〵言つて遣つた。するとね、私の傍に來て、今、御飯を出さなくつてはならねえ客が來て手が明けられないと言ふから、お客は誰だえと聞いて遣つた。何だか、その若い男は胡散臭いと思つたてナ。すると、自分の兄弟分に當つて居るもので、本當に血を分けた間ではないが、一層義理が深い弟分だと言ふ事た。

丈の低い、靴を穿いた、成程博奕打の子分とでも言ひさうな若い男でしたよ。…………何でも、今考へると、その弟分といふ奴が來て、すつかり打合せをして行つたと見えるですよ』

『そして伴れて行く時には、何うして伴れて行つた？』

私は面白く思つたので、つい深入して訊ねた。

『まア、お聞きなさい……』と、女房は愈々圖に乘る。

『まア好いぢやねえか、そんな話、人の下らん話なんか何うでも……』と大工は既に二三度聞かせられて、耳にたこが入つてるので、それを打消さうとした。女房の話好きには平生から恐毛を振つて居るのである。

『それでもナ、折角話し懸けたて、………』

『そうとも、………それから？』

私は促した。

女房は亭主に止められて、少し氣が無くなつたといふ風であつたが、それでも私に促されて其話を續けた。『それからね、旦那さん、一昨日の事だッて、……前の、あの、足尾の銅を運ぶトロコが、あの長屋の八百屋の前で新しい行李を二個放り出して行つた。これア、誰のだんべい。誰かこんなものをあつらへたものがあるけえと謂つて、彼方此方聞いて見たが、誰も心當が無い、何うしたんだんべいと言つて居ると、あの女め、晝寐をして居たッけえ、大きなあくびをして出て來て、これは己んだ己んだなんて言つて、家内に持つて行つた相だが…… それにいろんな衣裳や何かを入れて、ちやんと手くばりをして、そして突走つたんだ』

『亭主は少しも知らなかつたのかね?』

『挊ぎに出て居る間に、すつかり企んだんだから、少しも知らねえてすア。昨日の晩など、いつもなく莞爾して、旨いお菜などを拵へて、酒を二合飲ませて、大變優しかつた相てねえ。そして明日、彼方此方に遣る盆禮の品物を買ひに行くつてね、二兩とか三兩とか亭主から受取つて、すつかり公然て準備をして行つたんだから、呆れた女だ』

『酷い奴だね』

『本當に、一年も嬶と餓鬼とを食はせて遣つて、其揚句に、金から衣類から持出されて、借金まで殘されて突走られてア堪らなかんべいよ。世の中がこれで好いだら、世の中は樂なものだナ、旦那さん』

と女房は笑つた。

『晝間大きい包を持つて出懸けるのを、長屋の者は氣が附かなかつたのかね』

『その‥‥前の亭主の泣音が來て、三十分位前に荷物を運んで置いて、そして一人て出懸けたんだから解らなかんべい。その長屋の隣の人力車夫が、停車場に挊ぎに出てると、勝さんの神さん、いヤに奇麗に粧つて、頭をぴんと結つて、見知らぬ男に伴れられて、汽車に乘つて行くから吃驚して見て居た相ですがね、其子を前の亭主が抱いて、ほい〱などゝあやして居ると、小供は躍上つて聲を立てゝ笑ふ。其前に、神さん取濟して嬉しさうにして乘つて居た。其れを見て來て、車屋の爺、『勝さん、神さんに逃げられて、困るだんべい、又泣ごとだんべい』と言つて居たので、大騷ぎになつて、勝公の挊いて居る處に人を遣る、勝公吃驚して歸つて來て見ると、家が空虛となつて居て、鍋釜の他何にも無いっ。勝公怒つたり泣たりした相だが、後の祭で、仕方が無い。‥‥‥先程來ましたッけがね、『今年ア、好いお盆を

べいと思つて居たゞに、嬶に逃られて、家をたゝまなけりやなんねえ』ッて、滴し切つて居りましたッけえ。勝公のことだから、昨夜は泣いたんべい……と思ふと、欺騙したあの女が憎いですよ。』

『昨夜、勝公、自暴氣味て、上の居酒屋へ行つて飲んで居たが、『嬶と子供は自分のもんで無えから仕方がねいが、兎に角自分の衣服も持つて行かれた』といふので、夜遲く泥醉つて交番に行つた。交番では、もう寢て居て、中々起きんので、戸を破れるほど叩いたさうだ。』

と大工は傍から言ひ足した。



日の翼

三木露風

日の翼、海をおほひて
その光あふれわたりぬ。

かゝるとき空いろの花
うるほひてつとこそひらけ。

磯邊なる草をはぐくむ
おほいなる天のちからよ。

おほいなる天のちからは
はてしなく朝を領す。

また彼方走れる舟は
力ある帆をばあげたり。

いづくにか、あはれ帆章
かくるゝや、青潮の上。

その舟の影を慕ひて
我胸ぞすゞろぎわたれ。

靜けさや、聲もあらざる
遠方の波のかゞやき。

見るものゝこのとほとさに
あゝ涙ながるゝものか。

日の翼、海をおほひて
その光あふれわたりぬ。

扇

吉野臥城

　都の人
背の草籠白百合匂ふ、
にほふ姿は百合よりも。
　野の女
野良に咲く花色よいけれど、

さまの言葉にや及びやせぬ。

　　都の人

美しい花、情の露に
濡れて靡くよ、微笑添へて。

　　野の女

露の情のない里とても、
月の夜鴉にや夜は明けぬ。

　　都の人

さまは野の川の青澤潟よ、
風がさそへば首を振る。

　　野の女

わしが心は端山の薄、
風に吹かれて月招く。

　　都の人

そつと汲みとる野中の清水、
寫すは百合の花ばかり。

　　野の女

裏も表もない涼しさや、
いつも扇の風がよい。

青葉の下

細越夏村

袈裟を掛け、
掌合はせ、
眼を伏せて、
默然と立ちます像よ、
　　石佛よ。

君と我と
今何の差ぞ何の異ぞ、
若き青葉の下にして
君も無心に我も亦、
我も無心に君の如。

石佛よ
君に涙は涸れたれど、
君に幽けき慈相あり、
あら我よ、
汝に血潮は冷えたれど
汝に微けき情あり。

石佛よ、
君は幾刧古りし人。
あら我よ、
汝は若うして老いしもの。

月光

前田夕暮

胸の戸をたゝくは誰ぞやうすあかり鐘鳴る空の靜けさに似て

月光にうたれて遠くかへり來る魂あれ今宵我が胸は鳴る

こほろぎや河ひとつ有る秋の夜の國しら〳〵と明有けそめぬ

父はあらず千鳥きく夜のそのかみの母が瞳に入りし灯かげよ

日の照れるあかるき街を君と行く別るゝ前の心地おぼえて

一樹(いちじゅ)立つ野を思へ君我れ待ちて我れ君待ちて倚りし榛の木

風空の濁れる色を見てや泣く國の果てなる別れにし子よ

對ひ居てそがひに泣けるおもかげの眼をこそよぎれ灯はさゆらぎぬ

墓は眼にうつれど遠し合歡の花うるほへる空此日我れ泣く

赤き日の下に國あり君住むと昨日の如く今日も思ひぬ

おもかげにたちては物のくま〴〵のおぼろになりて君は戀はるゝ

和歌　柴舟選

○　　　　　　猪狩水村

木草みな地にひれふしてしろがねの雨にうたるる日のやごとなき

夢のごと今の憂を語る日のありとし思ひ死を遠ざけぬ

天地のいづれのひまゆ生れにけむこひと云ふなるなつかしき影

○　　　　　　佐野翠坡

七色の羽たわたわにうちふりて花をいでたる胡蝶の童

わが思ふ神に似し子のおもかげも見えてにほへり雨のしろばら

罪(つみ)人ら石もちはこぶ夏の日の石原にさくひる顔の花

朝露やあけなる花は少女どもあひなくとしおしづくしてゐぬ

夏の夜や川べにてるおん人を百合と申すににくまれしかな

なんとなくうれしき日なり見もしらぬ市(まち)のわらべの名もとひて見ぬ

いくよろづ星の女神は黄金の燭してあらぬ夏の夜の森

うつくしき鳥とぶかたちむらさきの白きあやめの上に雨ふる

○　　　　　　淺野白汀

憂愁はわれにのこりぬたゞ一つ波がおきゆく貝がらに似て

しづやかに憂愁(うれひ)は走る夕凪のうみに浮べる帆のかたちして

わかれては胸に泌みけり相見たるそのときわかぬものゝひとつの

病み倦めるさびしきよひは死ぬる日のこと〳〵みえて涙ながれぬ

○　　　　　　渡邊甚之助

あな總身そがけがれたるよこしまの色あるを忌む神にわなゝく

燃ゆる火をなほ疑ふやよりて見よわが手をとら

ば君は焼けなむ

あたゝかに泣く子となりぬ僞りの君が冷めたきこゝろに慣れて

○ 河村胡秋

やすからぬ眼もてわれ見る君かとも巨木のかげの草の花見ぬ

夏のあめ白羅の人の白玉の琴彈くごとく石にふるかな

人おほくあざみがほしてわれを見るこゝちながらに君まちてけり

しづけさやきのふ植ゑたる白萩のうねりにそゝぐ初秋の雨

○ 梶原白花

秋は來ぬ楢の小林うづら小野風こそ渡れなみだながるゝ

秋ちかしわび居の人はいろ〳〵と花もつほどの草うゑにけり

草の香に似てなつかしうわが夢は月入る小野の家めぐるかな

草の家露の瓔珞まばゆくもひかるばかりの君をおくかな

かりなくや涙おさへてさびしらの毛の國原をみかへりし人

○ 高橋葦水

神の子等星をつなぎて大空を引くねすゞしきほとゝぎすかな

曉の鐘に眼覺めて今日もある我身の幸にひとりゑむかな

日の光り透らぬ森の大池の冷めたきに咲くしろき花かな

○ 小川眞淸

歸り來しつばくら見れば何となうたより待ちゑしこゝちするかな

君とすみて蠶かひつゝあらむ日のたのしさ思ひ桑うゑてゐぬ

わが思み胸の家にかへるごと燕は古き巣を戀ひて來ぬ

うつくしう百合の香うかべ夕霧は十歩の前の君つゝみけり

○ 上村萩江

意氣の子が世のたゝかひに鬨あげて立てるすがたと見る朝の森

あきは來ぬうすれ日洩るゝ桐の葉を黄色にかへす風に吹かれて

○ 小林狂霞

ほとゝぎす盧橘かをる朝の戸にくろ髮を解くきみになくかな

かたくなの女惡くみてあらむ日の心たかまる山の家かな

○ 鏡ヶ浦人

花ちるやゆふべ〳〵はものみなをうるみ目に見る人をこそ思へ

○ 塚田据水

眞帆かぞへ沖にかぎろふ日をいたみ石と動かぬ悲しき人よ

○ 都成牧郎

君見れば瞳を通し胸の扉に忘られがたきものきざまるゝ

○ 金城醉竹

さら〳〵と瀨の音きこえ竹多き川沿の家の灯かげすゞしも

○ 田園主人

爭ひてゑみをば奪ひ涙のみわれに與ふる百人の友



露

露厭ふ褄高々と戀ごろも　へき生
白露や西瓜畑の狐罠　同
灯ともせば草皆露の光り哉　同
白露や一燈ゆるぐ杜の中　同
合歡の露墓の灯籠を撲ちにけり　同
橋涼し露を拂ふて欄による　同
小狐の嫁入る宵や草の露　同
一つ飛ぶ秋の螢や草のつゆ　同
露に咲く花みな嬉し藥畑　同
殘月や夜舟に坐して眉の露　同
白露や絲瓜に映る隣の灯　同
清愁に堪へず燭して露を見る　同
露白き何やら花や星明り　同
水草や露を集めて花白し　同

場の露芭蕉の月に人もなし　同
汽車下りて歸る小路や草の露　桃村居
温室の中の茂みや窓の露　呉竹
濡れてちる行燈の輪や露時雨　草童
露の道紅緒の草履濡らしけり　鐵伯
朝市や殘る小瓜の露涼し　桂川
芋の葉の露なづかしき歸省かな　螢雪
露時雨熊笹茂る山路かな　鶯谷
よべ上げし花火の跡や露の草　濛雨
白露や咲く緋萩の紫に　三好
朝露や莚着せたる芋車　華外
白露の草野に牛の三五かな　天香
山近き塚ある原や草の露　巳水
朝風や樹下石上の露時雨　刀川
蟻の引く蟬の片羽や庭の露　圭村
朝つゆの野守が庭や紅の花　金襖子
朝露や葬を見に隣の子　碧潭
雨側のさゝげ畑や露の道　泡石
露に濡れし袂のマチをくやみけり　魯斧
朝つゆや鷄頭あかき砂の庭　まさや
水車場の道幾うねり草の露　骨董

苅り乾して麻に露ある朝かな　沐雨
もくの巣に置く白露や檜葉の垣　蓼花
露に濡れて芙蓉の下や鷄あさる　白鳥
樹にためす樵者の斧や露時雨　同
藁草履社頭の砂の露を踏む　渭南
丈の杉尺の薄や露しぐれ　同
鐵亞鈴振ふ裸や庭の露　東風
寄宿舍の露の土俵に角力びけり　同
逃水は河原に盡きて草の露　總子
露置くや十坪の庭の秋草に　同
草の露木の露古るき石佛　朱郎
馬を見て嘶く馬や露の原　同
白露や箒木高き荒畑　青瓢
朝露や低き垣根に富士迫る　同
我畑の小菜嬉しさよ珠の露　青城
穗に出てし門田の稻や今朝の露　同
毛見衆の股立高し草の露　十湖
白露や閑居の庭の菊の花　同
有明や露の白萩花桔梗　鳴弦樓
白露やゆうべ散つたる桐の葉に　同
鳴子繩曳けば朝露こぼれけり　同

白露や石跳ぶ虫のひげの先　三千丈
昔男頬かむりして露の宿　同
蓑虫の蓑に消えけり朝の露　同
草の戸へ一徑露の野萩かな　鬼洗
カンテラの灯に照る露や市の草　同
刈り進む鎌の白刄や草の露　同
牛の子に露の軟草食ませけり　同
帆柱に露のしたゝる月夜かな　星象
灯して鞍置く馬や草のつゆ　同
振分けて肩の荷輕し草の露　同
朝露や二日干しする鯵莚　同
師の坊の露踏みおはす高き下駒　俯仰
鳥網を張つてひそむや草の露　同
傾きし軒の支木や草の露　同
朝の海見て露の道戻りけり　同
七堂の灯冷やかに露時雨　姑洗
痩馬の尻動くなり草の露　同
白露や屋根に石置く山の驛　同
磯草の露に朝日や船御ろし　同
子供抱いて女立ちけり草の露　同
露の等句秋風の歌など悲し　葦水

昔めく切火ゆかしや露の宿　同
晝くらく露降る森や善知鳥啼く　同
山門を入れば銀杏や露時雨　同
新藁の青さに置くやけさの露　同
草の露馬盗人を尋ねけり　小魚
杉菜生えて廢れし畑や晝の露　同
吟行の露ふみ砕く月下かな　同
草の露草鞋の紐のとけにけり　同
木つゝきにかつ散る露や蔦かづら　同
方丈の戸ぼそ洩る灯や竹の露　泊水
墓所の露灯をともし去る女かな　同
露の道與作と馬とお萬かな　同
屋根草の露に朝日の登りけり　同
松の露吹く風も無く明けにけり　同
草のつゆ木の露明くる山路哉　同
山の居を露にとざして下りけり　夜光
露見れば月見れば愚なるを知る　同
半むきの杉の丸太や草の露　同
露草にぬれて野馬のくさめ哉　同
白露に奈良は風無く明けにけり　同
鑛毒に打たざる畑や草の露　同

草高し羊追ひゆく鞭の露　洛燕居
夕露や草山越えて妹が許　同
朝露や十字架光る岡の家　同
長安の甍に露の朝日かな　同
露時雨風に伏す萩起しけり　同
白露や琵琶偷みきく籬の下　同
草刈るや露に冷えぬく臍の穴　石鐘
この石に慈悲水たまる夜露哉　同
神下の夜森静かに露ぞ降る　同
露光る平たき石や城の跡　同
朝つゆに尙鳴く蟲や麻の隈　同
笹垣の續く小坂や露時雨　同
朝露や日當れば反る板庇　同
草の露堀り獲し土器を拭ひけり　同
露に起きて毛見のお繩を張る日哉　同
黍畠の夜風に露のはらゝかな　同

募集課題　柿　九月十五日締切
　　　　　柚味噌　十月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事



避暑とは何ぞや

若逕生

避暑とは避暑のみ、讀んで字の如きのみ、金を爍かす三伏の暑熱、一杯の氷水の能く汗を鎭むるところにあらず、正な心にさてこそ淸風を趁うて遠く山花の黃なるを求め、波鷗の白きを尋ぬるのみ、避暑とは此の如きものとすれば、從つてその必要は平生切辛き生活をなし、猫額大の一小坪、それさへ心の儘ならず、露呼ぶ小草のよすがもなき薄給ものか、又は同じ樣なる下宿屋生活の學生等の上にこそ存すれ、都會の地如何に紅塵の巷なりとはいへ、樹影必ずしも空疎ならず、

清蔭必ずしも絶無ならず、斯ゝる風勝の區を壟斷する紳士紳商輩、即ち上流生活を營む徒輩に在つては、避暑の必要殆んどあるべからず、宏壯なる邸宅をば土一升金一升の中心に劃し、此處に一亭を起し彼處に一榭を安んじ、迂つては密樹に添え折れては清泉に臨む、開け放ちたる十疊又は十二疊の室々、簷鈴常に老檜の風に鳴り、萍花斷えず魚躍の波に漂ふ、盛夏何かあらん、盛晝何かあらん、從つて避暑の要も亦何處にか存せん、彼等にして熱海に行く、彼等にして中禪寺に行く、如何に千金の豪奢を競ふとも、能く黄金の魔力に全然一旅館を屈從せしめ、恰も自宅に在るが如く、襖々を撤し盡し、室々を聯ね盡して、東西南北四方の風を快受する譯には行かず、玉鱠を象箸に掛けんといふか、此處必ずしも彼處に劣らず、芳醇を銀杯に酌まんといふか、彼處必ずしも、此處に優らず、目的の他に潜むとせば兎も角、眞に避暑を志すとならば、何ぞ事々しく優れるを捨てゝ劣れるに就くの愚をなさんや、されど實際には然らず、南、鎌倉より熱海に至り、北日光より鹽原に趣く、夏時麕集する遊客の中には彼等の足跡最も繁く、至る處、黄金を誇耀して俗物の阿諛を買ひ、崇拜を求め廻るは何ぞや、予輩は知る、彼等の目的は避暑にあらざるなり、誠は避暑に托して自己の富を吹聽するなり、避暑を以て富の度のバローメターとも信じ、斯くせざれば名聞に障るが如く思ひ居るなり、此處に至つては吾人彼等の不敏に對して唯一種の苦笑なくんばあらず、而かもそれに止まり得ざる影響あるを如何せん、試みに綿衣にして孤笻を曳き、行いて何れかの旅館に投ぜよ、風勝に富める高樓は大抵彼等の占有に歸するか、然らざれば約束に歸し、更に然らざるも慾に目のなき旅店の主人はその占有、約束を豫期して容易に綿衣の人に許すを肯ぜざれば、已むなく心進まぬ陋室に不快なる夢を結ぶにも至るべし、待遇の如きは之に準じて知るべきのみ、夫れ學生一年の至樂は夏季休暇の七旬日にあらずや、平生圖書堆裡に在るの目を移して、青山綠水に慰まんとするものにあらずや、然かも旅行の快樂此の如くにして半を減ずとせば如

何、之れ猶ほ可なり、更に厭ふ可きは彼等の行く處風紀上に於ける一種のバチルスを伴ひ、一體の空氣を俗了するにあり、或は賤妾を携へ或は賤妓を携へ、絲竹管絃、狂歌亂舞の痴態を演ずる如きは往々にして見受くるところ、此の如きは心靜かに天地の幽玄に打たれ崇高に打たれて、優雅の情を養はんとするに累を與ふるのみならず、更に轉變し易き學生の心に一種の惡感化を及ぼすことなしとせず。夏季は旅行の期節にあらず、旅行は春と秋とを以て優れりとす、若し目的の避暑以外にあるものならば上流社會從來の風習を改めて之を夏期以外に試みては如何、若し又特更に炎熱燒くが如き盛夏を擇び、一種心身の修養を勉むといはゞ、之又可なり、須く草鞋脚絆に足を結び固めて千山萬岳を事ともせざる覺悟あるべし、然らずして敢て無意味に自らも苦み、他をも苦むるの陋をなすべからず、今や秋風至る、吾人は此言の明年迄記憶せられんことを望む。

首相の統監歡迎

野逸道人

八月十六日西園寺首相新橋藝者の尤物五六を引連れて、伊藤統監を大磯に迎ふ。蓋し日韓新協約を締結して歸國せる統監の勞を犒らはんが爲め也。由來統監美人を愛するを以て聞え、首相亦風流を好むを以て鳴る。今回の藝者同伴一件の如き、一は以て統監の心を喜ばし、一は以て首相の意を滿たさしむるに足るもの、所謂一擧兩得の事といはゞいふべし。都下の三面記者が筆を揃へて統監の艷福を羨み、首相の洒落を賞したるも亦故なきにあらじ。然れども吾人は之に對して些か不服なき能はず。統監や首相や。位、人臣の榮を極め、身、一國の重きに任じ、其一擧一動悉く天下の耳目を聚むるに足る。彼平常途に唾するも新聞紙之を喧傳して寒村僻邑の人猶之を知る。古へより高位の人、遑々として身を修め行を謹むに心を勞するもの寔に之が爲め也。況んや今回の事の如き、之を迎ふるは天下の政治を預る首相にして、迎へらるゝは日韓事件を落着せしめて歸國せる統監也。世間の人飛耳長目殆んど全身の注意を擧げて二人者の上に注ぐ固より理の當然也。愼みに愼みを加ふべきは正しくかゝる時にあらずや。然るに首相は白晝公然藝者を引連れて、却て其機智を誇るの色あり、統監亦笑て之を受けて甚だ其多福を喜ぶの風あり、而して三面子亦之を讃嘆するに至ては、天下好色の徒は固より、青年唯功名を喜ぶの輩も不知不識の間之が惡感化を蒙るべきを思ふ。若し辯を好

む者をして之を解せしむれば必ずやいはん、今回の舉の如き一私人西園寺公望が一私人伊藤博文を迎へたるのみ。何ぞ公人としての彼等を累するに足らんと。然れども吾人を以て見れば首相と統監の如き國家の重任を負へる公的生涯を經來りたる人、且つ現に之を送りつゝある人には最早や一私人的資格なしといふも不可なし。若しありとするも一私人的資格なるもの亦固より道德と風俗とを輕視するを是認するものにあらざるをや。かくいへば首相の今回の舉は如何にも大いなる罪惡の如く聞ゆべけれど、決して左樣の意味にはあらず。高きにあつて叫べば聲即ち遠きに達するが如く、高位高官の人の行爲は下民之に倣ふ事甚だ速かに、さらでだも驕奢浮華を喜ぶ一代の風潮を助長するが如きことあるべきを憂ひて之を言ふのみ。吾輩は初めより藝者なるものを卑しむの念なし。從つて時あつて之を宴席に侍せしむるを以て不可なりとせず。然れども萬人の環視中に立て首相と統監とが相會せんとするに當て果して藝者を引連るゝの要ありや否や吾輩甚だ惑ふ、殊に首相の下にある文部の大官等頻りに學生を戒めて藝者に近くを禁し、新聞の記者先生又藝者に加ふるに醜業婦の名を以てしながら、堂々たる政治家之を引連るれば却て韻事と稱し風流と名つく。而して世人亦之について格別怪訝の念を起さゞるが如し。是れ天下最も驚くべきの矛盾也。若し眞に此矛盾を正さんと欲すれば、詳かに藝者の性質を論じて、明かに之を道德の標準に照らすの要あるべければ、今茲には之を言はず。只吾人は心中何となく今回の舉を以て首相と統監との人格と地位とを傷けたる——少くとも卑しう（デグラデード）したるが如き惑を禁ずる能はず。吾人は固より今日の老政治家に望むにグラッドストンの如き天下の儀表的人物を以てするの酷なるを知る。而かも英國現首相さへクローマー卿を埃及より迎ふるに當て我西園寺首相とは遙かに其趣を異にしたるべきを思ふ。我政治家の道德的觀念の甚だ高からざるを憶へば漫ろに浩嘆せざる能はざる也。

○幸田露伴氏が甞て「一國の首都」と云ふ文を書いて東京市の改善を論じた事があるが、其後餘り世間の注目を惹く樣な大論文も出ない樣だ。

○吾輩も東京市民の一人として成るべく東京市の改善せられて其恩惠に與らんことを願ふ者であるが、今は別にどうせう、かうせうと云ふ大々的提案は持て居らぬ。依て此欄の餘白埋めに只一二の小希望を述べるに止める。

○甞て「議會」に提出された事であるが市內郵便物の遞送配達に電車を利用する事は市民の大なる利益であらう。其組織に就ては當局者に一日の長あることであるから委しくいはぬが、大きな電車停留場に各區の郵便函を掛けて、發信者は其手紙を受信者の住する區名の函に入れ、其區行きの電車が卅分毎に之を運んで行くと云ふ樣の事にでもしたら、今迄四時間もかゝつたものが、一時間半位で優に配達さるゝ事になるだらう。人を轢き殺す役目許りを電車にさせるのも能ではあるまいテ。

○今日の自働電話と呼出し電話の兩制度を合一して之を擴張して、何人も自由自在に且つ廉價に電話の恩惠に與かる樣な事にしたいものだ。これについては吾輩にも少し考案があるから其中具體的に發表する事があるだらう。

○不忍池畔に一週一度イリユーミネーションを點けて貰ひたい。あーいふ美觀でも時々見せて與れなければ、雨降れば泥、風吹けば塵の都の有難味は薄い。(校正小僧)



可笑味のなき文學

光風子

世紀末と云ひデカダンといふは今日の流行語なり。その意吾が末世澆季に似たり。蓋し何れの世か末世澆季ならざらん。何れの世かデカダンならざらん。然れども所謂世紀末はさらに甚深の意を有す。今日は懐疑の世なり。思想混亂の時なり。人心萎靡の時代なり。歐洲の事物思想は直ちに吾が社會に反影す。則ち斯くの如きは歐洲思想界の状態にして、同時に吾が日本の状態なりとす。

かくの如き社會に於ける文藝は、また當然かくの如き色彩を有す。吾人は露西亞文學の痛烈なるを知る。那威文學の沈痛なるを知る。而して吾が思想界もまた歐大陸のそれと等しき煩悶疑惑のうちにあるものか、露西亞文學と那威文學とは、尤も現時の文壇に好遇せらる。同時にその影響もまた著大なるものあるべし。若し現時流行の小説を見れば、その痕跡は比々指摘し得べし。たとへば世上より自然派と稱する名目の下に概括されたる一派の作品の如き、その尤も甚しきものなりと雖も、此の趨勢は自から至る處に顯れて、凡ての小説に認めらるべし。斯くの如きは時勢の然らしむる處、實に已むを得ざる事なりとす。

余はイブセンを知らず、ゴルキーを知らず、所謂象徴派なるものを知らず、然れども余の讀過せる限りに就て言へば、余はその作中一點餘裕のなきに注意せざるを得ず。啻に此れ等歐洲の文學に於てのみならず、吾が所謂自然派なる一派の作品に就て見るも、同樣の感なくばあらず。余はこゝに題して可笑味と言へり、則ち英語の所謂ユーモアなりと雖も、さらに此れを廣

義に用ゐて、余が上記外國文學に認め得ざりし、作家心理の餘裕の意にも及ぼさんと欲するなり。

歐洲文學の事は今言はず、單に此れを吾が現時流行の小説に就て見るに作中殆んど一つの餘裕なく、作家は張膽瞑目して、切りにその主張する處、思索する處を述ぶるに急かしく、爲めに却つて作家のその述べんと欲する處、語らんと欲する處の、讀者に通ぜざるが如き感なくばあらず。從つてその小説は自然を寫すと稱しながら、少しも事物の眞を傳へず、實際を書くと稱しながら、さらにその實を示さずして、而も極めて面白味なきものとなり了す。面白味なき小説は眞に變態なり、小説果してかくの如くなるべきか、余は頗る疑念なき能はじ。

素より何れの小説にも可笑味を加へよとは無理なる注文なり。不合理なる注文なり。たとへば風葉氏の「青春」や「天才」に滑稽を加へよとは馬鹿々々しき要求なり。余はかくの如き不合理を言はんと欲するものにあらず。然りと雖も所謂自然派なるものが取る如き態度、則ち自然を其のまゝに見るといふ主張の下になる劃切なるその作品に於て、ユーモア若くは作者の思想に於ける餘裕なるものならば、讀者は決してこれを讀むに堪えざるべし。かく言はゞ或はこれを嘲笑して言ふものあらん。可笑味と劃切の思想とは、能くその途を一にするを得んや。一事一物の觀察の上に此の兩者を併せ顯はすを得んや。ユーモアの作家はユーモアを以て、千態萬象を見るべし。眞面目の作家は眞面目を以て見るべし。兩者各その途を異にすと。余も亦然か信ぜり。兩者は素より別途に出づべしと雖も、ユーモアの作家にも極めて眞面目の思索はなかるべからず、等しく眞面目の作家にもユーモアの趣味は必らずなかるべからず。これを具體的に作品に示すと否とは別個の問題なり。只その心懸は缺くべからず。ユーモアの作家に眞面目の思索なきか、その作は下劣見るにたえざるべく、眞面目の作にユーモアなきか、讀者の頭腦は疲憊す。かくの如く考へ來らば、今日の面白味なき作品に於て、吾人は些か嫌焉たらざるものあり。この

故を以て余は些か此處に眞面目と可笑味との一致を言はんと欲すのみ。

吾が在來の演劇を見るに、所謂愁嘆の幕の間には、必らず滑稽の幕を挿む。則ち終始涙を以て觀客を苦むるの自他に不利なるものあればならん。涙の幕のみを以て一貫したらんには觀客の頭腦は徒らに疲勞し、同時にその悲歎の演技をよく感銘するの力を失はしむるの恐れあればなり。謠曲に於ても然り、一番の能の後には必らず狂言あり。これ亦頭腦を緩和するものに外ならず。これを沙翁の作に見るも、ハムレットや、キング、リアの如き、狂的痛烈なる作のうちにも、必らず一種の滑稽の必らず演ぜらるゝを見る。よしその滑稽たるや、悲劇的人物の言行にも增して痛烈深刻なる言語擧動になりて顯はるゝものなりと雖も、而も亦徹頭徹尾滑稽は滑稽にして、自から讀者若くは觀者の頭腦はこれに依りて緩和せらるゝを得べし。ゲーテのフアウストは尤も深奥なる一大悲劇なり、而もなほ二三滑稽的可笑しき味の幕のその中に介立するを見るなり。斯くの如きは一つに只悲痛をのみ觀者の前に呈するの不利なるを示すものにして、その自覺してと否とを問はず、自然がかくの如くならしめしなり。

論者なほ或は言はん、そは過去の事に屬す、今日は演劇に於ても小說に於ても、かくの如く悲喜相交ふるの要なし。小說も演劇も今や只娛樂の具にあらず、むしろ世態人心の如何を一場の舞臺一篇の作品に示して、觀者に敎ふる處あらんとするものなり。その面白きと面白からざると、觀者若くは讀者の頭腦を苦しむると苦しめざるとは共に問ふ處にあらずと。論者のいふ處それ或は然らん。然れども實際の人生はしかく眞面目なるものか、しかく究屈なるものか、しかく面白味なきものか、吾人は實世間に於て多大の面白味を感じ、可笑味を覺ゆ。而も却て眞實寫生を主としたる小說に於て此の實世間より感受し得べき面白味を得ざるなり。小說の眞實はこれを了す。而も世間には面白味ありて小說にこれを求むべからずとは、やゝ異常の事實ならずや。余は未だ現代を以てかくの如き世紀末なり

としデカダンなりとするの勇氣なし。試みに見よ、世にはしかく眞面目なる事實のみにして、果してその眞面目なるが中に一條の可笑味はなきか。さらに進んで言はんに一事一物を眞實に剴切に觀察する時、こゝに觀者の心裡に可笑味は起らざるか。余は沙翁のミッド、サンマー、ナイツ、ドリームを讀みて、殆んど抱腹絶倒すべき可笑味を覺えたり。然れども同時に人生に對する深嚴幽遠なる觀念を抱かざるを得ざりき。眞面目なる内に可笑味あり、可笑味のうちに眞面目あり、作家はその種の如何を問はず、此の兩側面を有せざるべからずといふは則ち此の點にあり、蓋し眞面目と可笑味とは一物の兩側面ならんか。Du Sublime au ridicule, il n'y a qu'un pas 崇高と滑稽とは相去る事一歩のみ。余は兩者の別物たるを信ぜず。モーパッサンは深刻皮肉なる女性の觀察者なり、然れどもその可笑味は筆端より迸りて、その作品を一貫す。一葉女史は吾が尤も沈痛なる作家の一なり。然れどもその可笑味はなほ折に觸れて隱見せり、其たけくたらへの如きは、此の兩面を代表せる適例といふべし。

世間にはミサンスロープなるものあり、博く人を愛するフイランスロープに對して、これは人を惡むものなり。然れどもミサンスロープが極力愛護するもの一人あり。則ち自己なり。かれは自己を愛する度に過ぎたり。故に他を厭ひ且つ惡む。世を悲觀するものは、多くはあまりに自己を愛するに過ぎたればなり。然れども若し厭世家が眞に世を嘲り世を笑はんと欲せば、先づ自己を惡み自己を嘲らざるべからず。厭世家は世を厭ふに先き立ちて、先づ己を厭はざるべからず。厭世家にして一度び己を省れば、こゝに始めて眞實の皮肉も起るべく、嘲笑も出づべく、而して可笑味をも生ずべきなり。古の可笑味は外形の可笑味にて可なり。末世デカダンの可笑味は心裡の可笑味ならざるべからず。吾が德川文學は可笑味に富めり。三馬一九はその尤もなるものなりと雖も、なほ蜀山人あり平賀源内あり。さらに此の時代の一大文藝たる俳諧は殆んど可笑味の文學とも言ふべきなり。歷史の上に德川文學を有

する明治の文學は、果して此の可笑味を有せざるか、傳統は絶ゆるものにあらず。明治の可笑味は内觀反省より來る。明治のユーモリストは眞實の厭世家の如く己を省み己を笑へり。己を省みたるが故に、世態の眞を見るを得たり。むしろよく世態を見たるの結果は、己に返り己を嘲り、こゝに世態と己とに可笑味を見たり。こゝに云ふユーモリストとはかりに故齋藤綠雨氏と今の夏目漱石氏とを指す。兩氏は共にユーモリストにあらざるべし。然れどもその一面に於てユーモリストの趣あるを以て、かりに兩氏を例としたるのみ。綠雨氏に就ては暫らく言はず、夏目氏に至つては氏の猫そのものがユーモアたるのみならず、猫をして徹頭徹尾自己を笑はしめたり。

ユーモリストの事は自から別問題なり。余は只ユーモリストならざる眞面目の作家もユーモアの心なかるべからずと爲すなり。蓋しその觀察にして眞實ならば、自から可笑味の趣は解せらるべく、その趣はよし筆端に顯れざるにせよ紙背にかくれ、作家の心裡にかくれて、その結果は作品に餘裕を與へ、同時に讀者に面白味を與ふべきなり。

余は在來の小說家諸氏の作に對しかくの如き注文を爲すものにあらず、諸氏の社會と人生とに對する態度は自から異れるものあるのみならず、諸氏の作品には余の所謂餘裕なるものあり、讀者の頭腦を苦しむる事なければなり。然れども新進の諸家、自然派と稱する諸氏の、人生と世間とに對する對度並にその觀察に至りては然らず、所謂寫實と號して、事實をその實際に見るがまゝに寫すといふに關はらず、甚だ可笑味を缺き、面白味を缺き、而してその作品に餘裕の見るべきものなきを以ての故にしかいふなり。蓋しかくの如きはその標榜する寫實なるものが、眞實の寫實にあらず、寫生なるものが眞實の寫生にあらざるがためならずとせんや。自然派の作と稱するものは、却りて不知不覺の間に、小主觀を建て而も理想を畫く能はず、實際を寫さんと欲して寫眞となる能はず、その作は究局極めて拙なる寫眞に加ふるに極めて小なる主觀を以てした

るものとなり了したるにあらざるか。

素より社會の狀態極めて不穩にして、少しも靜平の趣なく、生活の問題また强大なるに當りては、これが壓迫甚しくして遂に可笑味を感ずるの餘地なき事あるべし。西歐の社會狀態の如き或は然らんか。所謂戰鬪的の文學ならんには或は只痛烈剴切一のユーモアなき作例は多かるべし。然りと雖も吾が社會は平穩の狀態にあり、少くとも西歐に今日稱へらるゝが如き社會問題は、吾が思想界を煩はすに足らざるなり。吾が社會は西歐に所謂デカダンと同じ意味を以て目すべからず。末世澆季を以て目すべからず。吾が社會はむしろ活動的新日本の啓行として、希望ある時に際せり。生活の問題も社會の問題もはた思想界の狀態も、決して歐洲のそれ等とは趣を異にす。而も吾が一派の文學がかの思想の傾向を追ふが如きは、その文學の眞意を覺る能はずして、徒らにかの思想の直譯に拘泥するの故ならずや。此れを西歐思想界の不消化と目すべきか。

余はかく述べ來れりと雖も、敢て自然派の惡口を言はんと欲するものにあらず。むしろその功果を認むるものなり。只それこの可笑味を解せず、餘裕を有せず、徒らに讀者を苦むるの故を以て、たまたまその病所を察して此の一事を指摘したるのみ。

秋の蚊の泣く／＼雨に出てゝ行く　露月

晝燭す羅漢の軸や秋の雨　虚子

底見ゆる一枚岩や秋の水　漱石



我輩も猫である（七）

白也

我輩も少々酔つたやうてある、口が輕くなるに從つて、頭が段々重くなつて來た、何んだか頭痛がするやうだ、香だけて酩酊することは我ながら不調法の至りだ、到底桂月先生からうい奴ぢやと、御言葉が下りさうもない、情なく思ふが致し方もない、李白一斗詩百篇と聞いたが驚いた男だ、エナージーの盛な奴があればあるものだ、百篇の詩と云つては口にしてたゞ百篇だが、浄書するばかりても容易ではない、況んや製造するに於てをやだ、尤も酔つ拂つて來ると長いものが好きになるものと見えて、苦沙彌君も酔つては、世界て一番長い字は Archaiomelesidonophrunicherata だなどと、桂月先生の名さへ知らんやうな、殆んど愍然にだも價せぬ、無責任極まる、不量見極まる、向ふ見ず極まる、おまけに亂暴極まる、劇烈なる慘酷なる遺憾なき暗迂な愚妻を捕ひて、たあいもない事を云ひ出した、但し先輩は此時の苦沙彌君を、酔つたとは認めなかつたらしい、そして「他人なら酒の上て云ふ可き事を、正氣て云つて居る所が、頗る奇觀である」と云つて居る、然し平然の倍量も飲んで、而かも顔が燒火箸のやうにほてつて、苦しさうだとあると、我輩には矢張酔つたとしか思はれない、

人事てはない、今は我身の上にぞありける、苦沙彌君の如何より、我輩こそ少々酔つて參つたと見ゆる、酒と云ふものは必ずしも飲まんでも、酔うものである、顔見たばかりて氣が濟むならば、酒飲や樽見て酔ふだらうと云ふやうな、暗に酒は飲んて始めて、酔ふ可きものゝやうに云つた人物もあるが、一般に適應せらる

丶規則も、例外に追應用する事は出來ぬ、例外としては、腹が減つてもひもじくないと云ふ者さへある、千松は此際逃してはならぬ證人である、
扨て醉つたと悟つて、自首して出た曉には、敢て高く止まつて紅鹿君の管を笑つては居られない、我蠻と雖ども義理と交際の何たるものである乎位は存じて居る、紅鹿君の管と我蠻の管と、斯う醉つて見ると元より甲乙はない、唯人猫の差あるのみだ、我蠻の管のみ吹聽するのは、紅鹿君に對して義理が惡い、失禮である、第一不公平である、依つて紅鹿君のものせる管の一般をも、紹介する事にしやう、紅鹿君は今や一升の酒を浴びて、光る源氏の御君には、赤らかに燒け光る金甕のやうになり給はせて、獨り擅まゝに氣を吐いて居たが、軈て卷き出した管は斯うである、
「面白くもない、なあ君!!」
と金甕の御君御言葉が荒い、
「誰だ男子の首にタガをはめて、女子の振袖をかつぱらつた者は」
と醉顏朦朧としちりん越しに主人の顏をねめつけた、ぐたりとなると、
「犬に首タガあり焉、ハヽヽ、小供の腰に迷見札ありだ、男子の首タガ猶……ヒッ、獨ヒッ、恕す可しヒッ」
千兩役者飛んだ處て昵逆が出て來た、
「女子のヒッ、こりや不可ん、ヒッ……ウ不可ん、女子の袖口に巾着のヒッ、……情けないぞ君、藥はないかヒッ、巾着の口を着けるに至つてヒッ、駄目だよヒッ、水ッ、お多角水をヒッ、」
先生涙をこぼしながら、一と口水をすゝると
「沙汰の限りだ!!」
「何が沙汰の限りだ」と主人が反問する、
「行燈袴にも同意する、束髮にも贊成する、テニスにもダンスにも、將た又ボートにも左袒するとして見てもだね、袖無し衣物は姬樣らしくない、沙汰の限りだと云ふのだ、
一つは見なれぬからでもあらう、九段の銅像の眉毛の、庇になる程飛び出してゐるのも、見馴れて見ると別

段に不思議でもないから、巾着のやうな袖口も見馴れたら異狀もなからうけれど、見馴れるまでの辛棒が出來ない、其處で僕はこの間、去る新案博士の門をたゝいたね、大に其新案博士の新案になる、世の所謂改良服、鐵花氏の所謂法衣に似てヒダが見えず……腰より半身に絡へるもの出女の媚しきにあらず、緋の袴の氣高きにあらず、說をなすものあり、ソレ仕切のない股引か……露西亞の淫賣婦の風俗に似た（舞の袖）……服裝に就て高說を拜聽した、成程それは聞いて見ると有難い事もあるが、餘り高說がはずんだから、鳥渡質問をして見たよ、

先生とな、上野の西鄕翁の銅像を見ますするに……と慇懃に、あの單衣物には縫目がありません處を以て愚考致しまするに、明治初年の單衣は縫目が無かつたものかのやうに心得ます……」

「愚考に相違ない」と主人が呆れ返る、

「話の腰を折つちや不可ん、」

就きましては、世が末になるにつれて、縫目なども多くならうかのやうに、相考へます、」

「相考へますもないものだ」

「默つて居れと云ふによ、其處でな、

依つて先生には、この末世を濟度遊ばす御考で、縫目なし改良服と云ふのを御工風遊ばしましては、如何で御座りましようか、やつがれ不省ては御座りまするけれども、口上云ひ廣告隊の一人とも相成りまして、及ばずながら御盡力仕りたく相考へまするて……とな」

「實際そんな馬鹿を云つたのか」

「勿論さ、いや、それよりは未だ珍談がある、例の理科を出た山下な、あれがこの間新妻を迎へた」

「然うださうだね、戀女房とかて非常な御自慢ださうだね」

「自慢に價す可き代物だか奈何だか、添ふて十日や十五日て、ほんとの相場が解るものか」

「僕は未だ、實は新聞の花聟花嫁て見たばかりで、逢つた事はないが、才色兼備ださうて、何とか女學校の優

等卒業生て、大變な學者ださうぢやないか」

「とまア亭主も當人も思つて居るらしいね、依て乃公、恰も縫目なし改良服の戻り道、少々回り道てはあつたけれど、好奇の念むら〳〵と起つたから、一番驚かしてやらうと思つて、直ちに駒の頭を立て直して、御出馬に及んて試驗をして吳れた、」

「何の試驗だ、國語の力ても試めしたか」

「そんな月並な事をするものか、國語漢文地理歷史、博物算術の類まて一度に試驗しやうと云ふのだ、我乍ら奇問と感心した」

「お笑草ても殘して來やしないか、當節の女は惡口と隱口が達者だぜ」

「大丈夫金の脇差、鐵の茶碗だ、安心しろ、第一問はな。い、い、目カチが千人寄つたら目球が幾個ある……と云ふのだ」

「成程新機軸だ」と主人も堪りかねて吹き出す。

「新機軸だらう、するとね、五百だらうは無學だね、第二問はな、

七福神の睾丸は總計て何個あるかてんだ、」

「睾丸の數なんぞ女の前て聞く奴があるものか」

「何の差支があるものかな、するとほゝゝゝと笑つて、解りませんだとさ、解らんと云ふ法があるか君」

「そんな亂暴な試驗をされては、堪るまい、それて試驗は畢りか」

「未だある、第三問だ

梅の木の枝に雀が三匹止まつて居たのを、其内の一匹を鐵砲て打ち落したら、後に何匹止まつて居るかと云ふのだ、」

「愈々出てゝ愈々馬鹿々々しい」

「處がだ、女甚々しく澄してね、二匹ぢやありませんかと、さも得意さうに、然かも輕蔑の口調と態度と所作と樣子と眼つきと顏色と……」

「馬鹿に念が入つてるな」

「入念にも入念にも、他所行きの念入て濟したものさ、だから僕が一本やつて吳れた」

「何と!」

「二匹殘るのですかと念を押すとね、解り切つてるぢやありませんかと云ふからな、これは奇妙な事だ、一匹鐵砲で打ち落されても、平氣で其枝に殘つてるやうな、圖迂々々しい雀が居ますかしら……とな」

「人の惡い事をする男だね」と主人も流石に驚いたらしい、紐鹿君は平然として、

「なァに君、學問も蜂の頭もあるものか、我輩三ッの問題に對して、一として正當な答案を作り得んぢやないか、コンモンセンスに全く缺けて居る馬鹿ものだ」

と盛に毒氣を吐いた、主人は少々其毒に當てられたらしい、向ふを向いて大きな欠伸をする、我輩も亦少々毒に當つたと見えて、大に氣分が惡くなつた、氣がクサ〳〵する、失禮して散歩でもして見やうと思つたから、ぶら〳〵と戶外に出た、

裏の方に墓地があるから、先輩の眞似をして蜻蛉狩や蝶々狩でもして見やうか、兎に角逍遙を試みやう、來て見ると葬式があると見えて、お寺は一ぱいの人である、お寺の庭をこぼれた人足共が墓地にまで流れ込んで居る、一番大きな石塔の上に飛び上つて、四方の光景を見物して居ると、向ふの隅の方に五六人集つて、蹲つて何か仕て居る、時々チャラ〳〵と云ふ錢の音もする、何だらうと思つて、ピョン〳〵と石塔を傳はつて來て見ると、小さな白い四角なものに、ポッ〳〵と黑い星のあるものを、茶碗でふせては引ばいて、お鳥目の取り遣りをして居る、何と云ふ遊戲か初めて見たので名も知らぬ遊びである、我輩の眼からは餘り面白さうにも見えぬけれど、やつて居る人は何れも熱心で、中にも先程から大分取られた一人の如きは、顏の色まで替えて居た、其內葬式も濟んだと見えて、お寺は潮の退くやうに、見る〳〵淋しくなつて來た、

之れより先き、未だ我輩が最初の一番大きな石塔の上から、四方の光景を見て居た時、お寺の庭の眞中に、紅白の幅の綱をかけた、大きな鳥籠を持つて來て、其口を明けて四五十羽の雀を放つたのを見た、今や其雀共は、玆に我輩のあるのを知つてか知らんでか、彼處に一團、此處に一團、或は低き小枝に、或は石塔に、

或は地に下りて餌をあさつて、チユウ〳〵と囀き合つて居る、見ると腰が抜けてゞも居るらしく、餘りよく飛べない、二三尺、四五尺、稀れに一丈も飛ぶと、さも疲れたらしく、落ちるやうに下りて了ふ、何の爲めにこんな飛び得ない鳥を、放したのであるか、大に其意を得ない、折角放した處で直ぐ何物にか捕れて了ふではないか、放鳥と云ふ事は、物の生命を助けると云ふ、大なる善事として行はるゝのであらうけれど、放した爲めに何物にか捕られて、生命を奪はるゝやうであつては、反つて放たずして養つた方が、遙かに善にして且つ慈悲である、人間の天性か愚なる爲めに、斯る淺墓な事をするのか、或は儀式が人間をして、斯る愚なる行動を敢てせしむるのであるかは、疑問であるけれども、何れにしても餘り感服した行動ではない、一體人間と云ふものは、甚だしく利己主義なものである、甚だしく自惚なものである、誰に相談もなく、萬物の靈だのなんのと、勝手放題に定めて了つて、獨りよがりをして居る、犬も猫も鳥も蟲も、皆人間の爲めに作られたものと信じて居る、何の説明も證據もなく暗雲に信じて居る、斯る信仰を迷信と云ふのである、何人と雖ども、犬の爲めに猫が作られたか、猫の爲めに犬が作られたかを説明し得られるものはあるまい、果して然らば、人間の爲めに我輩等が作られたか、或は我輩等の爲めに人間が知られたか、知り得らる可き道理がない、若し人間が、人間の爲めに猫が出來たと知り得るものとすれば、我輩も亦猫の爲めに人間が作られたと云ひ得るのである、究竟するに、證據説明のない議論は、水掛論である、この水掛論を人間は信じて居るのである、人間はよくあやふやな信仰をして喜んで居る、總て疑問を起す事が出來て、然かも其疑問を打ち消す事の出來ぬ信仰は、不確實なものと云はねばならぬ、この不確實なものを、確實なものと信ずるのは、語弊があるかは知らんが、矢張り迷信である、この間も去る主人の知人が來て、頻りに神の存在を説いて居た、けれどもこれ等も亦、不確實たるを免れない、何となれば、神は存在するかも知らんが、或は存

在せぬかも知らんと云ふ疑問が、立派に起す事が出來て、而かも、存在の説明が不十分であると同様に、非存在の疑問を打消す事も亦十分には出來ぬのである、云ひ換れば、存在の説明が不十分である如くに、非存在の説明も不十分である、即ち存在すと斷言も出來ぬば、存在せずと斷言も出來ぬのである、これを存在すと信ずるのも不確實にして、存在せずと信ずるのも亦不確實である、我母は我輩を産んだと信じても、或は我輩を産んだのは、別にありはせぬかと云ふ疑ひを起す事が出來る、疑を起して研究した結果、我母は我輩が産れてから來た人であると云ふ事實を、發見する事もないとは云ひない、然らば我母は、我が産れて後に出來たものである、即ち我は我母より前に出來て居たとも云へる？．．．．何んだか解らなくなつて來た、未だ醉が醒めきらぬと見える。

新刊批評

▲脚本大農

田川大吉郎編輯　金尾文淵堂發行

今年の春「都新聞」社の懸賞に當選した脚本で、佐野天聲氏の作である。加納務と云ふ軍人上りの新地主——曾ては露國の捕虜となつて親父から自殺せよとて村正の短刀を送られたが、捕虜になるのは天運で決して耻づべき事でないと平氣の平左で村に歸り、積極主義、活動主義、健闘主義、大農主義を主張し又實行して、村人に惡まれ、父に死なれ、妹に捨てられ、妻に死なれ、子に死なれても、其希望大志を抛たず、戰地に於て生命を助けた三輪大尉の妹菊枝と結婚して又新たなる生活の舞臺に入ると云ふのが一編の荒筋である。務の父安藏、鍛冶の慶次、妻康子の父駒井順一なども面白き人物であるが、そんなによく活動して居らぬ。務の從弟の小松蘇彌などは甚だ不自然な譯の分らぬ人物である。要するに此脚本の長所は積極主義、活動主義を鼓吹せんとしたる所にあるのだが、藝術品として見る時は甚だ慊らざる點が多くある。

第一、人物が餘り多過ぎること、而かも個性の明瞭なるもの殆んどなきこと。第二、聞て耳に明瞭ならざる言語多く、殊に長科白の文句は殆んど總て不自然なること。などは最も甚しき缺點で、吾輩はどうしても之を以て好脚本と認むることは出來ぬ。但し芝居に演じて見たら（九月の本郷座）案外引立ち相に思はるゝ處がないではない。第二幕目の最初

の醫者踊は見る目美はしかるべく、第四幕目の最後は悲壯なるべく、大詰は痛快なるべし。殊に高田の務は可なりの適り役だらうと思ふ。又三輪大尉が序幕にチヨイと出て又大詰にチヨイと出て來るなどは只筋を運ぶ爲めの人形の如く思はれて非常に不自然になることも作者としては大いに考ふべきことであらう。附錄として桂華氏の「豐公醍醐花見宴」神前氏の「修羅地獄」があるが、桂華氏のゝは筋は古いが才華爛漫、舊劇の中幕などにしては殆んど言ひ分のなきものと思ふ。「修羅地獄」は讀まぬ故に評なし。(哲生)(定價五十錢)

▲大日本民族史(第一編)

伊藤銀月著
隆文館發行

著者の自序の一節に曰く「予は國民の資格を全うすべく、情熱ある國民たるべく、好んで自國の歷史を研究す、而して研究したる結果を發表す、予の歷史は學者にあらず、情熱ある一日本國民の歷史に對する望のみ」と以て著者の本書に對する抱負を窺ふべく、讀者の要求が他の歷史書に對するそれと異ならんことを求めたるものとも解し得べし。此書草創時代、神國時代より說き起して僅かに奈良朝以前に於て筆を止む。吾輩はかゝる著述を何故に一册とせずして分册として發行したるかを怪む。文章稍々客氣に驅られたる理ありかゝる大題目に對しては少しく輕きに失するの嫌あれども筆力縱橫間々痛快案を拍たしむる所なきにあらず。何れ續編の出づるを俟て精評すべし(定價六十五錢)

▲乾胡蝶

村山島逕著
祐文社發行

村山島逕氏の短篇集である。嘗て本誌に出た「坦道」「生効」を初め、外六篇、合せて八篇を收めてある。何れも才氣がある丈け、夫れ丈け拵へ物のやうに感ぜらるゝ處はあるが、何處かに新らしい趣もないではない。只時々いやに文句をひねつて一寸鼻につく處がある。「はしがき」の如きは其短所を極端に出したものだ。氏の如き新らしい人も尙かゝる「古き技巧」に囚はれて居るは甚だ慊らず思ふ。吾人は今少し氏の自覺し、奮動せんことを望まざるを得ぬ。(定價五十五錢)

▲桃園漫筆

故大村仁太郎著
精華書院發行

獨逸語學者、故大村仁太郎氏の漫筆及び講演筆記を集めたものである。氏は語學者、教育家又は事務家であるから、思想又は文學上から此漫筆を評することは酷であらうと思ふ。然し「獨逸現代の文學に就て」「獨逸の演劇」などは專門に近い事であり、或は實地觀察した所である丈け興味が多い。(定價一圓)

▲不知火

大倉桃郎著
金尾文淵堂發行

「大阪朝日」の懸賞小說第二等に當選したものだ。僕等には第一等の。「嫁が淵」よりもよいやうに思はれる。勿論「嫁が淵」ほどの結構の變化がないが、夫れ丈けあれよりも不自然な所が少いやうだ。然し結末のめて

たしに終るのは何だか、とつてくつつけたやうに思はれる。兎に角大倉氏の筆力はなか／＼侮り難いものだ。（定價六十五錢）

▲うまやぢ　　東　白頴著　水戸右文館發行

「いばらき新聞」の社員が茨城縣下を徒歩旅行したる紀行文也。同縣の風俗人情等を知る參考となるべし（定價七十錢）

▲不死の誓　　佐野天聲著　金尾文淵堂發行

「帝國文學」の懸賞に當選さるべかりしを、事情ありて著者より撤回し、文淵堂より出版することとなりたるもの也。場所は巴里、ゼネヷ、アントワープ等にて人物も半ば外國人也。沙翁劇などには羅馬又は伊利太人など平氣に英語を語り居る所を描きあれど、吾人は最早やかゝる不自然のことを成るべく避けたき心地す。「古しへの人はネグロを彫るに大理石を以てしたれど吾等は黑き石を以てせんと欲す」といへるイブセンの言深く味ふべし（定價六十錢）

▲グラッドストン言行錄　　畔上賢造編　内外出版協會發行

「偉人研究」の第四編として發行せられたるもの也。内容は「グラッドストン評傳」と云ふべきものにて「言行錄」と名つくるは如何はしけれど、かゝる大人物の研究は何れの方面よりするも有益なることは疑なし。我國の政治家などの人物は極めてつまらぬものにて一國の儀表となる許如き人の甚だ尠きを思へば、今後の政治家たらんとする今日の青年にかゝる人物を知らしむるの必要は極めて多かるべし。只本書も片々たる小冊にして說いて精細ならず、語つて未だ盡さゞるが如き感あるは惜むべし（定價廿五錢）

▲少女の戀　　田山花袋著　隆文館發行

何れも皆やさしい溫かい情味の籠つた作物數篇を集めたものである。勿論今日の氏が描くものに比べては幼ない所はあるが、今日の自然派の驍將と目されて居る無技巧の主張者もかゝる逕路を通つて來たと思ふと。其間に一種の面白味もあり、又今日の氏を一層明かに知るの便もあるやうに思ふ。此篇に收められた中では極めて短い物の方に比較的よい物があるやうに思はれる。（定價八十五錢）

▲雲煙過眼　　梅原龍北著　寶文館發行

龍北氏の漫筆を集めたるもの也。文も想も傑れたりとはいふべからざるも概して穩健の見に富めりといふべし。（定價五十錢）

▲奈落　　德田秋聲著　金尾文淵堂發行

「中央新聞」に連載されて好評を博した物である。何時もの秋聲氏とは調子が少し違ひ、主として變化に重きを措かれた様である。秋聲氏の才

の多方面なるは驚くべく、殊に此れを書いた時は「國民」の「姫」も一方に書いて居られた時だと聞いては益々驚かるゝ。秋聲氏の重きを加へる作ではなからうが、秋聲氏の才の多角的なるを示すに足るものと思ふ。

（定價七十錢）

▲革命奇談神愁鬼哭

幸德秋水譯
隆文館發行

一時歐洲の讀書界を驚かした露國社會民立主黨の一首領レナ、ドキッチ氏の著「西比利亞に於ける十六年」の抄譯である。事實の悲壯、譯筆の勁健相俟て一寸面白き讀物である。年若き社會主義者などの歡迎を受くることであらう。（定價四十錢）

▲岩窟集

水谷不倒著
金尾文淵堂發行

余は流石に暢達な樣であるが、どことなく堅い所があつて、今の文壇には到底向きさうもないものである。吾輩も三分の一許りしか讀まぬから全體は分らぬが、要するに新聞小説などを面白がる人にのみ喜ばるべきものであらう（定價四十五錢）

▲淀殿（第一篇、第二篇）

塚原澁柿著
隆文館發行

我國唯一の歷史小説家澁柿園の作也。本書完結の上精評せんと欲す

（定價七十五錢）

▲沈思錄

浩々洞全人著
金尾文淵堂發行

「精神界」を發行せらるゝ浩々洞仝人曉烏敏、多田鼎、佐々木月樵氏等の文を集めたものである。俯々文に役せられたる形なきにあらざれども、概して平靜の想を述ぶるに穩雅の筆を以てす。讀んで精神上の益となること尠からず（定價六十錢）

▲松山颪

廣津柳浪著
隆文館發行

此の作決して代作ではなかろう、だか傑作でもない五六年以前にはこの風の作が讀書界を風靡した事もあつたかそれも今や已んぬである、筋は久子と云ふ夫ある女が誘拐せられて不義に陷る、義弟の千代さんが病氣で歸つて來たので後悔する、だか其の相手たる鼎と云ふ男、妻も子もある身體でありなから、愛の爲めには何物も眼中にない程熱して居る、事件は之れから起つて、「久子は鼎の刄に倒るゝと云ふに終る、」結末に日く、千代太郎は此の後桐ケ谷に淋しい日を送つて居ると云ふ、紋切形の言葉か殿後をなして居る、とは云ふものゝ事件の發展層々として迫り出たす手腕は流石なものだ、駈け出すの新大家の出來ぬ藝である、或人曰く、之れを出す已に五六年を晩くれたりと、惜しい事をしたとの意味ではなかろう。（定價七十五錢）

▲鷗心錄

浩々歌客著
金尾文淵堂發行

各雜誌各新聞に一度載せた文章を收錄したもので、評論の範圍は文學、哲學、宗敎、社會、敎育と、頗る多方面に亘つて居る、終りに曩年もの

譯文等も收めてある、全體に淸棄とか雅瀞とか名くべき文致だが、然かし著者の筆は畢竟評論の雄であつて、その外のものには長技を許す譯には行かぬ。（定價金六十錢）

▲山田先生說敎集　藤岡潔著　警醒社書店發行

山田寅之助氏が青山學院敎會の牧師時代の說敎を、頃に收錄したものだ、氏は神學校に居りて說敎の指南をした程あつて、所說體を得、微を盡し、頗る言論の雄に見らる、讀んで難澁の痕がなく、基督の信仰に知らず〳〵誘ひ入れる力がある。（定價金四十五錢）

▲谷中村衰亡史　荒畑寒村著　平民書房發行

谷中村事件は栃鑛毒と終始して、絶えず人目を引いた歷史を以て居る、今や此村は施政者の壓力の下に事實に於て亡びて居る、著者痛惋の筆を振つて即ち此篇をなしたのである。（金三十五錢）

▲高山植物叢書　前田曙山著　櫻南堂發行

著者が親しく山を越え谷を涉り、幾年の歲月を費れて研究し得たる高山植物をば一々、その所屬の科より根莖葉花の細目に度り、圖を迄挿みて丁寧に說明したるもの、更に付するに一般の培養法を以てして居る、特志の研究家には多大の利益ある事と信ずる。（定價金一圓）

▲大英貴賓の日本觀　小田榮雄譯著　博文館發行

英國皇甥コンノート殿下の隨員として我國に來れるリーズデールとは、曾て四十年の昔に於て、同國公使館員とし、我國に在任したりし人、即ち前後兩府に見たる日本の國勢を比較し、解說したるもの、同情ある英人の眞摯なる評論は此書によりて窺うことが出來る、行文も流麗である。

▲婦人問題　堺利彥著　文淵堂發行

性慾、未成熟なる男子、奴隷なる女子、自由の女子、過去の結婚、將來の結婚、自由社會等その他尙ほ章を重ぬる事七、忠實に女性問題を研究したるものだ。（定價金四十錢）

▲世間（後篇）　廣津柳浪著　粘文社發行

前篇を受けて、淸雄が自分に抱く一種の希望の爲に、到底桃山家を相續出來ぬといふのに、一面春子の戀は彌募りに募る、春子には又從弟の千吉の戀が絡む此間の關係が妙にこんがらかる、太仲は親心にならぬと知りつゝ淸雄に對する娘春子の戀を叶へてやりたく、間の苦い取持役を夫人の喜美子に命ずる、喜美子は之に心を碎いて居る中、突然降つて湧いたる身の難題、元喜美子の實家の厄介になつた、それて恩知らずの海

野幸助といふ奴から、喜美子の桃山家へ來る前の、舊い名義上の緣談を種に强請と出た、喜美子の至誠に動かされた清雄は、粉骨碎身の精忠を抽てることになつて頻に奔走する、春子の事は暫く等閑になりて居る、筋は此處迄亘つて終になつて居る、未だ續篇が出るのであろうから、評は完結の上でする（定價金六十五錢）

▲日本武士道史　蛯川龍夫著　博文館發行

武士道は日本の特有の一種の道德である、が武士道問題の最も盛に研究されるに至つたことは、日露戰爭以後で昨今に於てその最高潮を極めたのである、が唯武士道とは何ぞやの研究が多くて、武士道の淵源を歴史的に調べたものは少い、此書は遠く筆を神代の事蹟に起し、近く現代にまで貫いて、脈絡を尋ねたので、換言すれば日本民族精神發達史である。（定價金八十錢）

▲新綠（下卷）　小山内八千代著　金尾文淵堂發行

寄贈を受けたのは下卷だけであるから、筋の全體に就いて兎や角ういふ事は出來ぬ、が文品は流石は女流の筆で、對話に缺點がなく、情緒の微細な點をまで現して居るが、如何も現れる女性の孰れを見ても上走つた蓮葉な性格が多く、涙を迫る樣な戀が見えぬ男性を描いても實際には如何あらうかと傾かるゝ樣な、お芝居がゝつた節々があるのは如何だろう、が上下を照應して見たら惡癖が又變るも知れぬから、先づその文品をだけ稱えて、他は暫くお預りとしやう、（定價金六十錢）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

中央公論本社直接 購讀の諸君に告く

本號（九月號）は諸君の見らるゝ如く各欄材料豐富にして百九十頁に相上り候に付特價金貳拾參錢郵税金壹錢五厘と相成候間一部に付金五錢高と御承知被下度隨て次回御拂込の節併せて御送金奉願候也

八月二十八日

反省社庶務部

眞宗婦人會總裁本派御裏方御題歌

婦人の救ひ

定價參錢
郵税五冊迄二錢

他力淨土の敎と御婦人方との關係を一篇の物語とし極めて面白きうちに御法の味を知らるるのはこの冊子でしやう。御婦人方の一番大事な觀經のゆわれをごく分り易く、やわらげて小說の樣に說いたのはこの本です。殊に卷の初には本派御裏方御直筆の色紙一枚を寫眞版にて掲げてあります。どーか御求めの上廣く法悅を頒つ樣にして戴きたい

發行所 東京本郷區西片町十番地 婦人社

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁 紙質上等

定價金五拾錢 郵税八錢

本書の世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり

其配列には特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて短簡に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷史中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尙各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番） 反省社

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋銀座四	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋區鎗屋町	良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾五錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

本號に限り定價金貳拾參錢（外に郵稅金壹錢五厘）

冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金拾八錢	內國金一錢	金拾九錢
		外國金六錢	金廿四錢
六冊	金壹圓	內國金六錢	金壹圓六錢
		外國金卅六錢	金壹圓卅六錢
十二冊	金壹圓九拾五錢	內國金十二錢	金二圓七錢
		外國金七十二錢	金貳圓六拾七錢

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名並に社名を記し拂渡局所を東京駒込と指定せられたし
一弊社は振替貯金三十四番に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられべく候
一郵券代用の場合は必ず壹割增のこと
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治四十年八月廿八日印刷
明治四十年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　清水金右衛門
東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



銀製洋盃及木盃

紀念御附與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一七圓五十錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味六十九匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一（文字彫刻　一字　金拾錢
　 大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五　一二四四）